



建築と社会

Architecture and Society

特集 建築とインテリアを創る
真のプロフェッショナル

2021 12

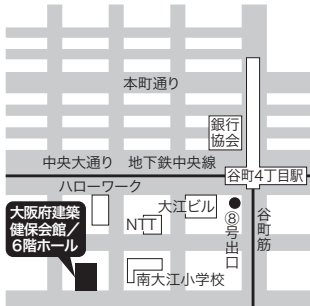
vol.102 No.1197

日本建築協会

2021年度 建築工事実務講習会

〔この講習会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラムです。(7単位)〕

■講習会会場(大阪府建築健保会館)
交通：地下鉄谷町線・中央線谷町
四丁目駅 8号出口より徒歩 5分



日時：2022年 1月20日(木)
9:00~17:30
(受付8:45~)
会場：大阪府建築健保会館
6Fホール
大阪府中央区和泉町2-1-11
TEL: 06-6942-3622
定員：45名(先着順)
受講料：16,500円(含テキスト代 税込)
※テキスト当日配布

■申込方法

FAXまたはE-mailにて、
①催し名「実務講習会」
②受講者氏名(年齢)
③事業所名
④受講票送付先住所
⑤担当責任者
⑥E-mailアドレス
⑦電話番号
⑧受講料支払方法(銀行振込、郵便振替、等)
⑨CPDを申請される方は、申請先の団体名と参加者IDをお知らせ下さい。
受講料は、前納制となっておりますので、併せて銀行振込、郵便振替等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講票を送付します。
なお、当会HPからもお申し込いただけますので、<https://www.aaj.or.jp>をご覧ください。

■趣旨と内容

- 本講習会は、建設業はもとより、官公庁・設計事務所・設備会社など幅広い分野の中堅以下の技術者を対象としたものです。
- 現場実務の基礎である「施工計画」と「仮設見積」に重点をおき、講義します。
- 都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。

■申込先

(一社)日本建築協会(担当 内山)
〒540-6591
大阪府中央区大手前1-7-31 OMM7F
TEL: 06-6946-6981/FAX: 06-6946-6984
E-mail: jigyoka@aaj.or.jp

<振込先>

- 三井住友銀行
大阪中央支店 普通 0860034
- 三菱UFJ銀行
瓦町支店 普通 0210054
- りそな銀行
北浜支店 普通 0272234
- 郵便振替口座 00910-9-39975
名義 シャ)ニホンケンチュクキョウカイ
一般社団法人日本建築協会

定員を従来より減らし、新型コロナウイルス感染防止対策を行い開催いたします。ぜひご参加くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。
※セミナー当日は必ずマスクを着用していただき、発熱・咳等の症状が見られる場合には、受講をご遠慮ください。
入金後、受講者を変更される場合は受付時にお知らせください。

■科目・講師

施工計画

谷本 達哉 氏

(株)浅沼組大阪本店
建築部品質管理室主任

永野 浩一 氏

(株)竹中工務店大阪本店
技術部企画管理グループ部長

施工計画は、品質を確保し、安全で能率よく経済的に本体工事を進める鍵にぎっています。この講習会では、仮設から地下、躯体、仕上、設備にわたり、適切な施工計画の要点をわかりやすく解説します。

仮設見積

吉田 克寿 氏

(株)大林組大阪本店
建築事業部生産技術部計画第三課長

仮設工事費は、非常に把握しにくい面があって、ついつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

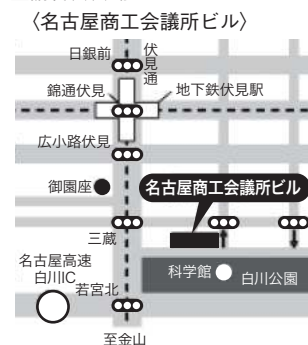
令和4年 在阪建築15団体 合同新年交礼会 中止のお知らせ

長引くコロナ禍の状況を見据え、令和4年の新年交礼会の開催の是非について、在阪建築15団体の会長・支部長が協議いたしました結果、各団体ともにコロナ禍によって事業や行事も満足に実施できていない現状を鑑み、また府の要請に照らして、感染リスクを避けるために中止することと決定いたしましたのでお知らせいたします。

日本建築協会東海支部主催 建築工事实務講習会

この講習会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラムです。
(公社)愛知建築士会 (6単位)

■講習会会場



日時：2022年 1月19日(水)

9:30~17:00

会場：名古屋商工会議所ビル 9階

愛知建築士会内

名古屋市中区栄2-10-19

定員：40名(先着順)

受講料：16,500円(含テキスト代 税込)

※テキスト当日配布

■申込方法

FAXまたはE-mailにて

①講習会名

②郵便番号・住所

③受講者氏名・年齢

建築CPD単位申請希望者は氏名の
下にCPD登録番号を明記

④事業所名

⑤申込担当者名

⑥電話番号・FAX番号・E-mailアドレス

⑦受講料支払方法(銀行振込等)

受講料は前払制となっていますので、
併せて銀行振込等で納入して下さい。

受講料入金確認後、受講番号をE-mail
またはFAXで通知します。なお、日
本建築協会東海支部HPから受講申込
書のダウンロードができますので、
<http://www.aaj-tokai.jp>をご覧ください。

■締切日 2022年1月12日(水)

但し、定員に達し次第締め切ります。

<振込先>

●三菱UFJ銀行

栄町支店(普通 0167157)

シャ)ニホンケンチクキョウカイトウカイン

一般社団法人日本建築協会東海支部

■申込先

(一社)日本建築協会 東海支部

〒460-0008

名古屋市中区栄2-10-19

名古屋商工会議所ビル・9階

(愛知建築士会内)

TEL: 052-990-6410

FAX: 052-201-3601

E-mail: info@aaj-tokai.jp

URL: <http://www.aaj-tokai.jp>

定員を従来より減らし、新型コロナウイルス
感染防止対策を行い開催いたし
ます。ぜひご参加くださいよう、
よろしくお願い申し上げます。

※セミナー当日は必ずマスクを着用し
ていただき、発熱・咳等の症状が見
られる場合には、受講をご遠慮くだ
さい。入金後、受講者を変更される
場合は、事前にお知らせください。

■趣旨と内容

●本講習会は、官公庁・設計事務所・
建設業をはじめ、設備・営繕など幅広
い分野の技術者を対象としたものです。

●現場技術者の初級者を対象に、と
くに取り扱いにくい施工計画と仮設
見積、現場実務の基礎である積算業
務に重点をおき、講義します。

●都市環境の変化に伴う法令・基準
の改正なども加え、技術の進歩に即
応した知識の習得をはかります。

●積算業務では具体例により、その
着工準備から完成に至るまでをわか
りやすく解説します。

施工計画

日吉 智紀氏

清水建設株名古屋支店
生産技術統括部生産技術グループ主査

適切な施工計画を立案できることが
建築現場技術者の必須条件です。安
全で、経済的な施工計画を解説します。

仮設見積

奥田 崇氏

株大林組名古屋支店
建築工事部建築生産技術第一課長

仮設工事費は、一般には非常に把握し
にくい面があって、つつい単位面積
当たり、あるいは請負金比率のみで処
理されがちです。施工計画に基づいた
合理的で迅速な見積方法を解説します。

積算業務

平松 善之氏

株竹中工務店名古屋支店
見積部建築2グループ課長

見積業務のなかで基本となるのは、
数量積算です。この手順・基準を基
本に、より合理的で正確な積算業務
を解説します。

主催：(一社)日本建築協会京都支部
共催：(公社)日本建築家協会近畿支部京都地域会

令和3年度第2回セミナー

『「わびすき」と「きれいさび」からみた茶の湯空間』

CPD 2 単位
オンラインおよびリアル
(8 名) で開催します。

■日 時
2021年12月10日(金)
18:00~20:00
(質疑応答含む)

■概要

茶室は自然を映した建築です。日本人は、四季折々の美しい自然を愛で、また地震や台風などの脅威に人の力を越えた偉大なものを感じていました。茶室はそういった日本人の自然観を、心でそして具体的な形で表現したものです。平等な空間という概念も、大自然の元に形成されました。この度のセミナーでは、「わびすき」と「きれいさび」をキーワードに、自然を映した建築としての茶の湯空間について、その形の謎を解き明かしていこうと思います。

■講師プロフィール

桐浴邦夫 (きりさこ くにお)
京都建築専門学校副校長、京都工芸繊維大学 大学院修士課程で中村昌生先生に師事。東京大学博士(工学)。専門は、建築歴史意匠、茶の湯文化、伝統建築保存活用。
著書に、『茶の湯空間の近代』(思文閣出版、茶の湯文化学術賞奨励賞を建築分野で初受賞)、『世界で一番やさしい茶室設計』(エクスナレッジ)、『近代の茶室と数寄屋』(淡交社)、『茶室露地大事典』(共著、淡交社)、『和室学』(共著、平凡社)など。
一級建築士。茶名 宗邦。

■参 加 費 会員1,000円(主催、共催者共)、一般1,500円、学生無料

■会場定員 8名(先着順)

■会 場 京都建設会館別館4階会議室(京都市中京区押小路通柳馬場東入橋町641)

■会場最寄駅 地下鉄「市役所前」駅より徒歩7分、地下鉄「烏丸御池」駅より徒歩10分

■申込方法 ①講演会名「12/10セミナー」
②氏名
③携帯電話番号
④勤務先または学校名
⑤会員・一般・学生の別
⑥オンライン・リアル参加の別
⑦E-mailアドレスまたはFAX番号
⑧CPD申請される方はID番号

上記項目を明記し下記口座にご入金いただき明細票添付の上、FAXまたはメールで下記へお申し込みください。
※オンライン参加の方は必ずメールにてお申込みください。また受付後の連絡のためFAXまたはE-mailを必ずご記入ください。

■振 込 先
みずほ銀行 京都中央支店
普通口座 1636694
シャ) ニホンケンチクキョウカイキョウトシブ

■申 込 先
(一社)日本建築協会京都支部事務局
FAX 075-255-6077/E-mail: kyokai-kyotoshibu@kyoto-kenchikushikai.jp



玉林院 蓑庵



慈光院



擁翠亭

※セミナー当日は必ずマスクを着用していただき、発熱・咳等の症状が見られる場合には、出席をご遠慮ください。

特集記事ホームページ公開のお知らせ

今月号の特集「建築とインテリアを創る 真のプロフェッショナル ものづくりのものがたり。」の記事を、特別にホームページ(<https://www.aaj.or.jp/>)で公開します。

“こだわりの企業”それぞれの“ものづくり”をぜひご覧いただけるよう、非会員のみなさまにもお声がけください。

建築と社会

Architecture and Society
Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2021 12

Vol.102 No.1197

■特集予告

- 1月号／建築と社会の夢をつなぐ
- 2月号／第28回会員作品 “私の空間作法”

| 今月の表紙

撮影者：森本 勉

撮影場所：大阪市 大阪城公園

撮影時期：2021年10月

写真について

生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2021「スペシャルツアー 日本建築協会 Presents! 近代の大阪城址を歩く」の一幕。日本建築協会教育委員会の史料研究会と事業委員会情報見学小委員会が共同して開催しているまち歩きツアーの第三弾イベントである。今回は関西大学准教授の橋寺知子先生と大阪芸術大学名誉教授の山形政昭先生に加え、大阪工業大学教授の福原和則先生、大阪歴史博物館学芸員の阿部文和氏を講師に迎え、情報見学小委員会の委員がスタッフを務めた。コロナ禍の現状を鑑みてこれまでより募集人数を少なくし、秋晴れの大阪歴史博物館から大阪城までをゆったり散策した。

写真は西の丸庭園にて山形先生から説明を聞く参加者。

特集 建築とインテリアを創る 真のプロフェッショナル

ものづくりのものがたり。

【PROFESSIONAL FILE】

- | | | |
|----|--|----|
| 01 | 広島から、木製家具を通して発信する「工芸の工業化」
●マルニ木工（木製家具） | 8 |
| 02 | 創業以来特注 1 本 ガラスのオートクチュール
●中日ステンドアート（ガラス工芸） | 12 |
| 03 | 倒れても砂をつかんで立ち上がる、そんな集団でありたい
●北海鉄工所（モニュメント・特殊金属加工） | 16 |
| 04 | 特注カーベットの要点と新たな挑戦
●川島織物セルコン（内装メーカー） | 20 |
| 05 | 100%再生材化によるリサイクルプログラム
●愛知（公共・教育施設家具） | 24 |
| 06 | 暮らしに息づく花の価値
●KTION 川崎景太（フラワーアーティスト） | 28 |
| 07 | トイレの微生物汚れと臭いの対策に関する研究開発
●TOTO（衛生機器） | 32 |
| 08 | 職人文化復活への最後の試み●職人社秀平組 扶土秀平（左官） | 36 |
| 09 | やきものを極めたい●織部製陶（タイル） | 38 |
| 10 | 森と水／成長と成熟の物語 テキスタイルが主役となるホテル
●NUNO（テキスタイル） | 40 |
| 11 | 石を訪ねて。——大蔵山探訪記●大蔵山スタジオ（伊達冠石採石） | 42 |
| 12 | 伝統産業×観光産業によって高岡と世界を繋ぐ●能作（鋳造） | 44 |
| 13 | limitless, borderless, timelessなデザインを日本、そして世界へ。
●インテリアズ（輸入家具） | 46 |

会告	2021年度建築工事実務講習会（本部） 2022年在阪建築15団体合同新年交礼会中止のお知らせ、 2021年度建築工事実務講習会（東海支部） 京都支部主催 令和3年度第2回セミナー『「わびすき」 と「きれいさび」からみた 茶の湯空間』 特集記事ホームページ公開のお知らせ	1 2
作品作風	大阪複十字病院	4
gallery	変わらない想い●吉田 誠	6
法令コーナー	「京都市都市計画マスタープラン」の見直し —京都の特性を踏まえた持続可能な都市構造の実現に 向けて—●家村直宏	49
設備の頁	RFIDタグによる室内環境センシングシステム●渡邊啓生	50
再読 関西の建築	大阪府立夕陽丘図書館 ●阿部文和	51
建築と社会を 考える	ドン・キホーテまちに出る ～みんなの計画、役所の支援～●芦田英機	56
Member's Forum	イケフェス大阪2021スペシャルツアー 日本建築協会Presents! 「近代の大阪城址を歩く」レポート U-35委員会企画 talk baton 19 活動報告	60 63
information	深堀隆介展「金魚鉢、地球鉢。」／生誕160年記念 グラ ンマ・モーゼス展 素敵な100年人生／ザ・フィンラン ドデザイン展 自然が宿るライフスタイル／特別展 貝 殻旅行 —三岸好太郎・節子展—	66
月間の動き	2021年10月	68



北東外観



病院アプローチ

大阪複十字病院

建築主 一般財団法人 大阪府結核予防会
設計・監理 竹中工務店
施工 竹中工務店・前田組共同企業体

寝屋川公園に隣接する150床の総合病院の老朽化に伴う駅前区画整理事業地内への移転計画である。

■つながる病院

新病院の計画にあたり病院ユーザーである「患者」「医療従事者」「地域と社会」それぞれのつながりを通して病院の未来への発展につなげる「つながる病院」を基本コンセプトとした。

■建物構成

建物上層3フロアは病棟で低層に外来診療機能等を配置している。1階に外来診療機能を集約しており効率的で患者にやさしい医療の提供を可能とした。2階には健診センターを外来機能とは独立して設置し健診受診者に配慮した。

■地域・社会のつながり

外装はシックなグレーを基調とし、新たな街区に落ち着きと安心を与えている。病院アプローチには道路に正対して大庇を設置し、1階待合をガラス張りとする事で建物と周辺地域をつなげる中間領域を形成している。

■患者のつながり

病棟デイルームは建物北側ではあるが新設道路に面した側に設置し、入院中も周辺環境や地域とのつながりを感じられるようにした。4床室はベッド配置を千鳥とし、患者の視線交錯に配慮した。ベッド間の足元に設置した排気口には療養型病棟の多床室などでは臭気と感染対策用の強制換気システムを導入している。

■医療従事者のつながり

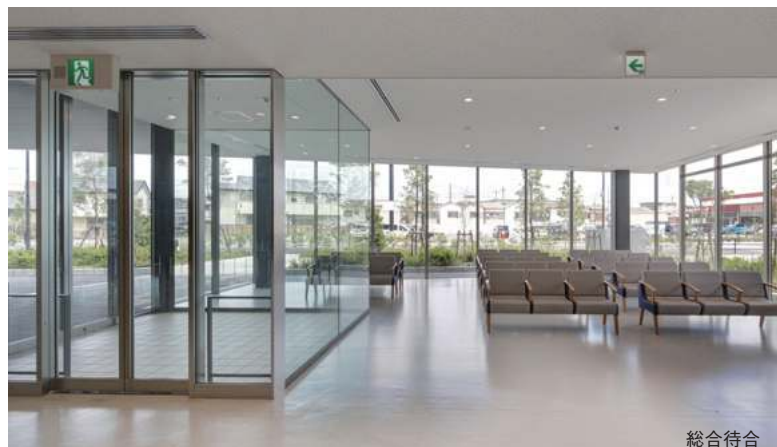
事務医局はワンルーム形式で管理者個室もガラス張りとしてチーム医療の活性化を図るようにしている。又、職員休憩室は1か所に集約し職員間の交流を促すようにしている。

■感染制御と省エネルギーの両立

本病院は30床の結核病棟を有し、感染制御は重要な課題であった。感染制御と省エネルギーを両立させるべく合理的かつ効果的な設備計画によりCASBEEはAランクを達成した。

(黒谷哲也／竹中工務店)

所在地 大阪府寝屋川市打上高塚町3番10号
敷地面積 5,950.41㎡
建築面積 2,366.23㎡
延床面積 10,056.88㎡
構造規模 S造 地上6階
工期 2020年1月～2021年3月
最寄駅 JR学研都市線 寝屋川公園駅
撮影 古川泰造



総合待合



外来待合



光庭とデイルーム



4床室



結核患者用テラス

変わらない想い

建築写真家

吉田 誠

建築写真に携わる様になって30年近く経つが、未だに日々試行錯誤しながら現場に立っています。10年程前まではフィルム時代でした。暑い夏の日でも黒い布を被り、画面が逆さのファインダーを覗きながら一枚一枚フィルムを巻き上げながらの撮影でした。撮影後は現像所にフィルムを出し、緊張しながら仕上がりを待っていた事を思い出します。現在はデジタルカメラになり、機材も軽く、撮影枚数も気にする事なく、現場で画像を確認する事も出来ます。ただ撮影後は膨大なデータ調整作業が待っています。

時代の流れと共に撮影環境も激変しましたが、撮影現場では変わらない想いがあります。それは建築の周りにある出来事との関係性を大切にすることです。建築と人、自然環境、都市環境などの関わり方みたいなものです。そのイメージを意識して撮影し始めたのは1997年撮影の安曇野ちひろ美術館、1998年撮影の吉備高原小学校（写真1、2）あたりからでした。その頃はまだ建築雑誌などの多くは人入りであってもスケール感を表すだけの誌面だったと思います。しかし、もっとスケール感ではない『何か』を活写したかったのかもしれない。言葉では表現しづらいのですが、臨場感みたいなものなのかもしれません。設計者がイメージしてきた空間が使われだして、ようやくリアリティーが空間内に満ちてくる。建築がもたらすリアルな瞬間と関係性を紐解きながら、自分の中で整理してから撮影しています。また最近はドローン撮影もあります。トンボ目線位の高さにすると、建築とランドスケープ、人と周りの環境の関係性が分かるアングルになることもあります。（写真3）今後も撮影環境はいろいろと変化していくと思いますが、30年変わらない想いを持ち続け、言葉ではなかなか言い表せない『何か』を追求しながら撮影して行きます。

吉田 誠（よしだ まこと）

1967 東京都生まれ
1990 日本大学生産工学部
建築工学科山口研究室卒業
1996～ 日経BP社映像部勤務
2000 吉田写真事務所設立

吉田写真事務所 HP
<http://yoshida-image.com>

企画編集：藤原 寛（作品作風小委員会）



※ 1



※ 2



編集委員からの質問

Q：撮影の際、かなり光には気を使われているように見受けましたが、写真において光がもたらす影響はどのように考えておられますか？

A：光の捉え方によっては写真の出来栄はまるで違う印象の建物になると考えています。光が当たっていると光の角度や陰影によって空間の奥行きや立体感、テクスチャー感が増します。光の弱い時間では素材感は薄まりますが、より建物の面白さが表現できることもあります。あと、夜景写真というのもあります。ただ夜景写真が撮影できるタイミングというのは1日で30分ほどしかありません。日中の撮影時に夜景のアングルをイメージしておきます。建物と向き合い、光やタイミングを考えながら目には見えない大切な空気感みたいなものを感じてもらえるように心がけています。



※ 3



特集

建築とインテリアを創る 真のプロフェッショナル

ものづくりのものがたり。

建築とは、実にリアルなものづくりである。建設業界ではとかく建築家やインテリアデザイナー、ゼネコンが注目されがちであるが、その実、建設行為には数多くの企業や職人が関わっている。そして、現場のみならず、一つの建物を建てるために、日本中の工場や製作現場で心を込めてつくられたものが結晶のように集まって形を成している事に、今一度目を向けたいと思う。こだわりを持った様々な企業のアイデアや技術力の積み重ねがあつてこそ、人々が感動するような素晴らしい空間が出来上がるのだと思う。そんな彼らを、私は真のプロフェッショナルであると思う。それぞれが担当する範囲は、建物のごく一部分なのかもしれないが、そこに輝くような存在感を感じる事が多くある。完成品がおさまるまでに長いものであれば数年を要し、沢山の人が関わり、失敗を繰り返し、こだわり抜いた上でそこに「在る」のである。ものづくりには、完成品には見えてこない「創造の物語」があるということを、是非読者の皆さんに知ってほしい。そして、建築やインテリア空間において皆が普段目にする何気ないものにも、それをつくった人々の物語がこめられている事に目を向けてほしいと願う。

今回の特集では、インテリア空間を構成する様々な業種のプロフェッショナルから特に独自性を持つ13社に、ものづくりに込める各社の想いを語ってもらった。どれも企業活動そのものがドラマチックな物語に溢れている。日本中にこのようなプロフェッショナルが沢山居るのだと思うと、日本のものづくりはまだまだ健在であり、その叡智は測り知れないと感じる。この特集記事を通してものづくり集団の想いの熱量に是非触れて欲しい。

12月号編集委員幹事 竹中工務店設計部 黒柳 亮

FILE 01	マルニ木工	広島から、木製家具を通して発信する「工芸の工業化」
FILE 02	中日ステンドアート	創業以来特注1本 ガラスのオートクチュール
FILE 03	北海鉄工所	倒れても砂をつかんで立ち上がる、そんな集団でありたい
FILE 04	川島織物セルコン	特注カーペットの要点と新たな挑戦
FILE 05	愛知	100%再生材化によるリサイクルプログラム
FILE 06	KTION 川崎景太	暮らしに息づく花の価値
FILE 07	TOTO	トイレの微生物汚れと臭いの対策に関する研究開発
FILE 08	職人社秀平組 挾土秀平	職人文化復活への最後の試み
FILE 09	織部製陶	やきものを極めたい
FILE 10	NUNO	森と水／成長と成熟の物語 テキスタイルが主役となるホテル
FILE 11	大蔵山スタジオ	石を訪ねて。——— 大蔵山探訪記
FILE 12	能作	伝統産業×観光産業によって高岡と世界を繋ぐ
FILE 13	インテリアズ	limitless, borderless, timeless なデザインを日本、そして世界へ。

企画：インテリア・住宅系分科会

写真：大蔵山の石切り場（写真提供：大蔵山スタジオ）

木製家具 株式会社マルニ木工

maruni



マルニコレクション

広島から、木製家具を通して発信する「工芸の工業化」

株式会社マルニ木工 代表取締役社長 山中 洋

聞き手：黒柳 亮 東奈生子

広島から世界へ。「HIROSHIMA」という名の椅子に込められたマルニ木工の想いを、同社社長の山中氏に語っていただきました。

「HIROSHIMA」が生まれた背景にはどのような物語があったのでしょうか。

ミラノへの挑戦という体験から。

私は1999年に入社しましたが、入社当時はバブル崩壊後の経済低迷期真っ只中であり、クラシック調の家具を作り続けてきたマルニの売り上げは年々下降していました。何とか現状を変えていきたいと考えていたところ、プロダクトデザイナー黒川雅之さんから「nextmaruniプロジェクト」を提案いただき、思い切って挑戦する事にしました。このプロジェクトは「12人のデザイナーとの新しいものづくりを通して世界を目指しましょう」「過去のマルニを否定しましょう」という大胆な目標を持って、従来のクラシック調の家具から一転して、12脚のモダンな新しいプロダクトの製作にかかりました。デザイナーの方々は著名な方ばかりで、その中には後にパートナーとなる深澤直人さん（以下：深澤さん）や、ジャスパー・モリソンさん（以下：ジャスパーさん）がおられました。そして、ミラノサローネの期間にミラノ市内のギャラリーで12脚の展示会を開催したのです。すると、予想以上に大きな反響がありました。各デザイナーの知名度の高さから、来場者も多く、問い合わせも沢山頂きました。デザイナーの力による反響の凄さを感じた瞬間でした。

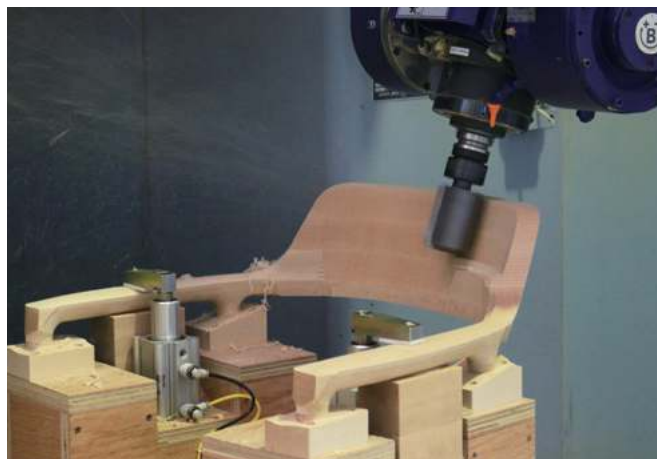


nextmaruniプロジェクトミラノサローネ展示会

しかし、いざ販売を開始してみると全く売れなかったのです。3年、このnextmaruniプロジェクトを続けてみたのですが、反響は良くてもなかなか思うように売り上げには結び付きません。一体原因は何なのか…。色々な角度から考えてみて、その原因は2つある事に気がきました。1点目は椅子単品だけでは、使うシーンのイメージがつかないことです。どんなにかっこよくても家でどう使えばいいのかが見えてこないのです。2点目は工場の作りやすさよりもデザインを優先したことによって価格が高くなってしまっていたことです。デザイナーズチェアであれば、少々高くても売れるだろうと慢心していましたが、やはり価格が高いと売れないという現実がありました。

そして、愛される椅子を生み出す。

しかし、この経験から得たものは沢山ありました。3年間の経験を活かし、デザイナーと組んでのものづくりに活路を見いだそうと、深澤さんをパートナーに選び、「使うための椅子」の開発を進めることにしました。その時深澤さんは、「家具は素人なのでどんどん押し返して欲しいし、理詰めで納得させて欲しい。デザイナーの要望や思いだけでなく、技術者の経験や知識を取り入れてこそ、本当にいいものづくりはできる。そうすることで讃岐うどんのコシのようなものが出てくる。」と言われました。このとき、お互いに素晴らしいパートナーとなる予感がしたのです。そして完成したのが「HIROSHIMA」です。



5軸CNC加工機によるアームを削る工程

Yチェアを超えるという想いを込めて。

“世界の定番”という言葉聞くことがありますが、当時も今も、世界的な椅子の定番はと聞かされると、多くの人がハンス・J・ウェグナーのYチェアを挙げるのではないのでしょうか。私たちは、そのYチェアを超える椅子を、日本、広島から生み出したいとの思いから、名前を「HIROSHIMA」として「地域から世界へ」を体現し、また通常だと定価12万となるところを、思い切ってYチェアの定価7万9千円（2008年当時）と同額にしたのです。勿論、大赤字スタートでした。しかし、その価格帯でないと世界で愛される椅子にはならないと考え、生産性の向上を信じて思い切って設定しました。かなりの冒険ではありましたが、逆に工場でも社員が一体となって改善を繰り返し、技術と生産性が向上していったのです。後付けですが、想いが技術を向上させる良い例になったのではと思います。

「HIROSHIMA」をプロダクトとして生産する上での技術やこだわりを教えてください。

デザインを実現する技術力を磨く。

プロトタイプを作って完成品に近づいた頃に、深澤さんに「後脚の径を0.2mm細くしてください」と、肉眼では分からない程度の変更を伝えられ、非常に驚きました。しかし、その妥協のないフォルムの追及が、心地よさそうで座ってみたいと思わせる佇まいになっていると思います。そして、身体に触れる内側は全て丸みをつけているのに対して、外側はエッジを立てる事で、座り心地と見た目のシャープさを両立出来るデザインとなっています。長時間座っていても居心地の良い椅子の条件として、身体に触れる部分に角がない事と、肘の位置が上げられます。人間は座っていると無意識に微妙に身体を動かしていますが、動いた先でも安定して身体を支えてくれて、角がない事が快適性に繋がります。椅子の開発は、勿論人間工学のデータに基づいて設計しますが、最後は人の感覚で微調整していくことで、快適性を高める事ができるのです。そして、このデザインのプロダクト化を支えているのが、マルニ木工が創業以来大切にしている「工芸の工業化」というモットーです。「HIROSHIMA」の背もたれとアーム部分を作る工程として、まず木の塊から、5軸CNC加工機（XYZの3軸に、回転と傾斜の2軸を加えた5軸でプログラミングを設定し、自在に木を削り出す機械）にかけて粗削りし、最後に人の手で磨いて滑らかさを出します。どのような順番、スピード、角度で木を削れば最も品質的に安定し、次の工程の作業が楽になり、コストを抑えることができるかという難題を、試行錯誤しながらプログラミングします。1秒、1ミリといった地道な改善を積み重ねて、発売当初の10年前は月にわずか40脚しか生産できなかったものが、いまではその20倍程度を生産できるまでに生産能力が改善されました。そして、今でも改善を積み重ねています。

また、左右の肘掛の木目が左右対称になるように、材料を選別する「木目合わせ」を行っています。同じ樹種でも、木が持っている表情は異なります。ベテラン職人の経験と勘で、削り出す前の塊の状態から、中の状態を予測して、合いそうな木を選定するのです。難しい作業ですが、木の家具というものは、木目が美しくあってこそ、デザインがより美しく感じるのです。



人の手によるアームの仕上



ミラノサローネ2019マルニブース

——「HIROSHIMA」を世界的な椅子の定番とするために
取り組んでいる方策をお教えいただけますか。

ひとつは何といってもミラノサローネです。2009年に初出展して以来、11年連続で参加しています。初年度から4年間は「ジャパンプース」という日本の家具メーカー3〜4社の共同ブースで出展していました。ただ、同業他社と同じブースでの出展では、ブランドの世界感を表現しにくく、5年目からは単独ブースに切り替えることにしました。しかし、サローネの会場は広く、中心となる1番ホールでないとなかなか「出会いたい人」に出会いにくいのも事実です。何とかその1番ホールへの出展を目指すべく、まずは海外での実績を創り上げようと、椅子一つを引っ提げてヨーロッパの家具市場に飛び込んでいったのです。まずはヨーロッパでしっかりブランドを確立したいという想いがあったので、ヨーロッパ

各国のトップディーラーに売り込みに行きました。そうすると、やはりモノの良さはきちんと伝わるもので、トップディーラー同士の紹介という「タモリのお友達作戦」(笑)が功を奏し、次第にヨーロッパ、アメリカで取り扱いが増えてきました。そして、ある日アメリカのディーラーから、サンプル200脚の注文が入ったのです。どんな会社かの情報もなく、です。一切教えてくれない。いったいどういう会社なのだろうと思っていたら、それがカリフォルニア州のアップル本社だったのです。1年後に数千脚の発注があり、タイトな納品スケジュールではありましたが、1万2千人が働く未来的なオフィスの社員食堂に「HIROSHIMA」の椅子が並べられたのです。その光景を見た時は感無量で涙が出ました。そして、これらの実績が認められ、厳しい審査を経て2019年のミラノサローネでは日本企業で初めて1番ホール(22番ホール:「S.Project」世界のトップブランドの中からコントラクト業界で大きな活躍をしている84社を集めた選抜ホール)への出展に繋がったのです。失敗も含めてやってきたことの全てが何かしら繋がっていて、今やっとYチェアへの道が見えてきたように感じています。

最後に、地域が世界と繋がる時代、広島を世界と繋ぐビジョンはありますか。

マルニ木工はあと7年で創業100周年を迎えます。その節目に向けて、広島の高島市の奥地にある工場を、地域の観光拠点となるような場所にしたいと思っています。僕らのものづくりの思想の原点を、地域の人々や世界から広島を訪れる人々と共有したいという想いがあります。地域と連携しながら、地域を盛り立てていきたい。そう考えると、実はできる事は沢山あって、考えるだけでワクワクします。これからはそういうことを地域がいろいろ発信する事で世界とダイレクトに繋がっていく時代になるのではないかと考えています。私たちは、家具というものづくりを中心に、広島から世界へと発信を続けていきたいと思っています。

マルニ木工 高島ショールームにて、「HIROSHIMA」に座って山中社長のお話を伺いました。さすがYチェアを目指して開発された椅子というだけあって、座り心地が素晴らしい。開発の物語を、この椅子で聞く贅沢…。とても幸せな時間を共有できたことを嬉しく思います。

山中 洋

1971年生まれ。1999年株式会社マルニ(現 株式会社マルニ木工)に入社。「MARUNI COLLECTION」、「MARUNI60」等、外部デザイナーとの企画を積極的に推進。ブランド戦略や商品企画、セールスプロモーションの構築に携わり現在に至る。2021年株式会社マルニ木工代表取締役社長に就任。



「HIROSHIMA」に座る山中社長



MARUNI COLLECTION

JASPER MORRISON / NAOTO FUKASAWA

ガラス工芸 株式会社中日ステンドアート



株式会社 Art Glass Studio

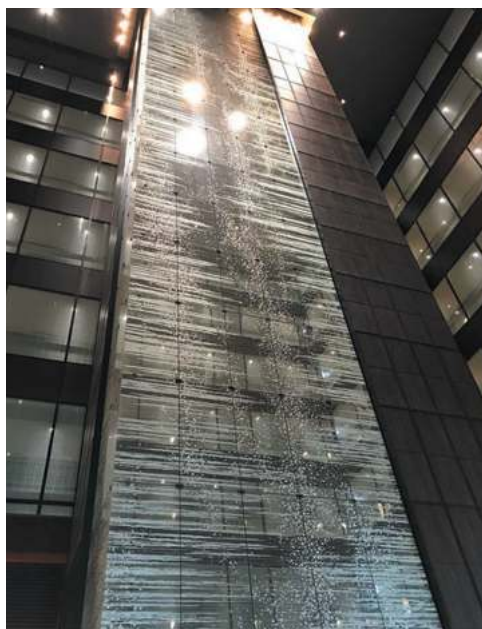
中日ステンドアート



帝国ホテル 鉄板焼き 嘉門

創業以来特注 1 本 ガラスのオートクチュール

株式会社中日ステンドアート 溝口季枝
聞き手 黒柳亮 東奈生子



プリンスホテル名古屋

ショールーム兼アトリエ兼製作工場である中日ステンドアートの本社（愛知県岡崎市）には、様々な見たことのないガラスの作品群が所狭しとひしめいている。ガラスとはかくも美しく、表情ゆたかなものであるのかと、認識を新たにさせられる。中日ステンドアートは、1981年の設立以来、特注ガラスの製作にこだわって作品作りを続けている。アトリエ、工場を巡りながら、作家性と、企業体の二面性を持つ稀有な会社という印象を強く感じた。それもそのはず、「芸術品を制作する作家の集団」を組織化し、「装飾ガラスの総合企業」として成立させ、オンリーワンを目指すという企業方針そのままに、特注一本でもものづくりを続けているからだ、と、溝口氏は話す。ガラスは、光を通し、色を発する美しい素材であり、平面、立体様々な表現が可能である。その可能性に魅了されたデザイナーやオーナーから様々な依頼が舞い込んでくる。その依頼は常に難解で、独創的なものばかりのようだ。その上、求められるものは常に新しい表現であり、それぞれの建物や部屋の為に詠えたオートクチュールでなければならない。その度に新たな表現手法にチャレンジしながら、その都度新たな作品を生み出してきたという。ショールームの作品群を拝見すると、その挑戦の積み重ねによって今尚進化し続けている事がよく分かる。これらの作品をどのように生み出してきたのか、幾つかのプロジェクトを取り上げて溝口氏にお話を伺った。

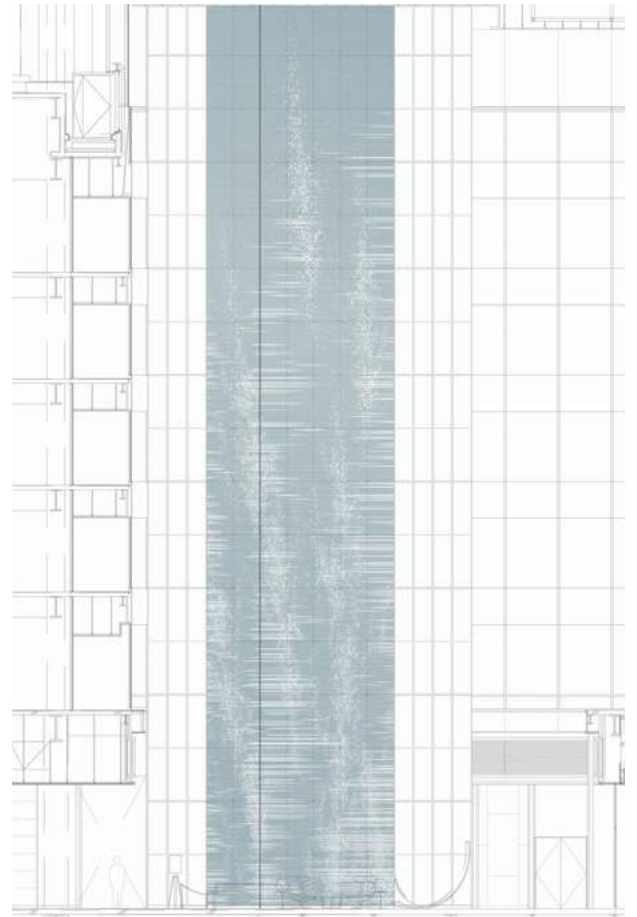
「プリンスホテル名古屋」ロビーの17層の吹き抜けを構成する30mのガラスアート作品のダイナミックさに驚かされました。

この作品を実現した時のお話を聞かせてください。

まずはじめにインテリアデザイナーから全体で幅6m×高さ30m という大きな面のデザインを依頼されたとき、正直その大きさをなかなか認識できませんでした。とにかく大きい。ここまで大きい作品は今まで作った事がなかったので、吹き抜けのあるビルを探しては足を運び、大空間を体感するという事を繰り返して、大きな面のデザインとはどうあるべきかを自問自答しました。その時色々な大空間を見て回って一番大事にすべきと感じたのは「見上げて眺めた時にどう見えるのか」という事でした。

そしてデザイナーより示された「空の浮きふね」というコンセプトに対して、何案も提案した中から絞られたのは、水面をイメージした流れるようなラインと、動きのある水玉の柄を組み合わせ、軽快感・浮遊感を表現した図案でした。下から上へと伸びやかに水が流れ、少しずつフェードアウトしていくようなデザインで、全体で粗密をつけて表現したので、119枚のガラスは全て違うデザインで、ひとつとして同じ柄はありません。ここで、最初に見て回った大空間研究を元に工夫を施しました。実は人の目は、遠近感によって遠いものほど自分で思ったより小さく見えるため、上部に行くほど柄の粒を大きくしたり、線を太くしたり、下から見上げた時に遠近感を感じつつも柄の存在感が失われないように考えたのです。これらのデザイン画は全て原寸でデザイナーと一緒に確認を行いました。

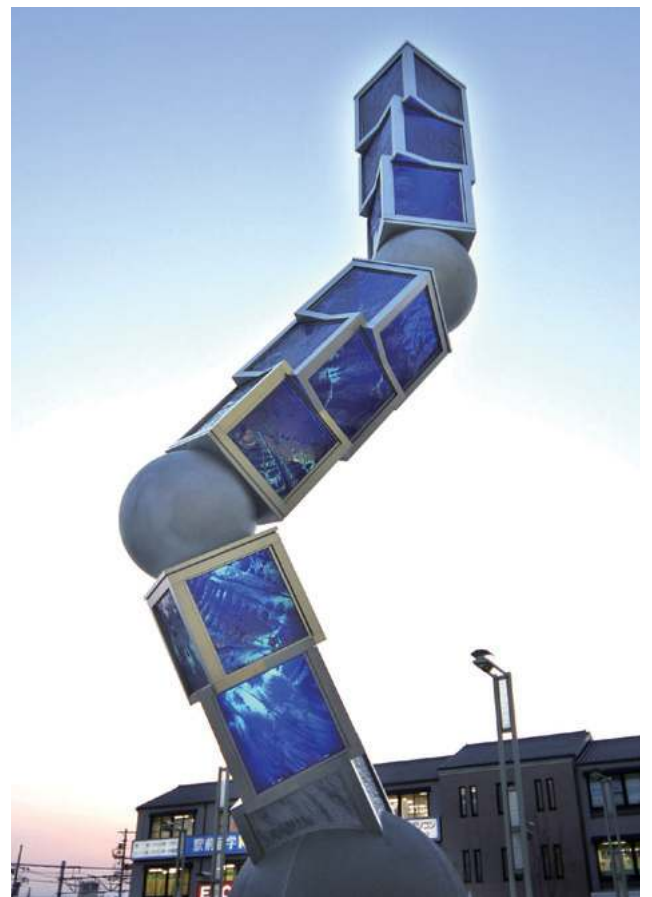
また、ガラスの表現手法についても、樹脂で凹凸感を出す案や、裏からエッチングしてモアレ効果を出す案等、色々な提案を何通りも行い、最終的にはミラーとエッチングを使用して、映り込みによる奥行きのある表現を採用しました。一部摺りガラスを交えて淡く見せている部分がありますが、その色味についても何度もサンプルを作って調整を行いました。原寸サンプルをいくつも作りながら、昼と夜の違った光環境でどのように見えるかなど、多角的な検討と微調整の積み上げによって完成に至りました。実際に空間に入って、周りのインテリアと調和した完成形を見ると、想像以上の迫力と美しさに、ただただ感動しました。これを実現できた事が、私たちの強みにもなったと思います。



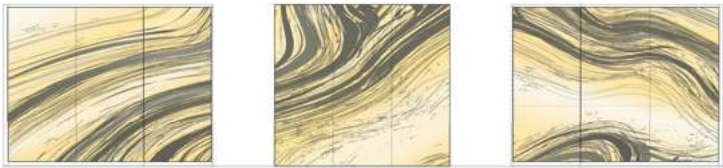
幅6m×高さ30mのガラスデザイン画

————— 平面だけでなく、造形的な立体作品も作られているとお聞きしています。
どのような作品でしょうか。

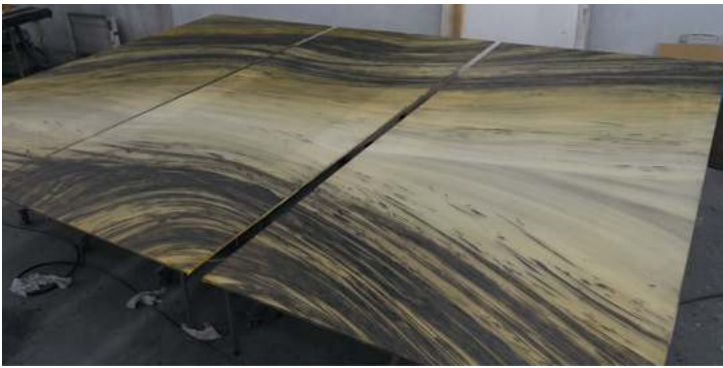
名古屋市からの依頼で製作した、有松駅前の屋外モニュメント「藍流（あいる）」ですね。歴史と伝統のある有松絞りをガラスで表現して、有松駅の玄関口を演出して欲しい、という依頼がありました。有松絞り作家の早川嘉英氏の作品を元にデザインを作成し、深く美しい青の色合いと、軽やかで涼しい感触を前面に出し、有松らしさを表現しました。全体で14メートルという屋外の大型モニュメントです。試行錯誤の上、有松絞りの柄は綺麗に表現出来るところまでたどり着いたのですが、屋外の環境に耐えうる強度のものという難題がありました。直射日光や雨風に当たりながらも、破損や変色変形をしないような仕様としなければならなかったのです。色々な方法を考えました。一部を樹脂にしたり、合わせガラスにしたり、何十回と実験を繰り返しました。最終的に三重構造の焼成ガラスを採用し、濃い青のガラス・淡い青のガラス・クリアガラスの3重構造によって有松絞りの柄を表現し、更に強化ガラスを樹脂合わせ加工で重ねる事で、強度を保つ方法を提案しました。通常は屋外側を強化ガラスとする方が強度が保たれるのですが、関係者より「表面は手作り感のある有松絞り柄のほうがいい」との意見があり、強化ガラスは内側として試験場で装飾ガラス衝撃試験を実施しました。その結果JIS規格同等品と認定され、無事に完成に至る事が出来たのです。非常に手がかかりましたが、こういった経験を積んだ事で仕事の幅が広がったのだと思います。



有松駅前の屋外モニュメント「藍流（あいる）」



「墨流し」のガラスデザイン画



工場での制作写真

本社にはガラス工場も併設されていて、工場を案内いただきながら、今まさに製作中のガラス作品の制作工程を見せてもらった。各工程の説明を聞きながら、1枚のガラスに、色々な技術を惜しむ事なく注ぎ込み、社内のデザイナーと製作担当が愛情を込めて作っている事を肌で感じる事ができた。「出来ないとは絶対に言わない。」というのが会社のポリシーだと溝口氏は話す。どんなに難しそうに聞こえても一旦お話を聞いて持ち帰る。そこから悩む(笑)。苦しくもあるが、挑戦する楽しさもある。新しい事に挑戦するからこそ新しい技術が生まれてくると信じて続けているのだそうだ。今は、ガラスと異素材との組み合わせにも挑戦しているとの事で、まだまだ留まることを知らない驚きの熱量である。1枚のガラスに込める想いの熱量に魅せられた1日であった。興味のある方は是非一度岡崎を訪れてみて欲しい。クリエイティブなインスピレーションを心地よくすぐってくれるだろうと思う。

中日ステンドアートのガラスによる多様な表現手法



鱗



緑青・箔



のみで削った表面



波打ったガラス



積層ガラス



名画や写真からの複写



木目の凹凸



水滴のような表現



アートガラスを重ねた表現



螺鈿細工のような表現



工場でのガラス作品制作過程

ガラスによる和の表現にも挑戦されていますね。
その技法について教えてください。

帝国ホテル東京の鉄板焼き「嘉門」のカウンターバック一面に、絵画のような壁面をガラスで表現するというプロジェクトがありました。そこで私たちが提案したのが「墨流し」という日本の伝統技法をガラスで表現した作品でした。ガラスをエッチング加工した箇所、に、黒色の塗料を流し込み、その上にゴールドのグラデーションを塗装、最後に銀箔を貼って仕上げました。鉄板焼きコーナーとしての清潔感、清掃性の観点からガラスを選定されたと聞いていましたので、室内側のガラス表面を無加工とし、裏側に「彫刻ガラス絵」の技法を施すことで立体感を出しています。完成した空間を見て、大胆な墨流しが空間の主役になっていて、日本的な心地よい空間を作ることが出来たと感じました。(写真：扉ページ上)

溝口季枝
愛知県立旭丘高校美術科・名古屋芸術大学卒業後
(株)中日ステンドアートに入社。
制作室室長を経てアートグラスアドバイザーとなる。
設計士・デザイナーとコラボレーションして、
空間に調和したアートグラスを数多く提案している。



こだわりは美しい余韻。

ザ・コンダーハウス(愛知県)

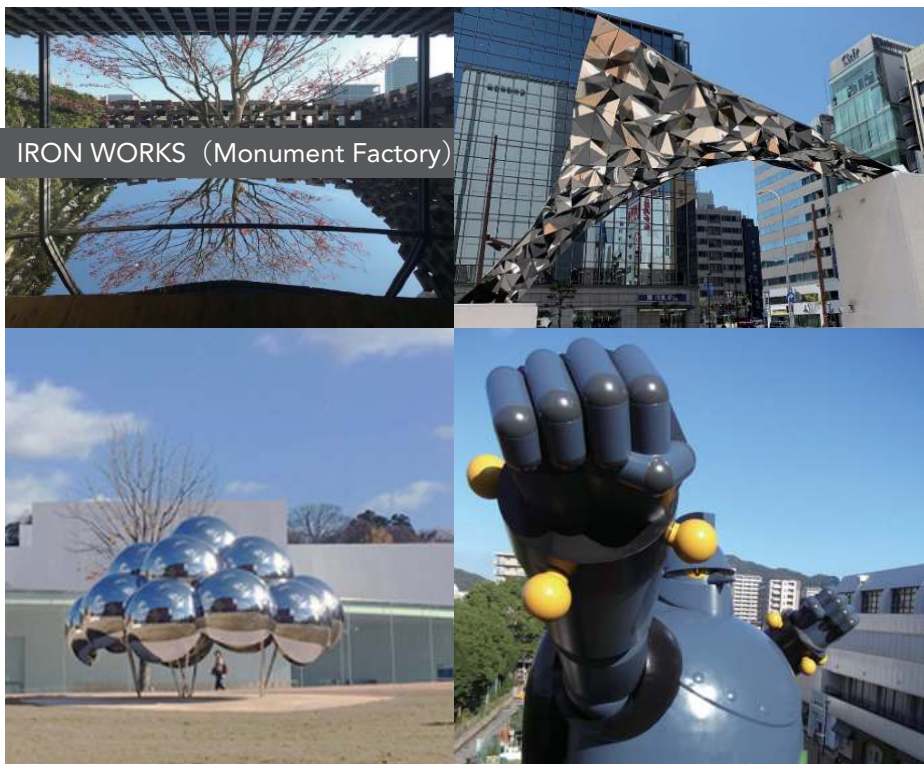
チャペル壁面



株式会社 Art Glass Studio
中日ステンドアート

本社・工房・ショールーム：〒444-0245 岡崎市在家町竹戸10
TEL：0564・43・2811 FAX：0564・43・1568
csa@studio-csa.com
<http://www.studio-csa.com>

モニュメント・特殊金属加工
株式会社 北海鉄工所



(左上) 竹中工務店名古屋支店 アウトドアスペースオブジェ
(左下) 金沢21世紀美術館「パピリオンまる」

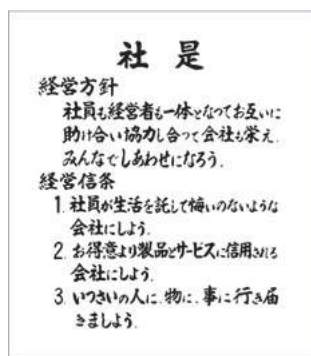
(右上) 三宮プラッツ
(右下) 神戸鉄人28号

倒れても砂をつかんで立ち上がる、そんな集団でありたい

(株)北海鉄工所 景観事業部 日吉章泰

(株)北海鉄工所は創業者・林泰俊（享年93）が12歳から奉公し15歳から溶接工として職人の道を極め、戦後1946年に大阪西成で林溶接工業所を起業、一代でプラントやタンクに使われる「鏡板」のトップメーカーに成長させる。創業者の精神は「社は」として社員全員の柱となり、後に私たちの意識に大きくかかわることとなる。

その様な中、大型プレス機加工技術・原図展開と三次元組立技術を使いパブリックアートスケープ部が1980年代に発足、モニュメント・アート・彫刻作品等、バブル期の好景気を受け東京・大阪にオフィスを構え総勢15名のスタッフで事業を展開。しかし鏡板の堅調な売上に対し、バブル崩壊後、単発仕事はあるものの後継部署となる景観事業部としてはジリ貧の状態となる。スタッフも2名となり存続自体不明確な状態がしばらく続き、「何がいけないんだろう？技術や実績はあるのに？ほんと何がダメなんだろう？」とお荷物部署となった私たちは、ただがむしゃらに自問自答の日々を過ごすことになった。



「社は」林泰俊 書

嘘みたいな話から始まった物語



完成形の模型とパーツ分けされた1/50の模型のみが届けられた

そんな悶々とした日々の2007年春頃

野島：これ見て欲しいねんけど……

金銅：何すかこれ！こんな興味ありましたっけ？

野島：これを50倍にとって……

金銅：え————マジっすか！！

そこからすべてが始まった。

私達と工場全員が出来るのかな？と不安に思った。もし阪神大震災復興プロジェクトである神戸鉄人プロジェクトが失敗に終われば事業部はおろか会社の存続にまで影響を与えることになる。プロジェクトは費用をすべて寄付金、半額も集まっていない状態であり、そんな中、寄付金募集の広告、ポスターだけでは具体性に欠け、本当に作らないと訴えが弱いと地元住民と神戸市の担当者約20名が弊社へ嘆願に来られ、もし最終金額が足らなかったらここにいる全員で身銭を払い、それでも足りない場合は北海が補填するという、林社長との直談判の末、スタートに踏み切った。今では信じられない契約内容である。

様々な難問を超えて出来た鉄人

同時期、東京で「1/1ガンダム」が注目を浴びていた。巨大広告代理店、製作は国内最大手展示会社と莫大な金額をかけた誰もが敬うプロジェクト。比べるものではないが地元のNPO企画のもとで進められ、製作も岸和田の「町工場」。設計構造計算段階で最初直立の鉄人を予想していたが、デザインコンペが行われ、造形作家速水仁司氏の原型「ファイトー発ポーズ」で決定、再度構造設計構造計算を行った。3D解析展開して忠実に模型意匠を実物大に再現させるのに苦慮し、当初は重量オーバーによるNGや基礎工事費の拡大等の問題が発生、何度も検討を重ねた末、意匠板を製作可能な限り出来るだけ薄くして軽量化を図り、基礎も杭打工事と併用できる深層杭基礎工法を採用。意匠板のパーツ数は約700枚を1枚1枚所定の形状にプレス加工し、骨組に貼り合わせ組立していくという気が遠くなるような作業、それは1枚1枚職人が焼き入れ、ハンマーで叩き、何もかもが手作り感満載。汗くさく・人間味があって・泥くさくて・油まみれの鉄人。18ヶ月を要し完成したときには「心が震える」感覚を経験した。この経験で私たちは「嘘のような話でも出来るというチカラを信じ、転んでもその経験を手に何度でも立ち上がる」ことを知った。今は亡き林代表がリスクを背負ってまで遂行したこのプロジェクトは、すなわち「社は」の具現化した仕事と感じた。そうして次の挑戦に立ち上がる事が出来た。再びこの感動を求めて……



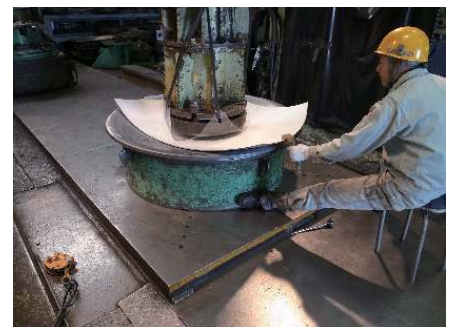
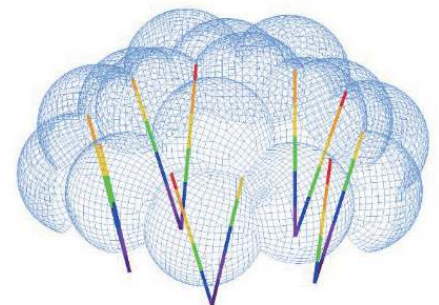
鉄人28号完成セレモニーの様子

金沢21世紀美術館 パビリオン「まる」

妹島和世+西沢立衛/SANAAによる金沢21世紀美術館の新たなシンボルとして計画された「まる」は、直径1.8mのステンレスの鏡面の球が16個集まって全体として1つの球となる形のオブジェ。まずは16個の半球を2個製作し実作と同等の溶接施工と鏡面仕上を施し、実作に向けてのアプローチとした。結果、半球1個に対し5パーツで分割+プレス+溶接+仕上げの施工手順が出来上がり、鏡面加工は設置まで全体2回バフ研磨、現地でも2回プラス最終全体バフ研磨という施工手順を計画した。また、事前に3DCADを用い立体的に球同士の形状や球と柱の結合部など図面化しにくい箇所の検討を積み重ね、組立用治具や切断用治具の考案にかなりの時間を費やした。期中難易度の高い箇所には、部分モックアップを製作し現物にて検証し設計者に了承を得るに至った。

現地で「まる」の形状が解るようになるまで約3週間を要した。そこから柱の溶接、検査、仕上げと全ての溶接箇所を記録した。ようやく姿を現した「まる」だが、そこから最終全体バフ仕上げを行い、全体の仕上がった姿を見せたのは着工から約1月半後であった。

気になる箇所を探しては直していく・・・、終わりのない作業が続いた。足場が外れ、初めて目にした「まる」の全体像は宙に浮いた飛行船のようでもあり、工事にかかわった全員、陽が沈むまでずっと見つめていた。材料を切り出してから約1年半を要した作品の完成形。美術品であり、建築構造物でもあるパビリオン「まる」は私達がかつて関わった作品作りの中でもとりわけ特別なものとなった。設計者SANAA+構造設計Arup+(株)竹中工務店+(株)北海鉄工所の4者が完璧なまでのスクラムを組み、製作できたのが良かった。お互いの信頼関係と熱意があってこそこの作品である。



「まる」制作風景

兎に角磨く・・・竹中工務店名古屋センタービル

㈱竹中工務店設立110周年記念事業として、名古屋センタービルの9F会議スペースのリニューアルにおける屋外アートのスペース工事。緩やかな局面の鏡面板は、中央に配置された紅葉を水盤のごとく映し出す作品。

1.6m×2.4mの4mmステンレスをプレス後溶接し、磨き上げた作品。設置には隣接道路から100tラフターにて9Fのテラスまで荷揚げ、重量の制限から・室内ベンチ部2分割・屋外部2分割して現地にて溶接。約4週間全体バフを施工しジョイント処理し、美しい輝きに仕上げた。溶接の技術と磨きの技を持つ職人がすべての工程を行う。分業では出来ない作品である。



溶接後全面を職人の技術で鏡面に加工
設計：株式会社竹中工務店、長谷川 寛、上河内 浩

とりあえず原寸・・・W大阪

2021年3月に開業したラグジュアリー・ライフスタイルホテル「W大阪」。大阪に日本初上陸のホテルが開業するという話題があり営業活動を開始した。極力多くの特殊装飾金物を受注しようと考え、パブリックスペースでは、1Fエントランスのトンネル造作・1Fから2Fにかけての階段壁面造作・1F-2Fの天井造作を担当し、客室はバックマンカードホルダー、そして一室だけあるエクストリームWOWペントハウススイートのシャンパンボウル浴槽を制作。すべてワンオフ品のため、照明や視覚による確認は、原寸モックアップで検討を重ね、工場で確認してもらった。多くの作品はこのように実作において検討され、デザイナーの不安要素を払拭する。そしてよりクオリティーの高い精度へと引き上げられる。



W大阪 原寸モックアップ検査
内装設計：Concrete
建築設計：日建設計 内装実施設計：日建スペースデザイン
内装施工 乃村工藝社

300/650枚の張替作業・・・三宮プラッツ

神戸市三宮コンペにおける作品。SS400の鉄板6mmが650枚個別に溶接され、下面には鏡面板が張り付けられ街の風景を切り取る作品。構造的にはすべての骨格となる板の溶接継は溶け込む深度をあらかじめ想定し施工することでこの複雑な形状を支える。溶接による伸縮で張り付けるステンレス板の隙間が変わり、650枚の内、300枚を張り替え。ステンレス板には全ての箇所に机上計算値を加え全て取付けた。そこから実物実測・再切断し、均一な仕上げとなった。これもまた予測できない終わりの見えない仕事であった。



1枚毎調整し貼り付け、隙間が合致しないものは再製作
設計：(株) 畑友洋建築設計事務所

他者が認めるプロ集団

2000年に入ってから大小300以上の物件を完成させた。共通するのは「お困り物件」であった。どうやってつくるのか？だれが？どのように？多くの案件は「岸和田の北海やったら出来るんと違う？」でした。考えに考え抜き最善の方法を探す。失敗したら他の方法を探す。地道に泥臭く進むしかない。決して格好の良いものではないが、最高の職人と最高の技術者に恵まれ、多くの作品を制作した。そこには「流儀」や「プロフェッショナル」というこだわりはない。ただ一つあるのは、私たちは「他者が認めるプロ集団」としてこれからも初めて鉄人28号が立ち上がった瞬間の感動をもう一度求め、倒れても砂をつかんで立ち上がる、そんな人間の集まりでありたいと考えている。

日吉章泰

建設ゼネコン・ディベロッパー職を経て2007年より現職

数々の大型案件を担当



北海グループは創業75周年を迎え「未来に向けて躍進する北海グループ」をテーマに、新しいロゴマークのもと新たな1歩を踏み出します。



モニュメントHP

www.hokkai.co.jp



内装メーカー 株式会社川島織物セルコン



全455色のオリジナルカラーボンテン
ウール製・特注カーペットの色選定で使用
京都・市原の本社工場にて染色しています

特注カーペットの要点と新たな挑戦

大阪営業開発部 谷村博成

この企画の話をいただいた時、ありがたい反面、何を書いたらよいのか悩みました。過去を思い返すと、特注カーペットは「やり方がわからない」、「高そう」などのイメージから採用をあきらめられていると感じる場面が何度もありました。オリジナルの意匠を作れ、イメージされる内装空間づくりにほめてここの特注カーペットなのですが、特注カーペットを検討される設計者は限られています。せっかくなので皆様に少しでも身近に感じていただきたく、「特注カーペットの製作の要点」と、「新たなマテリアル作りに一緒に挑戦していく」についてお話をさせていただきます。

内装マテリアルを選定される時、皆様は、見本帳や、各社ウェブサイトなどを参考に、必要な際にサンプルを依頼されているかと思います。残念ながら、我々カーペットメーカーが関与せずとも、内装業者様経由で納品されることも多々あります。しかしながら、特注カーペットは違います。施工を請負う前提にて、その後のメンテナンスもふまえ、クオリティーやデザイン、カーペットの割付け（ジョイント位置）なども検討します。その大前提に基づき、イメージされるデザインを具現化し、ご予算内で納品することが、メーカーの責任と考えています。



オリジナルボンテン染色工程イメージ

案件概要と、デザインイメージの共有化

特注カーペットの製作は、最初が一番肝心です。色々なご事情はありますが、可能なかぎりの情報共有をお願いしたいのです。どのような意匠にしたいのか？ イメージは？ コンセプトは？ ご予算は？ エリアは？ エリアごとの使用用途は？ 施主は？ 運営会社は？ スケジュールは？ もちろん図面も！ などなど。どうか、うんざりしないでください。ここが結構お互いにとって重要なのです。カーペットには種類があり、それぞれ出来る意匠と金額が異なります。また、エリアごとの許容クオリティーがわかり、図面があれば、ロス率の概算もつかめます。例えば、ロールカーペットは製作幅（基本3640巾）が大きいので、タイルカーペットよりもロス率が高くなります。何も考慮しなければ、同じ10,000/㎡の製品でも、タイルカーペットは実㎡あたり11,000円、ロールカーペットは実㎡あたり16,000円になってしまうなんてことも多々あります。客室の大きさや廊下幅をお知らせいただくだけでも、よりよいものを効率的に使っていただくご提案（デザイン）が出来ます。逆に、予算以上のご提案になると、最初からデザインやり直しみたいなケースもあり、お互いに不幸になります。また、例えばホテル案件などでは、同系列のホテルでどのくらいのグレード・素材の製品が採用されているかなどの情報をご提供できる場合もあります。

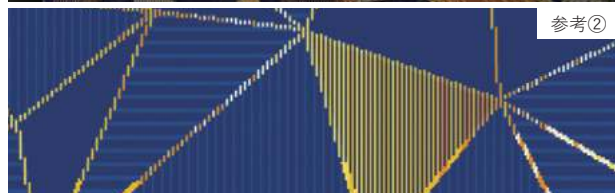
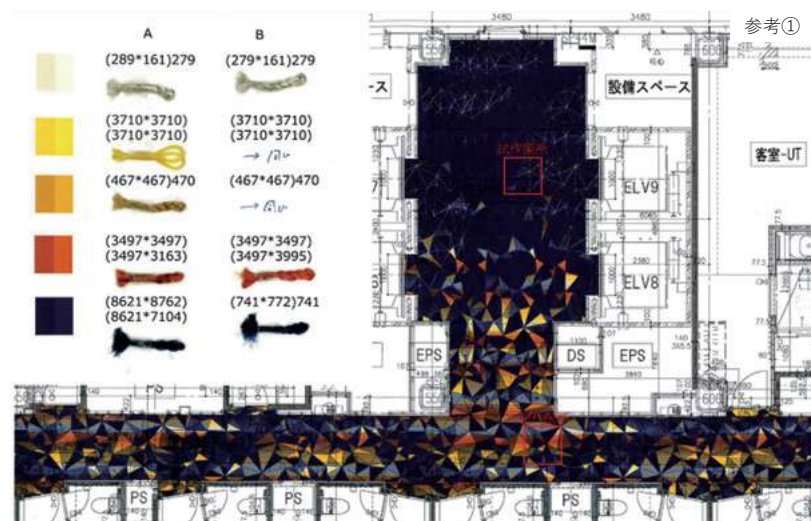
ではここで、カーペットにはどのような種類があるのかを簡単にご説明します。

大きく分けると、「織カーペット」と「タフトカーペット（刺し）」に分かれます。「織」は基布とパイルが一体になって織り上がっていく手法で「ウィルトン」や「アキスミンスター」があります。「タフト」は基布に単独のパイルを打ち込んでいく手法で、「ストレートタフト」、「柄タフト」、人力でパイルを打ち込んでいく「ハンドタフト」があります。後ほど事例でご紹介する「ストレートタフト」ですが、身近にあるタイルカーペットもほとんどがこの手法です。ストレートタフトは打ち込みが直線しかできず、デザイン上の制約が最も多いのですが、生産スピードが圧倒的に速いため、他の製法よりも安価に提供できるというメリットがあります。

さて、情報をいただき、こちらから最適な種類とクオリティーのカーペットを提案し、「このエリアは、この製法とこのクオリティーで」などを設計者と合意します。ここから、当社カーペットデザイナーの出番です。設計者のイメージをカーペットデザインに具現化するのですが、設計者の意図を読み取る力、織設計の知識、経験などが求められます。設計者と入念な打ち合わせを重ね仕様を決定すると、次に試作をします。ペーパー上では見えない仕上りを、限られた時間内にどのくらい想像できるかなど、カーペットデザイナーの力量が出来上りに大きく左右します。最後に施工です。カーペットは基本、伸ばしながら施工しますので、「この位置にこの柄を」という指示は長い廊下や大きな宴会場で難しくなります。カーペットの特性を考えたデザインに加え、カーペット職人との事前打合せも非常に重要です。特注カーペットの製作過程を、具体的な事例と共に紹介します。

ストレートタフトカーペットの限界を超える

右の写真は、「大阪エクセルホテル東急」の客室と廊下のカーペットです。ストレートタフトでの製作が決定済みで、いざイメージをきくと、なかなか大変な宿題でした。ストレートタフトで使える色は3色というのが一般的なのですが、写真で見ておわかりのように、10種類近くのグリッドがあります。更に「EVホールは柄を消していきたい」というご要望もありました。ストレートタフトは、経糸（たていと）の上げ下げと、カットとループの組み合わせで柄を表現するのが基本です。このカーペットは、約3mmピッチで経糸が入っているのですが、例えば、青色の糸と黄色の糸を交互に並べ、黄色糸を3mmループにし、青色糸を7mmカットにすると、黄色は見えなくなり、青色が前面に浮き出るといような方法です。ただし、経糸の並ぶ順番（糸配列）は変えられません。「参考②」と「参考③」は実は同じ糸配列なのです。このような制約のなかで、色の配合・パイルの高さ・カット面とループ面の色の違い・縦ストライプ柄と横ストライプ柄・ステッチでの面分けなど、あらゆる技法を使っています。パイルの上下で深みのある表情を作り、すべての面に基本色の青色が混ざること、それぞれの面で繋がりを感じられる構成になっています。言い換えれば、ストレートタフトでしか表現できない意匠です。また、設計者は色をととても大切にされており、使用する単色の原糸を、どう縫り合わせるかで念入りに打合せを重ねました「参考①」。





グラデーションタイルカーペット

グラデーションタイルカーペットへの挑戦

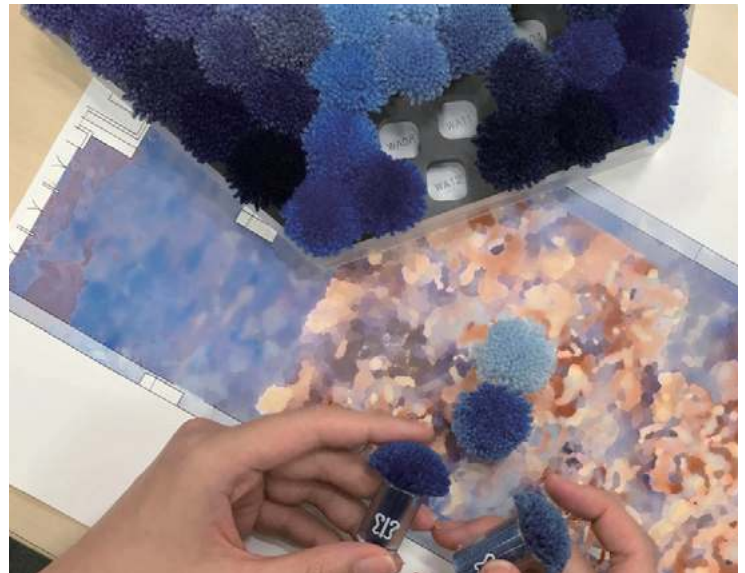
左の写真は、某ホテルの客室に納品したタイルカーペットの試作です。設計者のご要望は、「うつろいをグラデーションで表現したい。ロールカーペットではなく、タイルカーペットで」とのことでした。グラデーションはインクジェットでは製作したことがあったのですが、様々な制約から今回は断念。そこで提案したのが、3種類のストレートタフト（10種類のタイルカーペット）を組み合わせで作るグラデーションです。こちらの案件で使用したタイルカーペットは、約1,000㎡程度が生産ロットでした。全体数量が3,500㎡ほどでしたので、3種類を製作できるのです。どのように作ったのかをご説明いたします。

タイルカーペットは2 m少しの巾でタフトし、バックキングをした後に500角にカットしてます。それをいかして、①グレーから薄いブルー、②薄いブルーから濃いブルー、③一番薄いグレーと一番濃いブルーの無地 を作ります。①と②で4 m（8枚）のグラデーションを作り、③を部屋の入口と、奥に振り分けました。また、タイルカーペットは目地があることが意匠上の弱点になるため、これをいかに目立ちにくいデザインにするかも大切になります。今回はループパイルの高さを数種類組み合わせ、なめらかなグラデーションを作ると同時に、ジョイント付近に目立ったラインがこないことに留意してデザインしました。施工を担当いただく内装業者様とも打ち合わせを重ね、部屋タイプごとにグラデーション位置を変えていただいたり、施工ミス防止のため、箱やタイルカーペット裏面の印字を工夫するなどの打合せを行い、ロス率を極力抑えた生産数量を決定の上、納品しました。

メーカーの成長

ご紹介した2件の事例に共通して言えることですが、特注品を製作させていただき、設計者の要望（ときには難題）に答えることで、作り手には新たな技術が蓄積できるのです。それはデザインや製法上の工夫ではありません。納品方法や新製品のヒント、新たな販促ツールなど様々です。普段、製品開発に関わっていない私のような営業担当が、ひょっとすると最も新たな知識を得ているのかもしれない。

設計者の皆様におかれても、どのように製品が作られているかを知っていただくのに、特注品はもってこいです。ホテルでのご使用が多いですが、オフィスや学校、住宅などでご検討いただいてもおもしろいかもしれません。インクジェットやハンドタフトなど、少量でグラフィックや素材感を表現できる製法もありますので、是非、一度、ご検討ください。皆様の作品において、新たなアイデアの創出や、内装空間の選択肢増の一助となれば幸いです。



デザイン画を元に、実際にカーペットに使用する色を検討

谷村博成

株式会社川島織物セルコン 大阪営業開発部 所属

1999年入社 ゼネコン設計、建築設計事務所を担当し、特注カーペット製作を数多く手がける

FAB-ACE[®]

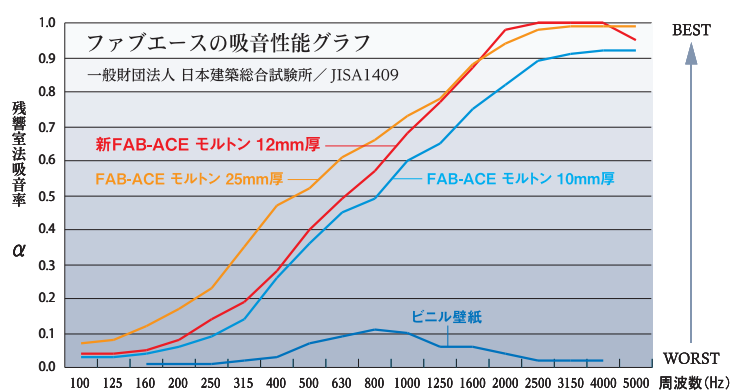
次 世 代 壁 装 シ ス テ ム

FAB-ACE(ファブエース)は「どんす張り」を元開発された画期的な壁装システムです。 800 種類の生地から選べる高いデザイン自由度・テレワーク環境を快適にする吸音性能・当社現地施工 + 下地同等で不燃認証の取れる製品です。



吸 音 性 能

ファブリックの中にクッション材を入れることで吸音効果が高まり、音や声の反響を抑えます。声が聞き取りやすくなるのでリモートブースや会議室にお勧めです。



株式会社川島織物セルコン

大阪支店 大阪営業開発部

大阪府吹田市広芝町 8-26

TEL:06-6369-6240

<https://www.kawashimaselkon.co.jp/>

公共・教育施設家具 愛知株式会社



axona AICHI

100%再生材化によるリサイクルプログラム

執行役員 研究開発本部長 熊澤 工

わが国では、1988年に日本環境協会よりエコマークが登場し、2001年にはグリーン購入法が施行され、国としての理解が少しずつ広がり始め、30年ほどの時を経た今現在、2015年の国連サミットで採択された“SDGs”というフレーズがメディアを通して一般的となり、あらゆる企業が取り組みを始めている。

デザイナーとしての“ものづくり”の中でのサステナブル要素として、今から10年ほど前の2010年に「100%再生材による100%再生化」という漠然とした大きな目標に向かい、デザイン・機能だけでなく、素材にも大きな進化を持つ究極のスタッキングチェア「Tipo」の開発を行った。

以来、様々な国際的デザインアワードを受賞し、現在では世界40か国にて販売されるまでの製品となっている。この成果は、サステナブルプロダクトとしての理解から生まれたものだと思う。

サステナブル+デザインに至ったルーツ

私自身、“デザイン”と“エコ”との結びつきは、大学でプロダクトデザインを学んでいたころに遡る。当時、恩師のデザイン思想の影響を大きく受けたことによる。与えられた課題テーマには必ずエコロジー要素・ユニバーサル要素が求められ、常にデザインをする上で三位一体で取り組むことが必須であり、私自身の今日のスタイルとなったといえる。しかしながら、卒業後の実践の世界では、機能としてのユニバーサル要素は理解されてもエコロジー要素の提案は製品開発においても、ほぼ取り上げられない現実を目の当たりにした。2001年のグリーン購入法の定めた基準にしても、製造業への負担に配慮してか、再生材含有率10%といった極めて低い数値にとどまっております。



我々のみならず家具業界でも、国や自治体などの購入適合製品とするために形として基準をクリアしておけばそれ以上のハードルを自ら設ける必要は無いという考えだったと感じた。

確かに再生材含有率を上げると色彩の安定度や生産工程上の非合理的な問題も発生するが、私自身は、10%程度では実際の環境負荷軽減にも、製品としての付加価値も低く、ビジネス上の製品開発、環境対応としても疑問が残っていた。その状況から数年後、国内市場の縮小に伴い海外市場への輸出拡大の方針がトップより打ち出され、ドイツで開催される世界最大のオフィス家具展示会「ORGATEC2010」への出展プロジェクトが計画された。

そのトップの徹底した経営理念として“差別化”があり、“世界で戦う上では世界にない製品開発”が必要とされた。

その責任者として任命されたのが2008年夏のことであった。そのころには自分自身も責任ある立場になっており、日本よりもすでにサステナブル要素が社会問題として認知され、求められていた欧米市場への提案として、その要素に取り組む機会ができた。あくまでグローバルビジネスで成功することを目的とする開発プロジェクトが目指したのは、中途半端な再生材含有率基準を満たすだけのものではなく、あくまで100%再生材化、100%分別再生化を達成した、普遍的な美しいデザインをまとった究極のスタッキングチェアであった。

Tipo 100% 再生材化プロジェクトの道のり

スタッキングチェアである以上軽量化が必須になる。そのためにシート面に使用しているメッシュ材については、すでに技術的に確立されていたペットボトルの再生材100%で作られた再生糸を使用することとした。しかしながら市場にある再生糸では求めた強度が得られず、糸からオリジナル開発が必要となった。また、あらゆるパターンの編み込み構造をメーカーとタイアップし、幾度も試験を繰り返しながら強度アップを目指した。無論ここでいう強度とは欧米基準で求められるハイレベルな強度を指している。

また、もう一つの素材として背座の根幹となる樹脂成形材料の再生100%研究もあった。こちらは、当時の技術的実例もなく、かなりの開発苦難を伴った。まず初めに全国の再生材を取扱う業者との面談の中で、顔料成分の入っていない再生材の安定供給の課題に直面した。当時のトレンドカラーであるピュアなホワイトを実現するには必須の要素であった。そのような素材を安定供給できるルート開発が必要となった。そのような状況で、この開発に協力的な再生材専門メーカーと出会い、様々な研究に協力してもらえたことが大きな進歩に繋がった。

使用するポリプロピレン素材はブロック、ホモというタイプに分かれ、その配合率の研究から始まった。体を支える椅子である以上、従来のバージン素材同等以上の強度、成形安定性、濁りのない白の実現性が求められた。ここではすべてを紹介できないが、顔料成分の入っていない再生材の入手ルートを開拓した後、様々なブレンドにより材料黄変することの無いよう試行錯誤する中、最適なオリジナル仕様の材料を完成させた。このプロジェクトで成形時の熱影響や経年による劣化を抑えられる材料を実現できたのは、このプロジェクトの大きな第一歩であった。

従来の通常のバージン材は、巨大な石油化学材料メーカーから多くの流通経路や商社を通じ入手していたが、このプロジェクトでは、単なる材料開発にとどまらず、同時に、原材料調達・ブレンド・ペレット化・品質管理・成形といった一連の流れを再生材専門メーカーと独自システムとして構築したのである。

しかし、この研究で困難を極めたのはガスアシスト成形とメッシュインサート成形という通常のバージン材による成形でも難しい要素を含んでいたことにある。バージン材と異なり再生材は成形時における樹脂の流動性が悪く、ウェルドラインの問題が解決できず、外観の仕上りが理想に近づけることが中々できなかった。



100%再生材を使ったTipoシリーズ



白色化も実現した再生樹脂ペレット



回収されたペットボトルから作られた100%再生糸



再生糸100%メッシュの色彩化

それらの状況で、当時のサスティナブル意識や価値の低さより生産部門自体からの理解が得られない状況にも苦しんだ。テストトライの不安定さから、非常にネガティブな印象が先行し、一時的に研究そのものが暗礁に乗りあげそうな時期もあった。それでも差別化開発の信念をもとに、研究に協力してくれる各メーカーの支援もあり、少しずつ前進していった。研究を重ねる中で成形安定性をバージン材同等の歩留まりレベルまで持つていくことに成功したことが生産部門の理解につながった。また、調達ルートを独自に構築したことで材料コストを軽減したことも、理解への後押しとして絶大であった。当時、高品質な再生材は、再生工程が多く複雑でバージン材より高価なものであったが、リサイクル材調達システムの構築により成しえたビジネス的効果の側面でもあった。

また、背座などの主体パーツのみならず、脚端部品など、小パーツに至るまで100%再生材化にこだわり、100%分別再生化も確立したことにより究極のスタッキングチェア「Tipo」は完成形となったのである。一進一退の研究を繰り返し、厳しい状況の中でおよそ2年という短期間で実現できたのは、あらためて各協力メーカーに感謝するところである。



世界への発信と評価

約40か国で使用されているスタッキングチェアTypo「ティーポ」だが、2010年のオルガテックでプロトタイプとしてデビューし、2012年開催のオルガテックでは100%再生材仕様として新たに生まれ変わった姿で、アジア製品として初めてオルガテックイノベーションアワード最優秀賞を受賞することができた。既に欧米でのデザインの評価は高くレッドドット賞、IF賞など受賞していた製品ではあったが、2012年の再生材100%というインパクトは欧米では相当強く、連日の問い合わせに追われる状況となった。以来、世界の名だたるグローバル企業、国内外の公共・教育施設で採用され続けている。

また、これらのデザインポリシー自体の評価として、海外での建築・プロダクトの環境問題についてのトークライブやメディアインタビューでもその重要性和プロセスについて発信する機会を得ることができた。

Typo「ティーポ」の目指したところは、スタッキングチェアである以上、軽く、より多く積載でき、不特定多数の人が扱うことによる高強度性といった、ユニバーサル機能をシンプルで美しいデザインでまとめるという通常のプロダクトデザインのプロセスだけでなく、再生材100%という真のサステナブル要素を加えることで、現代的かつ普遍的な価値を与えることができたといえる。また、その再生材技術は、新たな製品バリエーション、マルチカラー展開など、現在も進化し続けている。これまで述べた再生材プログラムは、おそらく独自のルート開発による廃材管理システムがなければ不可能なプロジェクトであったと思う。今もって樹脂再生材100%によるピュアホワイトを実現しているプロダクト製品は、私の知る限り世界でも見当たらない。現代のトレンドであるSDGsが注目される中、この再生材100%プロジェクトは大きな成果として今後さらなる躍進を期待している。



メルボルンで開催されたインテリア・フェスティバル「DEN FAIR」環境問題についてのトークライブイベントでエコプログラムを発表。

プロダクトデザインの役割

ものがあふれる現代において、プロダクトデザインの役割について問う必要がある。我々の家具業界を見渡しても、似通った製品であふれかえっているように見える。場合によっては、よく見ると多少デザインが異なるだけのものも少なくない。また、意味性の説明できないオーバーデザインによる素材の無駄づかい等々。これらは限られたマーケットに於ける経済的側面においても、無駄な価格競争をも生み、効果的手段とは言えない。同時に、大量消費による廃棄物の増加にも繋がっている。これはあらゆる面で残念な循環である。プロダクトデザインとは、ビジネスと両立した新しい創造から生まれる進化を提案していくことである。

20世紀は“モノのカタチ”をデザインする時代であったが、そこから生まれた弊害より21世紀の現代では“コトのカタチ”をデザインする時代と言える。その“コト”の一環としてサステナブルな循環構築はプロダクトデザインの大きな役割と考える。

この循環から生まれるプロダクトは、突き詰めれば、最小パーツによるユニバーサルエコプロダクトとなる。そしてそれは必然的にシンプルで無駄のない新しさを創造したものでなければならぬと私は思う。



ポルシェ ミュージアム/シュトゥットガルト・ドイツ



ドイツ・ケルンで開催される世界最大のオフィス家具展「ORGATEC」



JAPAN HOUSE/ロンドン・イギリス



熊澤 工 プロフィール

1994年 名古屋芸術大学 デザイン科インダストリアルデザイン学科卒。同年、愛知株式会社入社。デザイン開発部にて新しい視点でのパブリックファニチャーのデザイン、企画を多く手掛ける。機能とデザインを融合させた独自のデザイン手法から生まれる機能美を、ミニマルな世界観で表現し続けている。また海外の展示会を通じ同社のブランド、デザインを世界に発信しており、代表作のスタッキングチェアTypoシリーズやX50、CTZテーブルは世界40か国の著名な建築などで愛用されている。

主な受賞歴

1997-2021年 グッドデザイン賞 33点
2010年 グッドデザイン特別賞
2015年 グッドデザイン・ロングライフ賞
2012-2021年 IF design award/ドイツ 7点
2011-2019年 red dot design award /ドイツ 5点
2013-2020年 German Design Award/ドイツ 9点
2012、2018年 AIT Innovation Award at ORGATEC /ドイツ
2012-2020年 Chicago Athenaeum Good design, Green Good design/アメリカ 9点

その他、大学等で講義、講演 等



axona AICHI
www.axona-aichi.com



Book



Movie

フラワーアーティスト 株式会社ケーション



KEITA KAWASAKI

KEITA + ISAMU NOGUCHI (芝のテーブル)

イサム・ノグチ氏の明かり（日と月）に照らされ、生きとし生けるものは命を紡ぐ。
庭が無くとも居住空間でピクニック気分になってみては。
2004年「イサム・ノグチ 和のAKARIと暮らす」展（シブヤ西武、そごう神戸）

暮らしに息づく花の価値



KEITA + 岡本太郎 (花の滝)

太郎氏が一言、「この角に花をアートしてくれ」青に引き立つ「命のほとばしり」が表現された作品。

ケーション代表取締役 川崎景太

地球上、食物連鎖の最上位にある人間にとって、「生きとし生けるもの」との共生共存を大切に思う気持ちや、すべての生き物に「生かされている」という実感を抱き社会生活を営む行動は、私たちの「すみか」である地球が元気をなくし始めた今日、大切な精神志向だと信じてやまない。

私が専門とする花や植物においては、人と共に生活する中で人間本位の装飾として扱われているケースが多い。例えば、「その部屋のコーナー寂しいから植物を置くといいんじゃないかな」「この卓上に花を飾ると豪華に見えて様になるんじゃない？」もし花本位の解釈を持ち、彼らの存在意義を考えた時、花は寂しさを紛らわせる生き物ではなく、豪華絢爛を演出するいきものでもないような気がする。

花と共に居住する中で、インテリアは大地や風景、そして季節折々の情景。音楽や会話は鳥のさえずりや虫の音色。人の営みは自然界の多くの生き物や自然現象に変わる存在として、時として雨を降らせ、太陽や月あかり、風を生みだし、虫や鳥に変わる役割さえ果たさなくてはならない。

花がその環境の快適さに満たされた時、初めて私たちが持ち備えていない多彩な色、摩訶不思議な容姿、心地よい香り、生命力の偉大さなど数々の才能を発揮し、私たちの心を癒し和ませてくれるのではなかろうか。



生きている花屏風

花が描かれている屏風を鑑賞すると、色、香り、環境などのイメージが広がり知識以上の豊かな気持ちになれる。もう一つ変化する花を見てみたい。もしこの花が生花だったら・・・という好奇心がこの作品になった。

新たな花創造へのチャレンジ

幼い頃は、すべてが新鮮に見え日々ワクワク、ドキドキ心ときめいていたような気がする。月日は流れ今日、小さい頃見えなかったものがたくさん見えるようになった反面、あの時ほどの、ときめき、ひらめき、きらめきを感じられないことに少々がっかりする。柔軟で刺激的であったマインドがいつしか「これはこうすべきだ」「こうしなくてはいけない」という固定概念を強く持つようになってしまったからなのであろうか。

しかし、その道を究めた固定概念を持ったことで、数々の新たなひらめきが芽生えた。

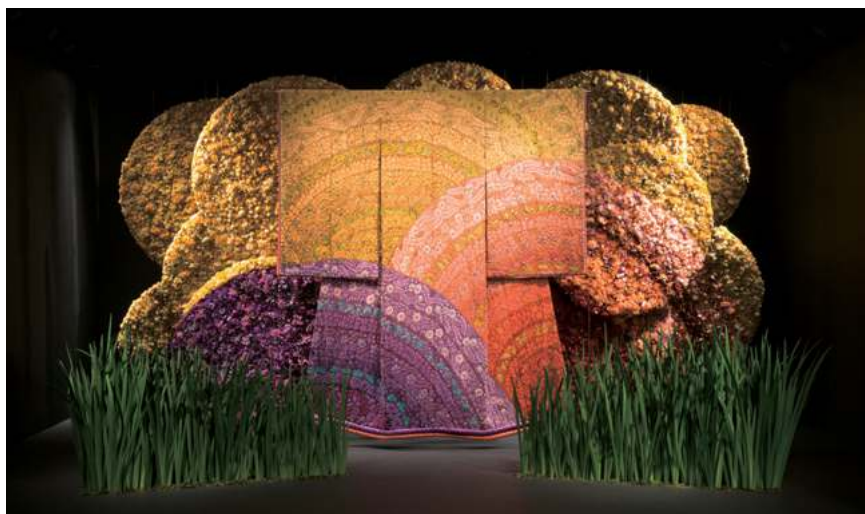
時に道を外し邪道外道の唐突な発想に、暮らしに息づく必然性を見いだせたなら、新たな花文化の礎になりうる可能性が生まれると。

私が花の世界に入ってから、たかが30数年。まだまだ知らないことだらけだが、一つだけ確信を持ったことがある。それは、「花は物ではなく、生きもの」ということだ。

自分と同じ生きものである花を使ってデザインするということは、植物が持つ特性や特徴を余すところなく観察し、自然界では決して見せてくれない

花幕の内

幕の内弁当は、決められたサイズの折り箱に数々のおかずが無駄なく、バランスよく詰め込まれ、その一つ一つに味覚の違い、形の美しさ、栄養配分、季節感を表現している誇らしい日本文化である。その文化を季節折々の花に託してみた。



KEITA + 久保田一竹（色への賛歌）

大地に根づく色、天から降臨する光など、自然界から学ぶ“色彩の喜び”をテーマにした作品。「一竹辻が花」の中に息づく“自然の美”と植物を一体化させ、艶やかで幻想的な風景を創作した。

2009年「久保田一竹と川崎景太」展（松屋銀座）



ポスフローラ

写真に花をいけたシリーズ。写真と花を組み合わせることによって、二次元と三次元が融合し、そこに不思議ないのちが芽生えた。
上野国立科学博物館にて展示

かったであろうその「才能」を、敬意をもって表現するという
こと。そうした交流によってこそ、花は知識を超えた感動や喜
びを私たちに与えてくれると信じてやまない。触れることで形
状を感じ、色を愛で、香りをきき分け、味や音を堪能する。
暮らしのなかで、視・聴・嗅・味・触の五感を生かし楽しむと
いうことを、私たちはすべて自然から学んできた。日々、その
恩恵を感じる心を持つことによって、人は、より輝き、充実感、
満足感を持った健やかな光を放つことが出来るのではないだ
ろうか。つまり「生きとし生けるものへの感謝の心」こそが、
これからの時代に対して、花文化が寄与しうる基本的な価値だ
と私には感じられる。暮らしの中で共に生きる存在としての花
が、物質偏重の思考から脱却し、豊かな精神性を育むためのひ
とつの潮流として息づく世の中を創造していきたい。そして、
私も多くの生きとし生けるものとの感動の分かち合いを花の
メッセンジャーとして、未だ見ぬ花の才能を大切に日々を過
していきたい。



箱庭ビオトープ

インテリアに小川のせせらぎと緑のオアシス



川崎 景太 (フラワーアーティスト)

keitakawasaki.net

1958年、東京生まれ。

フラワーアートでありながら、コンテンポラリーアートにも通じる大胆な空間インスタレーションに定評がある。ディスプレイやデザイン関連でも数々の賞を受賞。多彩な表情を持つ作品には「生きものとしての植物」という一貫した姿勢が通底し、現代社会に向けて「共生・共感」というテーマを投げかけている。

2014年、新たなブランド「Keita」を立ちあげ、さまざまなジャンルのなかで植物の魅力を追求する一方で、岡本太郎、イサムノグチ、藪内佐斗司、ルネ・ラリック、久保田一竹など、多くのアーティストの作品の魅力を生かしたインスタレーションも数多くこなす。

スーパーフラットで表現された 二次元的花表現 HANA GRAPHICの可能性

肉眼でとらえる花の美しさと、レンズを通し表現された時の花の美しさは、いささか異なったものに見える。日本の浮世絵画法にも見られる線で描いた物の重なりによって生まれる美しい奥行き空間を演出する構図なども参考に、花の持つ魅力を平面媒体(写真)で見た時の美しさに意識を集中させ、花をデザイン表現した手法をHANA GRAPHIC(ハナグラフィック)となづけた。平面媒体で花がいきづく新感覚の花表現はサステナブル時代の到来と共に次世代の花柄として、商品パッケージからインテリア、ファッション、店舗壁紙など様々な企業とのコラボレーションを実現している。



株式会社川島セルコン
コラボブランド
「KEITA KAWASAKI」
1843年創業の川島織物セルコン
とフラワーアーティスト川崎景太
とのコラボレーションにより誕生

したコレクション。“花と共に生活する喜び”をコンセプトに、植物の生命力を感じ毎日の暮らしに潤いを与える商品を提案します。

オリジナルのHANA GRAPHICを用いたインテリア商品は、植物という自然の造形の美しさを表現したアートを通して心地よさを感じる空間を演出します。



旅籠屋 花宿 壁紙、襖にHANA GRAPHIC

KTION
CREATING DESIGN & ART

株式会社ケーション
〒143-0023 東京都太田区山王2-8-7
TEL 03-6429-7257 (担当: 井上)
<https://keitakawasaki.net/>

衛生機器 TOTO株式会社

TOTO



国産初の腰掛式水洗便器（右）と昭和初期のカタログ類

トイレの微生物汚れと臭いの対策に関する研究開発

TOTO株式会社 総合研究所 伊丹愛子、山本政宏

はじめに

大正6（1917）年、日本初の衛生陶器の製造会社として東洋陶器株式会社（現在のTOTO）が設立された。当時のトイレは汲み取り式で、家の外に置かれていた時代のことだった。「衛生的な陶器の便器を普及させることは、必ずや社会の発展に貢献する」その固い意志と不屈の精神で衛生陶器の普及の道を歩み始めた。

「豊かで快適な生活文化を創造する」という想いでお客様の満足を追求し、お客様へ近づく努力を続け、きずなを深める。お客様に期待以上の満足を提供したいということがTOTOの姿勢である。社は「愛業至誠 良品と均質、奉仕と信用、協力と発展」は創立者の事業育成の精神を踏襲したもので、この変わらぬ想いは、今も脈々と私たちに引き継がれ、ウォシュレットやユニットバスなど、時代を先取りした「新しい生活文化」を創造してきた。さらに近年、豊かで快適な生活を求める傾向が高まっていることから、住宅における水まわりの汚れ・臭い対策は、TOTOのマテリアリティの1つである「きれいと快適」の重要な要素となっている。水まわりの汚れと臭い対策（クリーン技術）の研究では「実使用でお客様に効果を実感し、満足していただける技術」の開発を目指している。本稿では、研究者の開発への思いを、TOTOが誇るクリーン技術の誕生プロセスを通じて、紹介する。

汚れないトイレへの挑戦

■汚れ発生の原因究明

クリーン技術の一つである「きれい除菌水」の開発当初、女性を対象にした外出先での温水洗浄便座の使用実態調査で、10～20代では約3割の人が洗浄機能を使っていないことが判明した。世の中の除菌・抗菌への関心の高まりを背景に、「トイレは汚れていても仕方がない」という諦めと決別。「お客様のためにもっとキレイを」との思いから、トイレから汚れや臭いを追放する研究への取り組みを始めた。便器の汚れには、主に便付着と輪じみ汚れがある。輪じみは、便器吸水面に徐々に発生する黒ずみや赤しみ等の微生物由来の汚れである（図1）。実は汚れの発生を抑制するための技術開発において、汚れの発生メカニズムを明らかにすることが最も近道であると考えている。何から汚れが始まるのかを調べることで、もともと



図1 便器の輪じみ汚れ

なる原因を叩く効果的な技術開発が可能となる。この「もとから断つ」という考え方を研究者は非常に大事にしている。

そのため、「きれい除菌水」を便器の輪じみ発生を抑制する「便器きれい」に展開する際、最初に徹底したフィールド調査が行われた。事務所のトイレの様々な部位について、目に見えない微量な汚れから目に見える汚れまで徹底的に分析し、便器に残存する汚れ量、汚れの種類、微生物量と輪じみ発生の関係を調査した（図2）。分析の結果、黒ずみ汚れからは、クラドスポリウム属（Cladosporium sp.）の黒カビが主に検出され、赤しみ汚れからは、ピンク色の細菌であるメチロバクテリウム属（Methylobacterium sp.）の細菌が主に検出された。また、トイレを使用し、水洗した後、目に見えないレベルの便成分が便器表面に残り、それを栄養として菌やカビなどの微生物が繁殖し、目に見える汚れに進展するという汚れ発生メカニズムを明らかにした。



図2 顕微鏡による微生物観察

■汚れを発生させない技術

汚れの発生プロセスに作用し、汚れを抑制する技術として、見えない汚れ付着の抑制と、微生物増殖を抑制する方法がある。一般的な陶器の表面は目視では平滑に見えるが、ミクロンレベルの凹凸があり、この凹凸部に便汚れや微生物が引っかかる。この凹凸をナノレベルまで小さくした超平滑便器によって汚れ付着を抑制することができる。さらに、電気分解によって、水道水中の塩化物イオンを次亜塩素酸に変えた電解水（きれい除菌水）が、輪じみの原因となるクラドスポリウム属の黒カビとメチロバクテリウム属の細菌を抑制することが可能になることが分かった（図3）。超平滑便器に、微生物の発生を抑制するきれい除菌水を組み合わせることで、輪じみ発生を劇的に遅らせることができることを見出した。

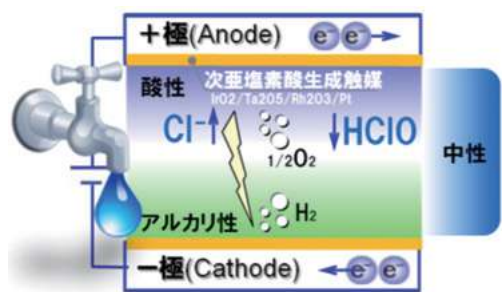


図3 次亜塩素酸の生成反応

■全国に汚れないトイレをとどけるために

「きれい除菌水」は水道水中の塩化物イオンを原料としている。水道水は、地域によって、水質が異なるため、日本中のどの水道水からでも輪じみを抑制できる次亜塩素酸をつくるのが高いハードルとなった。まず行ったのは、全国の水道水の水質調査である。年末に帰省する社員やショールームに協力を仰ぎ、全国150か所以上の水道水を収集し水質を分析した。次亜塩素酸が生成しにくい水は、汚れ抑制効果が不足し、逆に次亜塩素酸が生成し易い水は、スケール（ミネラル分が結晶化したもの）が生成し易いといった問題が見つかった。そのため、スケールが生成し易い水質にあたりをつけ、現地で実証実験をさせてもらえるように交渉し、幾度となく失敗を繰り返しながら検討を重ねた。その結果、どのような水質でも一定レベル以上の次亜塩素酸を生成でき、スケールによる流路詰まり等の不具合を起こさない電極や制御方法を開発することができた。

■お客様に効果を実感してもらうために

汚れ対策技術の効果検証には、実際の環境を考慮した効果検証にこだわっている。例えば便汚れは、現在では疑似便を用いているものの、開発当初は実際の便を使って検証することもあった。また、使用する微生物は、社員宅等の水まわりから採取した微生物（野生株）を使用している。それは、購入株と野生株では、一般的に野生株の方が抗菌剤などの微生物対策技術に対して抵抗性を有している場合が多いからである。例えば、水まわりの微生物であれば、水道水中に含まれる次亜塩素酸に対して、抵抗性を有する株が存在する。効果検証には野生株を用いることで、実際のトイレで効果が得られるかどうか見極めることができる。



図4 -80℃のフリーザー

このような検証を可能とするために、全国の水まわりから分離（特定の微生物を分離して培養すること）、同定（種類を特定すること）した細菌やカビを約500種類以上、-80℃の低温フリーザーで保管している（図4）。また、お客様が効果を実感することを非常に重要視しており、ラボ試験のみで効果検証を終わらせることはなく、必ずフィールドテストで実際のトイレでの効果を検証している。そのため、研究所内だけでなく、関連事業部も含め多くのトイレをフィールドテストやモニターに活用し、お客様満足につながる努力をしている。

臭わないトイレへの挑戦

■臭い発生の原因究明

臭いの発生源には、大便由来と尿由来がある。トイレの大便由来の臭いは便器内で瞬間的に発生し温水洗浄便座の脱臭で対策できているのに対し、尿由来の臭いは飛び散った尿から継続的に発生してトイレ空間に広がってしまい、対策が難しかった。空間に広がってしまった臭いを脱臭するなどの対症療法は、臭いを低減させるだけで臭いのない快適な空間は達成できず、臭いを発生させない根本的な対策が重要であると考えた。そのためには、汚れの場合と同様に臭い発生のメカニズムを明らかにする必要がある。第一歩は臭い成分を特定することだが、トイレ空間内に存在する数百成分のうちのどれが臭いの原因になっているかは、分析装置だけでは分からない。一見原始的だが図5のように分析装置と人間の鼻を組み合わせたGC-臭い嗅ぎ法が唯一の特定方法であった。臭い嗅ぎ法では瞬時に臭いの強さと種類を判定する必要がある。

そのために数百種類の悪臭物質コレクションを使用して鼻をトレーニングした。トイレの臭いを装置で分析しながらどの成分が臭うのかを全神経を集中して嗅ぎ、一般に考えられているアンモニアよりトリメチルアミンという成分の臭いが強いことを見出した。次にこの成分がどうやって発生するかのメカニズムを調べた。汚れないトイレへの挑戦で紹介した水まわりから集めた野生株（図4）の中から尿中の成分を分解してトリメチルアミンを多量に生成する特殊な菌を発見し、菌が増殖する因子と臭い物質が気化する尿中の化学反応を解明し、メカニズムを明らかにした。

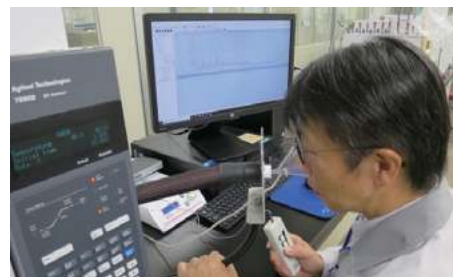


図5 GC-臭い嗅ぎ法

■臭いを作らせない技術

臭いが発生するメカニズムから、「尿成分を残さないこと」と「臭いを発生させる菌の繁殖を抑えること」という2つの設計指針を立てた。ここから、研究部門と開発部門が連携し、前者は少ない水でも尿汚れを残さないフチなし便器形状と旋回流による洗浄を組み合わせた便器や尿タレ軽減デザイン小便器、後者は「きれい除菌水」や高い抗菌性能を有したハイブリッド光触媒タイルなどを開発した。開発した商品の効果は、実験室や家庭のトイレだけでなく、臭いが発生しやすく一番厳しい使用環境のパブリックトイレでも検証している。駅舎や空港、学校などのパブリックトイレを上述した設計指針に基づいて改修工事し、改修前後の臭い物質と菌を測定し、官能的にも臭いが激減することを実証している。

■お客さまに快適な生活をしていただくために

臭いと汚れのメカニズム解明のために、図6の写真のように国内外のパブリックや家庭トイレをこれまでに100か所以上調査している。また、弊社の総合研究所には、化学や微生物を専門とするメンバーが豊富に揃っており、何故臭いや汚れが発生するのか、どうしたら対策できるのかなどの熱いディスカッションが毎日のように取り交わされ、ややもすると食事中まで糞尿の話題を続けてしまう。私たちは、このようにお客様に快適な生活をしていただくために、昼夜くさい臭いや汚れに真っ向から向き合って、まじめに、地道に、愚直に技術開発をしてお客様の満足を追求している。



図6 臭いと汚れの現場調査

近年は、新型コロナウイルス感染症拡大や度重なる自然災害、国際情勢の変化、また、デジタル技術の進展など、変化の激しい不確実で複雑な時代となっている。将来どこへ向かうのか、どのように社会やお客様の役に立っていくのかということを考えたときに、私たちは創立者の想いに立ち戻る。私たちの存在意義は社会のため、お客様のために、社会の発展に貢献し、豊かで快適な生活文化を創造していくことである。

TOTOグループは創立からの生業として、生活者視点で世の中の半歩先、一歩先を進み、社会に「きれいと快適」をもたらす商品を提供すると同時に「節水をはじめとした環境に配慮」した商品を提供してきた。私たちは「きれいと快適」と「環境」を両立する商品を「サステナブルプロダクツ」と定義し、これからもこれらの商品をグローバルで普及させることにより、「きれいと快適」を実現しながら「環境」課題も解決し、地球環境に配慮した豊かで快適な社会の実現に貢献していく。

伊丹愛子

出身地 神奈川県

最終学歴 順天堂大学大学院医学研究科修了

学位 修士（医学）

専門 感染制御科学、水まわりの微生物の研究

山本政宏

出身地 東京都

最終学歴 慶應義塾大学大学院理工学研究科修了

学位 博士（工学）

専門 分析化学・環境化学、水まわりの臭い・汚れの研究



TOTOの ユニバーサルデザイン

つくるって、人を思うこと。



どんな人が使うかを、思う。
その人はどんなことに困るかを、思う。
その人はどうすれば快適かを、思う。
できる限りたくさんの「その人」を、思う。

モノをつくるとき、空間をつくるとき、
TOTOが最初から最後まですることは、人思い。
すべての人の、よりよい暮らしのために、
とことんすべきことは人思いしかない。
優しさと知恵と技術と努力。



ユニバーサルデザインは、TOTOのすべてです。

TOTOのユニバーサルデザイン5原則



ラクにつかえる

- 体の動き、移動がラク
- 無理な姿勢での動作が無い
- 姿勢をラクに保てる
- 掃除がラク



操作しやすい

- 操作方法がわかりやすい
- 操作が簡単にできる



ここちよい

- 使用環境にあわせて適切な温度や明るさ等にできる
- 五感にやさしく、いつも気持ちよくつかえる



えらべる

- 多様な使用者や使う条件の違いに対応できる
- 変化にあわせ必要な機能を追加、選択できる



安全で安心

- 多様な使用者に対する安全配慮
- 万が一に備えた安心配置

TOTO技術相談室

電話：0570-01-1010 FAX：0570-01-2111

受付時間：（平日）9:00～18:00（土曜日）9:00～17:00（日・祝・夏期休暇・年末年始を除く）

建築専門家のための情報サイト COM・ET(コメット)
<https://www.com-et.com>

TOTOユニバーサルデザインサイト
<https://jp.toto.com/ud>



左官 職人社秀平組


 **SYUHEI**

左官 挟土 秀平



アメリカ・シアトルのIT企業のビルの多目的ホールに施工した壁

職人文化復活への最後の試み

職人社秀平組代表 挟土秀平

いまから30年前。すでに「職人は、このままでは消えてしまう」と言われていた。ちょうどそのころ、技能を必要とする職人の仕事がどんどん減っていた。左官の仕事のありかたが大きく変わっていたのだ。かつては現代建築の野丁場（ビルなどの左官）仕事では、外壁タイルを張るためにRCの躯体に厚い下地モルタルを塗りつけたが、それには精度が必要で左官の腕が問われたものだった。それが徐々にコンクリート打ち放しの上に不陸調整の薄塗りを施した上の吹付け仕上げに変わっていく。今はさらにコスト削減で、S造にPC板を張る工法へと変わってしまった。内装も、モルタル金ゴテ押さえがプラスターボードに取って替わり、技能を要する職人の現場は減り、仕事の仕方が激変した。



キリンの焼酎「白水」のCM背景となった壁面。
波紋が干渉しあう様を表現した

「職人」から「作業員」へ

そんな簡易な仕上げになったにもかかわらず、大職人不足だ。実は30年前も、左官業界には後継者が入ってきておらず、職人不足に拍車がかかっていたのだ。仕事は減っていく、後継者はいない、どんどん高齢化がすすむ。このままだと絶滅することは自明だったし、そのことが話題にもなった。

そして、どうなったか。30年、その状態のまま時間が過ぎただけだ。国から手が差しのべられることもなく、左官人口は最盛期の5分の1と言うが、実質10分の1だと思う。左官だけではない。大工も、伝統的な工法の継承はもちろん、少し難しい仕上げができる人材の育成は十分ではない。ハウスメーカーが台頭して以降、住宅は打ったり、切ったり、貼ったりして、短期間で出来てしまうものになった。そこにいるのは作業員であって、職人ではないだろう。

進む鈍感力

同時に建築関係者の眼力が変わった。職人仕事を見ないのだから、どういう工程をたどるのかどれくらいの時間がかかるか、見当がつかない現場監督は50代でも多い。無理もない。建築家は常に新しいことを追い、建築計画が優先。巨大な構造の大空間で、求める素材は「色は、白、グレー、ベージュ、シルバー。透明のガラス、磨いた大理石」である。これで空間を作ることが、新しく格好のよいモダンなこととなった。住宅でも店舗でも、足並そろえて極端にそっちへ振れてしまった。

色彩を使わないから、色合い、肌合いに対する感受性が低くなる。たとえば、壁に照明が当たり、内側のボードのジョイント部分の凹凸が浮き出て見えていても、設計士や現場監督が「これはまずいぞ」と気づかないようになった。実際、現場に入って、私たちより前にできている仕上げを見て「ウソ！ 現場監督も建築家も施主も、ほんとにこれで建築検査を通したの？」と思うことがある。そういう仕事が普通に通る時代になっている。それでいいなら職人も手を抜くようになったのか、もしくは未熟な腕なのに通ってしまったか。みんなで鈍感力が進んでいく。

失われる美意識

釈迦に説法だが、もともと日本の建築は、寺社仏閣も城も土蔵も数寄屋も民家も、こまかい意匠や技能がぎっしり込められている。床柱、長押、竿縁天井、釘隠し、雪見障子。大工なら木の板目にこだわり、寸分狂わぬ留めにこだわった。左官もわずかな鍔波にすら細心の注意を払った。空間には多くの出隅入隅があるだけでなく、角には面取りがあり、線が4本になる銀杏面まであった。城郭の破風も、窓まわりも、蛇腹も線にあふれている。「不要な線は省いてシンプルに」を一義とする現代建築の人間には手に負えないものになっているかもしれない。

シンプルとは対極の、そんな建築のなかに入ってみるとどう感じるか。信じられないくらい柔らかく、アシンメトリーでも均整が取れていて、素晴らしい。日本人はすごかったと唸らせる、現場で生み出されたオリジナリティに、繭のようにくるまれる感覚。昔のものであっても、よくよく考えられたセンスのいい空間は、線の集合体でありながらクールでうざくない。そこにある線は「不要な線」ではない。

そういう空間に日本人である矜持、美意識をしみじみ感じる。昔からの日本の美意識に触れたいと思っている海外の客人は多い。日本人はいつも自分の大切なものを安易に失ってしまう。取り返しがつかなくなるぞと警鐘を鳴らすのは、海外の人であったりする。職人の技能が日本の建物の美意識を支えていたことを建築家、現場監督、施主まで知らない時代になった。みんなで知らないから疑問にも思わない。プロフェッショナルと認められた腕利きの職人たちほど、泣き言も言わず、黙って第一線を退いていった。



ホテル、アマン東京のレセプションに施工した「11月の蔓」の部分。
山葡萄の蔓や実を埋め込んでいる

職人仕事の粋を集める……「歓待の西洋室プロジェクト」

私はずっと継承されてきた左官技能を使って、現代的な感覚で意匠を作ろうとして左官の仕事を続けてきた。東京の外資系のホテルや海外で仕事をすると、「日本ってなんて素晴らしい。AMAZING!」と言われることがあるし、壁を塗る所作を美しいと言われることもある。でもいまや職人文化はもう復活が望めないほどの状態になっている。30年、気づかずみんなで漂流していた。一般の人にも見る目が育ってこなかった。昔のように目利きの旦那が腕利き職人を選んで普請するということは望むべくもない。

人が一世代で真の実力を発揮する時間は25年。30年の空白となるとすでに2世代が途切れている。作るほうの感性が途切れ、目利きも途切れている。いいも悪いも言えなくなっているのだ。歴史と未来をどうつなぐのか、自分たちの財産をどう守って未来の人たちにつないでいくのか、この国は真剣に考えているのか、疑問に思う。

その悔しさもあり、私は自分自身で「歓待の西洋室プロジェクト」を続けてきた。大正時代の古い洋館をゆずりうけ、原生林を手作業で開き、移築し、進化させながら保存するプロジェクトだ。そこには大工仕事、石の仕事、もちろん左官仕事の粋も集めている。いずれ絶滅するとわかっていたから、もうその時が最後のチャンスだと思った。第一線を退き引退していた腕利きの職人たちに声をかけ、タイムカプセルのように技術を詰め込んだ。モノを残すことでしかつなぐ方法はない。その洋館が20年かかって完成に近づいている。公開はしていないが、ぜひ訪ねたいという建築家がいれば、見てもらいたいと思う。ここには日本のアイデンティティが感じられると信じるし、それを作ることでしかこの時代の悲しみに私は耐えられなかった。

職人のことは脱・二酸化炭素問題と似ていないだろうか。30年前から問題とはされつつ、気候変動で甚大な災害が頻繁になるまで、目の前の経済を追うことに奔走して問題に正面から取り組むことをおきざりにした。もし30年前にしっかり考えていれば、日本の循環型の建築の技能はもっと注目され、山の循環も保たれていたのではないだろうか。そうすれば式年遷宮を例にするまでもなく、職人の技能は伝承でき、職人のいる未来は残されたのではないか。そして、日本はSDGsの最先端の国になれたかもしれない。そう考えるのは私だけなのだろうか。

挾土秀平 Syuhei Hasado

左官。職人社秀平組代表。1962年、岐阜県高山市生まれ。1983年、技能五輪全国大会左官部門優勝。父の会社で美術館やホテルなどの現場を手がける。2001年「職人社秀平組」設立。土・砂・石灰・藁など、自然素材の力や色を活かし、ストーリーのある壁を制作。主な仕事にザ・ペニンシュラホテル東京、アマン東京、JALファーストクラスラウンジ、NHK大河ドラマ「真田丸」の題字・タイトルバックなど。www.syuhei.jp

タイル 織部製陶株式会社



松灰陶板彫刻レリーフ

やきものを極めたい

織部製陶株式会社 営業部 谷川智崇

カタログやインターネットで製品を選ぶ時代、一貫して特注生産にこだわり続けてきた。建築家、デザイナーと寄り添うことは新しいモノづくりに繋がってきた。私達が作り出す製品は自社製品と考えず、アイデアを供給した建築家、デザイナーの製品であり、それを実際に工事現場を統括する方、貼る職人さんの存在あっての完成と考える。特注品ならではの。

創業より44年続いたのはこのような方々に支えられ、育てられ、生産できた“やきもの”タイルを納品し続けることができたからであり、要望に必死に応えようとあきらめず奮闘する製造の職人のおかげである。



原料置場



試作の山

土にこだわる

織部製陶。社名の由来は岐阜県の織部焼の祖である古田織部にあやかっつけたもの。その古田織部のゆかりの地、岐阜県美濃地方にこだわり続けた。その地に我々が目指す“やきもの”の良質な土が採れるからだ。木節粘土、この原料を主とし様々な原料を配合し、要望に応じた形状、風合いを作り出す。都度現場ごとに土の配合を変化させることはオリジナルの追求に必須条件となる。数十種類の原料を常にストックしており、細かい要望にも常に応えられるようにしている。特注専門の工場だからだ。

試作

ゼロ段階から生み出す製品は時間を要する。試作は約1か月単位で作りあげる。時には岐阜県にある工場へ足を運んでいただき、製造の現場で打ち合わせをしたり、試作作りを3回～4回実施することもある。皆様こだわっていただけるので、時間を費やすことになる。

職人技

作り出す量や製品により異なるが、約2～3か月の時間をいただきオーダーメイドのタイルを仕上げていく。効率よくオートメーション化された設備での大量生産が可能な工場ではなく、機器は使用しているが極力職人の手での生産にこだわり続けている。練った土をタイルの形状にしていく成型工程や乾燥させてタイルの窯積み、焼きあがったタイルの選別など重要なところは職人の判断で行われる。例えば日本には四季があり、その季節ごとの調整も重要だ。夏と冬では窯積み前の乾燥時間が違い、乾燥不十分で焼きあがったタイルには裂傷が入ったりするので、培ってきた技術と判断で時間を変化させる。また50mある窯は中心地点が最高温度1320度に達し、酸素をしぼり、やきものらしい自然な色幅を出す。温度は変えることができないため、窯の中の台車の位置（上段、中段、下段）に応じてタイルの色幅の調整など熟練の職人が支えている。このように職人の判断で仕上がるものこそ、味わいのある“やきもの”タイルになる。

ハンドメイド仕上げ

私共は顧客からの依頼を人の手で表現することが多い。成型から乾燥の間にタイルの顔となる表情、風合いを、要望に応じて職人の手で一枚一枚仕上げていく。オートメーション化された機械ではなく、自ら作り出す簡単な道具を用い表現していく。均一さを出さず敢えて一枚一枚が不揃いに仕上げるのだ。

この顧客の要望に応じて作り出すハンドメイドのタイルを製品名「クレイマイスター」と称している。ドイツ語で土職人を意味する。様々な打ち合わせにより具現化していくクレイマイスターは色、表情、形状と都度変わるため、ご依頼いただいた顧客の完全オリジナル製品となる。

Noと言いたくない

特注を専門に我々営業は打ち合わせを進める。顧客の要求を製造側に伝える。こだわりを持つ建築家、デザイナーの皆様だからこそ弊社を選んでくれていると考えている。もちろん製造側も同じ意志を持っている。限られた時間、常に新しいものへの挑戦は失敗も多く、試行錯誤の連続だ。タイルの試作より1年、2年経過し本体の製作となれば、土の層、窯の温度など変化が著しい。少しでも再現しようと努力する。この試行錯誤の中から新しいものづくりにつながることもある。難しい課題があっても、新しい製品が生まれると考えている。工場長は言う。難しい課題に対して「できないことはないよ」と濁す。

我々営業はその言葉に励まされる…。

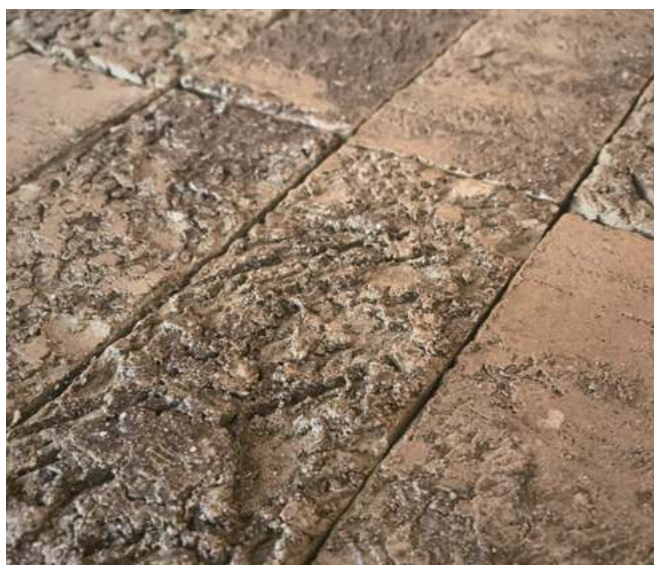


手加工

「松灰陶板」の完成

お茶碗などでも知られる釉薬。我々は元々釉薬を用いず、土本来の風合いで、製品を作り続けてきた。苦手といえばそれまで……。顧客の要望や代表の希望もあり、やきものを研究することに。社名の由来、織部焼や美濃地方の志野焼、瀬戸焼など様々や陶器を調べ、釉薬の原点となる灰釉（かいゆう）に着目する。本来窯の中の燃料の灰が溶け、製品に付着した自然釉であり、茶器などの灰かぶりの状態でできあがるやきものを取り入れたいと試行錯誤した。我々が用いたのは松の焼成灰で、職人の手仕事と組み合わせて「松灰陶板」を完成させた。

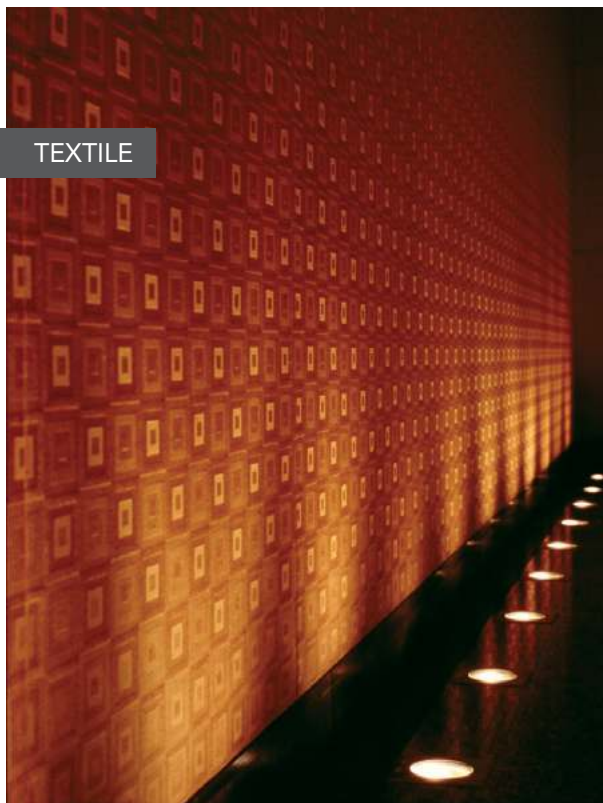
この灰釉を使った製法で独特な艶が表現でき、目指す“やきもの”の一品となった。



職人の手仕事と灰釉を組み合わせた松灰陶板

谷川智崇 2010年 織部製陶株式会社入社

テキスタイル NUNO



「マンダリン オリエンタル 東京」1階エレベーターホール
Photo by Okochi Tadashi

森と水／成長と成熟の物語 テキスタイルが主役となるホテル

NUNOテキスタイルデザイナー 須藤玲子

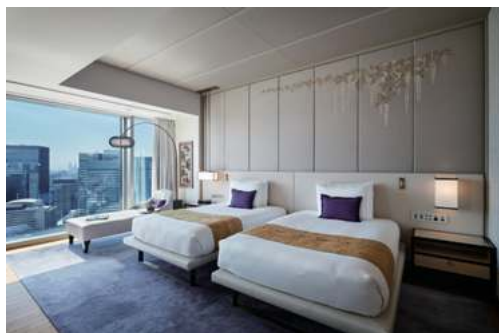
今から20年ほど前の2000年、私たちNUNOは「マンダリン オリエンタル 東京」のプロジェクトに参加していた。2005年に日本橋に開業するホテルのテキスタイルのデザインをするにあたり、「森と水」というデザインコンセプトを打ち立てた。 私たち日本人は四季折々、美しく変化する山川草木に囲まれ、独自の感性と文化を育んできた。森は山川草木の源であり、私たちの文化は森によって築かれ、生活も森によって支えられていたと言える。そして山から発し、川となり流れる水も、私たちの文化と生活になくてはならない。特に食文化において水は重要だ。稲の生育には水が必要、日本酒、お茶、そば、どれも澄んだ水がなくては美味しくない。日本の豊かな文化を形成し、日本人の生活を支えてきた、どちらも重要な存在だ。



ゲストルーム2005～2019年 Photo by Okochi Tadashi

マンダリン オリエンタル 東京からは、緑地（森）も望める。それは、皇居（パレス）だ。東京、そして日本の中心には、堀（水）に囲まれた広大な緑の森が広がる。皇居（パレス）もまた、「森と水」。

こうした思いを巡らせ、コンセプトが決まっていた。デザインワークでは、「森と水」をイメージしたドローイングから始まり、数多くのテキスタイルを試作した。中にはドローイングで終わったもの、あるいは試作で終わったものもある。その中から選ばれたテキスタイルは、ホテル空間の壁、天井、床に使用され、空間を構成した。また、いくつかはブラインド、間仕切り、ベッドカバー、クッション、家具の張り地、照明器具のシェードなどとなり空間を色付けた。さらに数点のテキスタイルはホテルのロビーで、アートワークとして“森と水”を力強く表現した。



ゲストルーム2019年～ Photo by Nacasa&Partners Inc

染織工場40社を動員

このプロジェクトのために動員された染織工場は、主なところだけでも全国で40社におよぶ。それも、従来の決められたサンプルから布を作る仕事ではなく、図案からオリジナルのサンプルをおこし、布地をつくってゆく作業であったから、制作は大変だった。しかし産地の職人魂を刺激する仕事であったと思われ、一斉にマンダリン オリエンタル 東京を向いて切磋琢磨し、各地で一斉に製作が始まった。さらにプロジェクトのこだわりは、日本の伝統文化の継承にも及んだ。ゲストルームの壁を飾るのは、染め物に使われた「伊勢型」のコレクションである。それはホテルの一角がミュージアムの役割を果たしていると言える。

日本橋という立地

マンダリン オリエンタル 東京はこうしてテキスタイルが主役となる、世界でも稀有なコンセプトを持つホテルとなった。それは、ホテルの立地が日本橋であったことが、運命づけていると思えてならない。日本橋は江戸の痕跡を残す、東京でも数少ない場所であり、日本の文化、産業の中心であり、なかでも和服は江戸の華であったからだ。その後、マンダリン オリエンタル 東京は、2020年に向けて改装をおこなうこととなった。そこで、デザインテーマである「森と水」を引き継ぎ、デザインのテーマを「成長し成熟した森と水」とし、改装に向けて準備が始まった。



38階メインロビー Photo by Nuno

西陣産地から三河産地へ

「森」の成長はあちこちに「こもれび」をつくる。自然を愛して、四季の移ろいに寄り添い生きている日本人には当たり前の「こもれび」だが、英語には対する単語がないようだ。38階メインロビーでゲストを迎えるラグは「こもれび」をモチーフとしている。制作はテキスタイル産地の最北端、山形県の5名の職人による手作業の織工程をへて、奥深い立体的なラグに仕上げた。歴史を経た「森と水」の濃厚な緑色が、苔むした「森」のようでもあり、高低差をつけたテクスチャーが奥行きを与えることになった。椅子の張地に用いたデザインは、丸く小さく可憐な花を咲かせ、生命力豊かな「ヒメツルソバ」をモチーフにしている。制作は織物の歴史を西暦750年まで遡る三河産地を選んだ。織物の伝統を守る三河産地は、現在ではインテリアテキスタイルの生産地として常にリードする開発力と探究心のある産地である。椅子に採用したテキスタイルは同一模様を2色の色合いで構成しているが、それぞれの色合いに合わせて、素材と織組織を変化させ、同じ柄でありながら、趣きが異なる。一方、一階のエントランスロビーでゲストを迎える年輪模様の織物は創業時のまま、15年の年月を感じさせない艶やかな深い赤色をたたえている。日本の織物の発祥の地である京都西陣で織り上げた最高峰の紋織物は不変とも言える。

土地が育んだ歴史と文化への尊厳

マンダリン オリエンタル 東京は、オープン当初から一部を除き、ほぼ日本の産地で作られ、メイド・イン・ジャパンの布地で覆われている。外資系でありながら、日本のホテルでさえ思いつかなかったようなこだわりを貫いたのは、マンダリン オリエンタル ホテルグループの基礎となっているこの言葉に集約されている。『Sense of Place』、その場所ならではの何か。それは、単にその場所らしいデザインを取り上げるといった表面的なことではなくて、その土地が育んできた歴史と文化に対する尊厳なのだ。日本橋のマンダリン オリエンタル 東京で過ごした経験が忘れられない印象として人々の心の底に記憶として残る、それをテキスタイルの風合い、色合い、そして手触りが導いたとしたら本望だ。



1階エントランスロビー Photo by Okochi Tadashi

須藤玲子

テキスタイルデザイナー。1984年、株式会社「布」の設立に参加。現在、代表取締役デザインディレクター。日本の伝統的な染織技術から現代の先端技術までを駆使し、新しいテキスタイルづくりをおこなう。布の豊かな表現性が評価され、ニューヨーク近代美術館など世界各地の美術館に作品が所蔵、2008年より無印良品のファブリック企画開発に携わり、2016年よりデザインアドバイザーボード。毎日デザイン賞、ロスコ賞、JID部門賞等受賞。英国UCA芸術大学より名誉修士号授与。東京造形大学名誉教授、セントラル・セント・マーチンズ客員教授。

伊達冠石採石 株式会社大蔵山スタジオ



大蔵山の未来を語る山田さん

石を訪ねて。———大蔵山探訪記

山の主 大蔵山スタジオ代表 山田能資
訪ね人 竹中工務店 黒柳 亮

石は地球の記憶の賜物。石を住空間に活かすことで、古の人々が持ち合わせていたプリミティブな感覚を現代に伝えていきたい。 山田能資

山で人に会えると、何故か人は心を許してつい色々語ってしまう。誰もそんな経験があるのではないだろうか。相手が山の主（あるじ）のような人ならば、尚更である。今回の山の主も、来客を喜んでくれていたのだろうか、共に山を歩きながら大蔵山の物語をゆっくりと、語り部のように丁寧に語ってくれた。語ってくれたのは、山の主というにはまだ若い（しかし何故か主っぽい）、大蔵山スタジオ代表の山田能資さんである。

この度訪れた宮城県の大蔵山は、秋の少し物憂げな風と静けさの中であって、力強い大地の鼓動を切り取った迫力に満ち溢れていた。ただただ「静なもの」であるはずなのに、どこまでも熱く語りかけてくる伊達冠石の凄まじさに圧倒されながら、山田さんと大蔵山を巡り歩いた。

伊達冠石とは、ここ大蔵山で採掘される鉄分を多く含んだ表情豊かな石材を指す。様々な色と模様があり、その独特な錆の表情から建築空間でアートのように使われることが多い石材である。大蔵山はその伊達冠石の採石場であるのだが、普通に私たちが想像する採石場とは異なる風景を作り出している。採石行為そのものがアーティスティックなのである。何故そう感じるのかは山田さんの話を聞くと良く分かる。

「石というのは地球の骨のような感じがするんです。それを削っていただいているのだから、きちんと山に感謝して、何かを返さなければならないと思うのです。ここは土も植生も豊かなので、採石場を含めてランドスケープを考えて、山全体を物語のある場所にしていきたいと考えています。既に造ったギャラリーをはじめ、山の恵みをいただく食堂や、ゲストハウスなども造って、山そのものを五感で感じ取っていただけるような採石場をつくりたい。そうした山全体の物語と採掘に対する哲学を、私たちが生み出す石の創作物に乗せて届けていきたいのです。」

彼の話はとても興味深い。最終出来上がった「モノ」だけが重要なのではなく、そのプロセスにある物語が透けて見えるかどうか重要だという。そうすると、要るものと要らないものが見えてきて、部分的には事業を縮小しながらも、山に対して正直な方向性に舵を切っている。成る程、日本人的な自然観と西洋的な商業哲学とを上手に熟成させている人だなと感じた。まさに万物に感謝する「いただきます。」の心をアーティスティックな西洋的感性で経営に結びつけている。そしてその感性が形となって山に現れている。採石場には木や竹が生い茂り、全くの自然と、少し手を入れた自然と、石を積んだ人工的建造物とが、絶妙のバランスで構成されていて、まるで音楽を奏でているかのようだ。例えば昔の採石場から投げ落とされた石達が苔むし、そこに自然と竹が生えて、見たことの無い偶然の美しさを形成している。又、苔むした石の先に沼というには余りにも澄んだ水をたたえた沼が垣間見えたりする。歩を進めるにつれて感覚がゆっくりと、少しずつ研ぎ澄まされてゆき、気がつけば山の物語の中に入り込んでしまっている感覚になる。完全な自然ではなく、人の活動と山の息吹が調和した心地よさがここにはある。こんな山に私は未だかつて出会ったことがない。山を巡りながら、彼の見据える未来の山の話聴く。先代が山への感謝を形にしてきたことでここまで美しい風景が出来上がっているが、彼にとってはまだまだ序章の段階のようだ。きっと山の物語はここから更にドラマチックになってゆくのだろう。



屋内に巨大な伊達冠石がそびえたつ山堂サロン



採石中に偶然できた天然の彫刻 唯一無二の迫力がある



山田さんのイギリス在学中の友人が描いてくれた大蔵山の案内図 山を歩いた後に見直すと、とても分かりやすい地図だと気付く



宇宙の構成要素、空・風・火・水・地を象徴する五輪塔



雷が落ちてこの形になった柳 生命力と偶然の造形に魅了される



採石を投げてそのままの状態から、石は苔むし、竹林となって風景になる



彫刻のような石が並べられている 石の青空ギャラリーとでもいうべきか



今まさに採石している採石場 特徴のある伊達冠石が美しい



採石場の一部が池になっている 採石行為そのものが風景を更新していく



何でもない秋の風景が美しい 晴れていれば蔵王連峰が見える



巨石を立てて、廻りを囲った円形の現代イワクラ



イサムノグチが石を採っていた岩壁 当時のままに保存されている



加工場で石とガラスを磨いている職人 こうして石はアートに生まれ変わる



山を一巡りして、石と木でできた 温かいスタジオに戻ってくる



薄い石の傘でできたスタジオのペンダントライト 曲面と表情が何気なく美しい

そして、イサムノグチがそこに居た。

ここ大蔵山がその名を知られている理由のひとつに、やはり彫刻家イサムノグチ氏の存在がある。彼がここで伊達冠石に惚れ、彫刻に使った事から、沢山の彫刻家やアーティスト、デザイナー達がこの山の石に魅了され、今も尚日本中から声がかかり続けている。石切場をぐるっと巡って、ある場所で山田さんが立ち止まって、私に教えてくれた。「ここがイサムノグチさんが石を採っていた場所です。」と。その時のままに、今も同じ姿で保存しているという。彼の彫刻が男型だとすると、ここは雌型とでもいうべきか、、、何十年か前に、イサムノグチさんがここで石を眺めていたのだと思うと、感慨深い。「でも、石にとってはそれもいい最近なのかもしれませんね。」と私が呟くと、山田さんは、ちょっと私の反応が面白かったのだろうか、笑いながら「なんならつい今しがた、すれ違ったぐらいですよ。」と答えてくれた。彼も直接本人にはお会いしていないというが、常にこの採石場を通して偉大な彫刻家と向き合い続けている様子が窺えた。

そしていつの間にか日が沈んで、とっぴりと暮れたスタジオを後にした。次に訪れる際には物語の続きに会えるのだと思うと嬉しくなる。帰り際にスタジオの端で、イサムノグチさんと山田さんの祖父が先程見てきた採石場をバックに並んで撮った古い写真が目にとまった。石にとってはついさっき・・・ということなのだろう、きっと。

山田能資 1980年宮城県生まれ。玉川大学文学部英米文学科、英国セントラル・セント・マーチンズ芸術大学グラフィックデザイン科 卒業。2008年山田石材計画（現・大蔵山スタジオ）に入社。国内外のクリエイターとの協業や自社でのプロダクト開発、文化事業などを手がける。17年より代表取締役



建築空間で伊達冠石は強い個性を放つ

鑄造 株式会社能作

能作
N O U S A K U



新社屋の顔となっている木型倉庫

伝統産業 × 観光産業によって高岡と世界を繋ぐ

株式会社能作 代表取締役社長 能作克治
聞き手 黒柳亮 東奈生子

創業105年の富山県高岡市の鑄物メーカーである能作。

まちに開かれた新社屋を拠点として地域と繋がった伝統産業の革新を目指す能作克治社長にお話を伺った。

スタートはお客様の声を聞いて商品を作るということ。

私は、35年前に能作に入社したのですが、当時は問屋さんの下請けで、仏具を中心に製作していました。私たちの鑄造に限らず、伝統産業と呼ばれるものは、その商品から流通まで型にはまっていて、それを受け継いでゆくというような漠然とした考えが中心にあります。確かに守るべき大切なものは沢山ありますが、それだけでは伝統産業の先細りは避けられず、変えられる部分はないものかと模索していたところ、ある時声掛けをいただいて、東京でお茶道具や花器の展示会を開催しました。すると有名なセレクトショップから、展示していたベルを取り扱いたいという話をいただいて、ベルをショップに並べてもらう事になったのです。ところが、全然売れない。なぜだろうと思っていたところ、ある店員さんより「能作さんのベルは音が綺麗なので、風鈴を作ってはどうか？」と言われたのです。成る程と思い早速作って並べてもらったところ、売り場で勝手に鳴ってくれるので、飛ぶように売れはじめたのです。

この時感じたのは、買い求めてくれるお客様や店員さんと接点を持って色々な意見を聞くという事が大切という事でした。ものづくりはユーザーが望むものを作っていくことが重要なのです。それから、直にお客様と触れ合っている店員さんの意見を聞いて回るようになり、出てきたのが、食器など身近で実際に触れて使えるものが欲しいという意見でした。これはチャンスだと思ったのですが、食品衛生法によって、銅の混ざっている真鍮では食器を作る事が出来ません。では他にどんな素材だったら能作で作れるだろうかと考え、融点が低く、少ない熱量で加工が出来る「錫」を使ってみることに



自由に引き伸ばせる錫製の「KAGO」

しました。日本では大阪錫器や薩摩錫器等がありますが、全て亜鉛や銅と併せて固める「ピューター」と呼ばれる錫合金です。その理由は、錫100%だと人の手の力程度で曲がってしまうので加工する事が困難だからです。しかしここで諦めず、成型鑄造という手法で型を綺麗に起こせば、ほとんど加工を施さずに製品化出来るのではないかと思います、チャレンジしたのです。職人の技術が高くないという事はできません。伝統工芸によって培われた技術力がここでモノを言ったのです。それでも最初の職人からの評価は、そんなの柔らかすぎて商品になるわけがないというものでした。確かに、出来上がった錫の製品はちょっと力を加えると歪みます。そこで、だったら曲げて使えばいいじゃないという発想に切り替えて、「柔らかい錫」という特性を前面に出して商品化することにしたのです。

そんな折、デザイナーの小野里奈さんが錫ですごいものを考えたのですが、製品化できるものだろうかと県から相談がありました。見てみると、迷路のような形の籠で、繊細な細かな線でできています。難しい形状でしたが、能作の技術力ならば可能だろうと引き受けて作ってみました。すると、これがとんでもなく面白い。錫の特性と彼女のデザイン、そして能作の技術力によって、平面から、自由な形に立体にして使えるという新しい発想の道具が出来上がったのです。それが今、能作の錫商品を代表する人気商品になっています。

倉庫で観光ハブをつくる。

2017年に完成した能作の新社屋は、木型倉庫を中心に、工場、本社機能、カフェ、体験スペースなどが一体となった建物になっています。中央のガラスでできた木型倉庫に並ぶ木型は展示用ではなく、実際に鋳物に使っている木型が並んでいます。この木型倉庫を見せる計画にしようと思った経緯には、物語があります。私が入社して間もない頃、ある親子が見学させてほしいと訪れてきたのです。興味を持ってくれたのかなと嬉しく思い、一通り工場を案内した後、お母さんが子供に「よく見なさい。勉強しなかったらこんな仕事につく事になるのよ。」と言ったのです。なかなかのショックでした。伝統産業や地場産業というのは土地があって成り立つものであり、その土地の人々に職人が認められないような事はあってはならないと思い、まずは地域の方々の意識を変えようと考えました。そこでこの出来事を逆手にとって子供を中心にどんどん見て貰い、きちんと知ってもらおうと見学会を始めました。最初は少人数でしたが、次第に学校単位で見学を受け入れるようになり、遂には1年間で1万人の見学者数を超えるようになりました。この考えが工場や倉庫と一体となった新社屋建設に結びついています。建替え前から木型倉庫は見学者に人気の空間だったので、建築家の広谷純弘さんがエントランス正面にガラスの木型倉庫をつくって見せるという素晴らしい案を出してくれました。まさに能作の技術力をあらわしている生きた空間になっています。

新社屋を建設してからは、若いお客さんも多く、子供の頃に工場に見学に来た子どもたちが、就職を希望するようにもなりました。地元の方々も、高岡の鋳物生産を地域産業として誇りに思えるようになってきたと思います。今では年間13万人のお客さんがこの社屋を訪れます。富山観光の一翼に位置付けられている事は非常に有り難く思っています。しかし、ここだけを見学してもらっても地域全体としては活性化していきません。そこで、何かできる事はないかと考えたのが、「富山ドアーズ」です。能作が観光ハブとなって富山の魅力を沢山発見してもらう事を目的として、エントランス付近に250枚の産業観光カードを見せる棚を作りました。富山中にこんなに良いところがあるよという、社員のリサーチによる手作り紹介カードです。この富山ドアーズをきっかけに、富山の魅力を広く知ってもらい、地域の活性化に繋がればこんなに嬉しい事はありません。

そして、ものづくりの未来をつくる。

伝統産業は守るべき部分と、思い切って革新すべき部分のバランスが大切です。最近では建築分野の照明器具や什器・壁材の製作を手掛けています。ホテルのフロントカウンターなど、徐々に大きなものも手がけるようになってきました。又、錫の抗菌性や曲がる特性を活かした医療機器の開発・製造や、3Dプリンターの活用など、分野や製法を問わずチャレンジしています。そういうチャレンジが伝統産業の永続と、世代を超えた「ものづくり」の喜びに繋がるのだと思います。

そして今、日本中の伝統産業が繋がって、世界に向けてアピールしていく場をつくろうと、グループをつくって大きな動きを生み出すべく働きかけています。そういった活動を通して、様々な伝統産業が形を変えながらも発展していくために、できる事は何でもやりたいと思うのです。



砂で鋳型を作る工程



自作のサインがそれぞれの場所を示している工場内の風景



富山ドアーズについて語る能作社長

能作克治

1958年福井県生まれ。大手新聞社のカメラマンを経て1984年、能作入社。鋳物職人として18年働いた後、2002年代表取締役社長に就任。2016年藍綬褒章受章。

輸入家具 株式会社インテリアズ



エ インテリアズ | ボッフィデパドヴァ東京

einteriors | by interiors

limitless, borderless, timeless なデザインを日本、そして世界へ。

株式会社インテリアズ 代表取締役 國分秀記

2011年、イタリアのハイエンド家具ブランドを中心に、日本の販売代理店として創業した株式会社インテリアズ。現在では、Boffi|DePadova（ボッフィデパドヴァ）、LIVING DIVANI（リビングディバーニ）、porro（ポッコ）、そしてSALVATORI（サルバトーリ）などを販売する一方で、創業以来、コントラクトビジネスで実績を積み上げてきたオリジナルブランド by interiors（バイ インテリアズ）も展開。今年4月には南青山にショールームをオープンした。数多くのブランドを取り扱い、販売を続けてきたインテリアズの國分秀記代表取締役社長に話を聞いた。



写真右・左）ピエロ・リッソーニとピエロのスタジオにて

ーインテリアズでは、個性豊かな複数のイタリアブランドの取り扱いをされておりますが、これらのブランドを取り扱うことになった経緯を教えてください。

きっかけは「ピエロ・リッソーニ」です。彼との長い友人関係から、彼がアートディレクターとして監修するブランドを中心に、日本での総代理店としてインテリアズで取り扱うことになりました。元々、ピエロのデザイン、ディテール、そして世界観がとても好きでした。個性を持つブランドを複数ミックスしても違和感なくお客さまに紹介できるのは、ピエロがプロダクトデザイナーではなく、空間全体を考えられる建築家であり、彼が中心となって作り上げている世界だからだと思います。



そして、我々にとっては、一つのショールームで複数のブランドを提案できることが、他にはないユニークネスだと考えています。

ちなみに、石材メーカーの「SALVATORI」は、ある時サローネでBoffiのショールームの壁に採用されていて、それを初めて見た時に心打たれました。長年の間、海外出張する時は「海外にあって日本にはないもの」を探し続けていて、イタリアでは必ずピエロのスタジオを訪問し、マテリアルサンプルルームで、世界中のあらゆるマテリアルを見せてもらっていたんです。そのおかげで、SALVATORIの石を見た時は一目惚れでした。家具をメインに取り扱っていましたが、私たちが取り扱う家具や空間にぴったり合う大理石であり、必ずお客さまに喜んでもらえると確信しました。家具屋である我々が扱うには、大理石はリスクが大きいことを認識しながらも、どうしても諦めきれずに社員たちを説得し、SALVATORI社長のガブリエレにも必死にプレゼンをして代理店契約を結び、今に至ります。

ーイタリア家具というと、デザイン先行のような印象がありますが、イタリア、 且つ、ハイエンドブランドならではの特徴はありますか？

「アートディレクターを社外に持つ」という組織だと思っています。インハウスの場合、工場の事情や、職人の技術力、営業力、社長など、様々な要素に対して考慮せざるを得ず、新しくチャレンジするデザインが生まれにくい。しかしながら、社外に置くことで、デザイナーの要求に対して、これまでの限界を超えて真剣に向き合う必要性が出てくるのです。言ってみれば、ヒエラルキーを考えずにデザインに進進できる。以前、「LIVING DIVANI」では、16mm角のパイプの太さをどうしても11mmにしたいというデザイナーのリクエストに対し、会社が丸一となって取り組み、そのデザインを具現化しました。この5mmにチャレンジできる環境が、デザインとともに技術力を向上させ、デザインとクオリティの両立を図ることができるのだと思います。

また、LIVING DIVANIは、元々フランスのクラシカルなソファブランドの下請け工場でしたが、ピエロがアートディレクターに参画することで一気にモダンデザインへとシフトし、ハイエンドブランドとしての地位を確立しています。さらに、1986年からピエロがアートディレクターに就任し、現在も継続している「Boffi」は、ハイエンドブランドとして先進的なデザインを提案し、お客さまのニーズに向き合える体制を取るための内製率の高さもさることながら、SALVATORIなどをはじめとする石、ガラス、木、金属など、専門の素材メーカーと協業をすることで、素材、デザイン、クオリティ、全てにおいて業界をリードする存在になりました。世界一のデザインとクオリティは、アートディレクターを中心に、デザイナーと職人のぶつかり合いによって生まれるのだと、これらのブランドを通じて肌で感じています。

そして、我々が取り扱うブランドのほとんどは、その昔、ファミリービジネスからスタートしました。今もなお、家具ブランドが集まる「ブリアンツァ」という地域に拠点を置いています。かつて、皇族たちがコモ湖にヴァカンスに出かける際、馬車では一日以上かかる道中の中間地点に位置するブリアンツァに立ち寄り、一泊を過ごしたそうです。次第に、そこで家具を選び、オーダーをしてからヴァカンスに出かけ、ヴァカンスから戻る頃には完成した家具が住まいに納められました。このようにして、ブリアンツァは家具の産地として栄え、高品質な家具が作られるようになり、素晴らしい職人、そして技術が、伝統として脈々と受け継がれていると伝え聞いています。



サルバトーリ社長ガブリエレとサルバトーリのショールームにて



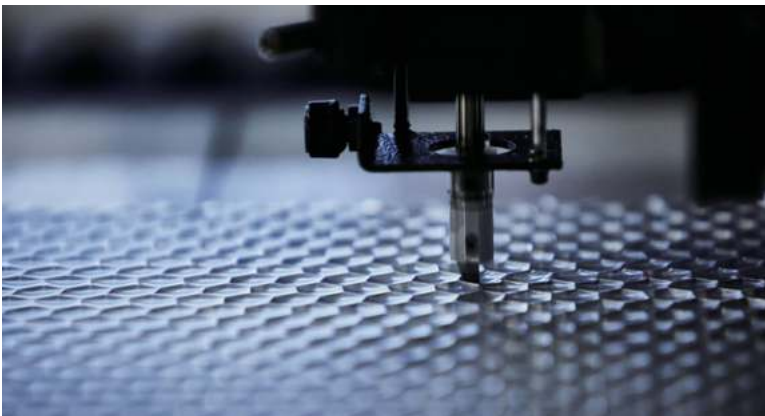
今年オープンしたリビングディバーニの新ショールーム



エ インテリアズ大阪



バイ インテリアズ東京



アルミニウムハニカムパネルのハニカム部分

ー日本のオリジナルブランドとしては珍しく「アルミニウム」の製品が多く見受けられます。アルミを採用された理由は何ですか？

アルミは再利用可能なサステナブルな素材であり、強度や耐久性、そして軽さなど、多くの利点を持っています。我々はさらに、パネル自体が構造体を兼ね備え、軽くて強く汎用性の高い「アルミニウムハニカムパネル」という素材に着目しました。アルミをまるで木工のように扱う技術力とともに、新しい家具の提案を続けています。

ー最後に、輸入家具ブランドを取り扱う「èinteriors（エ インテリアズ）」と、オリジナルブランドの「by interiors」の共通点は何でしょうか？

共通点という表現が難しいかもしれませんが、ただ、二つが交わる交差点として、社員全員で何度も議論して作り上げたフィロソフィーがあります。

「インテリアズ は、モダンデザインを価値の基軸とし、より良い空間、豊かな人生、新しい文化を創造する企業を目指します。インテリア事業を通じ、お客様、生産者、社員のそれぞれの幸せを願います。」

すべてはここが原点となり、これまでの10年間活動を続けてきました。実は、èinteriorsのショールームは、東日本大震災の直後にオープンし、by interiorsのショールームも、期せずして今年4月、コロナ禍でオープンすることになりました。厳しい状況でもチャレンジする姿勢を忘れることなく、これからもより一層、皆さまとともに社会に貢献する企業でありたいと願っています。

國分秀記

株式会社インテリアズ 代表取締役社長

84年ニューヨーク州立ファッション工科大学卒業。87年カッシーナジャパン入社。01年ケイアンドカンパニー設立。11年インテリアズ 代表取締役就任。

ーところで、今年4月には、オリジナルブランド「by interiors」のショールームを南青山にオープンされました。この「by interiors」とは、どのようなブランドでしょうか？

イタリアのハイエンドブランドを扱っていることで、世界で通用するデザイン、クオリティについて多くを学ぶことができました。同時に、コントラクトビジネスで提案し勝ち残るためには、価格とのバランスも必要です。そのような中で、プロの方々に認められる品質に妥協することなく、価格でも勝負できるものを作りたいと挑戦し続けてきたものが「by interiors」です。2018年にオリジナルブランドとして発表し、今年、ショールームをオープンしています。

“Silent Quality - リスクと美しさといくつもの困難が、静謐なクオリティを実現する” というデザインコンセプトを掲げ、世界のトップブランドで活躍するデザイナーたちの英知が詰め込まれたモダンデザインと、日本の優れたテクノロジーを掛け合わせることで、世界にはないものを日本で創るブランドです。

日本、そして世界に向けて発信しています。



エ インテリアズ | ボッフィデパドヴァ東京 外観



バイ インテリアズ 東京 外観

「京都市都市計画マスタープラン」の見直し

一京都の特性を踏まえた持続可能な都市構造の実現に向けてー

家村直宏

京都市都市計画局都市企画部都市計画課担当係長

京都市では、平成24年に策定した「京都市都市計画マスタープラン」に基づき、各地域が公共交通等によりネットワークされた、暮らしやすく、持続可能な都市構造を実現するための都市づくりを進めてきた。そのような中で、本格的な人口減少社会の到来や若年・子育て層の市外流出、頻発する自然災害への対応など、この間の社会経済動向の変化や時代の潮流などを踏まえながら、新たな課題やニーズへの対応を図るため、本年9月に都市計画マスタープランの見直しを行った。

京都市の特徴と課題

京都市は、周囲を三方の山々に囲まれた市街地に約146万人もの人々が暮らしている大都市であるとともに、1200年を超える歴史を積み重ねてきた「国際文化観光都市」、さらには37の大学が立地し、人口の約10人に1人が学生という「大学・学生のまち」でもある。

一方、本市においても将来的な人口減少は一定避けられない状況にあることに加え、就職期の20代が東京・大阪に、結婚・子育て期の30代が近郊都市に転出超過となっており、社会を支える中核となる若年・子育て層が市外へ転出している。



20代、30代の社会動態(令和2年)

地区	京都	大阪	神戸
空室率(%)	4.05	4.33	4.75
平均賃料(円/坪)	13,092	11,818	11,246

H23以降、延床1千坪以上のテナントビル新規供給なし

資料) 三鬼商事「オフィスマーケット情報」

テナントビルの空室率の推移(令和3年9月)

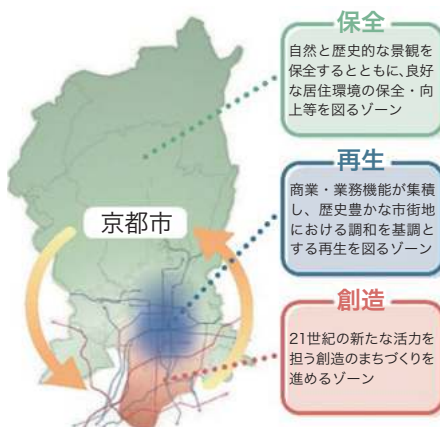
また、産業面においても、テナントビルの空室率は、コロナ禍の影響により上昇傾向ではあるものの、依然として低水準であり、賃料も高いなど、産業活動のための空間が確保しにくい状態が続いている。

そこで、そういった課題に対応し、京都の都市特性をいかした持続可能な都市構造の実現を図るため、昨年7月、京都市都市計画審議会に「都市計画マスタープラン部会」を設置し、計5回にわたってプランの見直しに向けた検討を重ねた。

主な見直しのポイント

■京都ならではの魅力と都市活力の「循環」

本市では、これまでから市域を大きく「保全・再生・創造」の3つのゾーニングに分類して都市づくりを進めてきた。今回、その考え方を踏襲しつつ、「保全ゾーン」を「歴史都市・京都が未来に受け継ぐ魅力の源泉」、「創造ゾーン」を「新たな価値を創造する都市であるための都市活力の伸びしろ」、「再生ゾーン」を「保全」と「創造」の要素を兼ね備えたゾーンとして捉え、「保全・再生ゾーン」における京都ならではの魅力と「創造・再生ゾーン」で生み出す都市活力の好循環を生み出すことにより、市域全体の持続性の確保を目指すことを、都市づくりの基本的な理念として新たに盛り込んだ。



京都の魅力と都市活力の循環のイメージ

■新たな時代の「職住共存・職住近接」の形成

ワーク・ライフ・バランスの実現や、ウィズコロナ・ポストコロナ社会の展望も見据え、都心部への都市機能の集積のみならず、周辺部の公共交通の拠点においても、各地域の特性に応じて働く場や居住環境の充実を図ることで、徒歩圏内で暮らしと営みの両方を賄える「職住共存・職住近接」のまちづくりを推進し、様々な人々が活躍するヒューマンスケールな地域の魅力向上を図ることを新たな視点として採り入れた。



住まい方・働き方の将来イメージ

■近隣都市との一体性や相互の効果を踏まえた「都市圏」の強化

人口減少社会が到来する中、近隣都市と人口を奪い合うのではなく、同じ「京都市圏」としての一体性を踏まえながら、互いにまちの魅力・活力を高め合うことで、他の圏域や世界の各都市との競争力の向上、東京一極集中への対応を図り、ひいては都市圏全体の持続性の向上につなげるといった、都市づくりにおける広域的視点の拡充を行った。

■「方面別指針」の策定

各地域の特性に応じた戦略的な都市計画や、分野横断的な政策融合による効率的・効果的な施策展開を図るため、市域全体における都市計画の方針を示した「全体構想」に加え、今回新たに市域を5つの方面に分類し、各方面の地理的特性や土地利用の状況、さらには方面間相互のつながりも踏まえながら、各地域の将来像や土地利用の基本的な方針を明示した「方面別指針」を新たに策定した。

今後の展開

今般見直しを行った本プランに掲げる方針や将来像の実現を見据え、今後、学識経験者による委員で構成する「京都市駅周辺等」にふさわしい都市機能検討委員会」を立ち上げ、具体的な都市計画の方策の検討を行う予定であり、特に市内周辺部の各地域のポテンシャルや強みを引き出すことに主眼を置いて検討を進めていくことを想定している。

おわりに

本プランの見直しに当たっては、「京都市都市計画審議会」及び「京都市都市計画マスタープラン部会」の委員の皆様にも多大なるお力添えを賜った。この場をお借りして深謝する。

京都の都市の持続性向上に向けた取り組みはまだ道半ばではあるが、本プランの見直しをその足掛かりとして、全庁を挙げてあらゆる施策を連動させながら取り組みを推進してまいりたい。

(いえむら なおひろ)

RFIDタグによる室内環境 センシングシステム

渡邊啓生

株式会社竹中工務店 東京本店 設計部設備部門

はじめに

脱炭素社会の実現は全世界的課題である。2021年4月の気候サミットで菅首相（当時）が2030年度の温室効果ガスを2013年度比で46%の削減を目指すという高い目標を表明し、その対策は待ったなしの状況にある。

日本国内のCO₂排出量の約1/3は住宅・建築物に係り、その大部分は運用段階で生じており、設備制御のあり方が問われている。しかし従来の有線式センシングは、センサに配線が必要で壁や天井に設置場所が限られ、本来制御の対象とすべき居住域環境が計測できず、適切に空調や照明の制御ができていなかった。無線式センシングの開発も進んでいるが、無線式センサは電池式が主流で電池交換に手間がかかるという課題があった。

そこで、センサが居住域に設置可能な無線式で、センサを電池レス化したセンシング手法を理想の形と設定し、RFIDタグによる室内環境センシングシステム（以下、RFIDシステムと表記）を開発した。

RFIDとは

RFID（Radio Frequency IDentification）は、電波（電磁波）を利用してRFIDタグ等にデータを読み書きする近距離無線通信技術である。1980年代に欧米で始まり、日本でも研究や商品化が進められてきた。

RFIDの最大の特徴は、電波を電気エネルギーに変換し起電できることである。この起電力でデータの送受信と温度などのセンサ作動の電力を賄えば、センサを電池レス化した無線式センシングが実現できる。しかしRFIDには通信可能距離に課題があった。

2012年に通信距離が長いUHF帯（920MHz）が電波法で無線通信に割り当てられ、温度センサ付きRFIDタグ等の商品化も進んできたが、アパレル業界などでの商品在庫管理等への利用にとどまり、室内環境センシングへの応用には至っていなかった。

RFIDシステムの仕組み



図1 RFIDシステムの仕組み

天井内のアンテナから電波を送信し、それを受信したRFIDタグがその起電力でセンサを作動させ、計測したデータを電波に乗せてアンテナに送信する仕組みである（図1）。アンテナの送信出力は電波法で上限が定められていることから、RFIDタグの起電力でデータ送受信とセンサ作動の電力を賄うフルパッシブ方式と、センサ作動の電力は太陽電池等で補うセミパッシブ方式の選択が可能である。

RFIDシステムの導入事例

■横浜市役所

RFIDシステムを含めた様々な環境配慮技術により、都市型の超高層ビルにおいてZEB Readyを実現した建物である（図2）。外装の手動式自然換気パネル（約2000ヶ所）は、コロナ禍の感染防止対策として大いに機能し、執務者に安心感を与えている。



図2 横浜市役所と外装自然換気パネル

①RFIDタグ内蔵環境センサと居住域計測

省エネルギー性と快適性を両立するために、執務机にRFIDタグ内蔵環境センサを設置して温度、湿度、照度、気圧を計測し、温度データを空調制御に利用している（図3）。複数センサの安定的作動のため、センサ作動用に太陽電池を設けたセミパッシブ方式である。

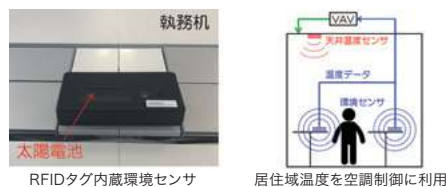


図3 RFIDタグ内蔵環境センサと空調制御

②RFIDタグと外装自然換気パネル状態把握

フルパッシブ方式のRFIDタグで外装自然換気パネルの開閉状況等を検知している。電波は金属面で遮断されるという一般的にはデメリットとされる特性を利用した開閉検知手法を発案し実現した（図4）。さらに中央監視データと組合せ、これまで困難であった自然換気の運用時評価と見える化を実現した。

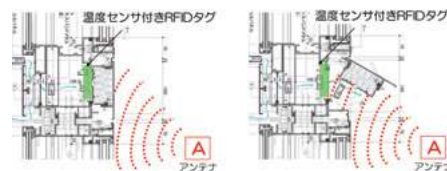


図4 自然換気パネル開閉検知（特許出願済）

③RFIDタグと人の在不在検知

入退館カードホルダにフルパッシブ方式のRFIDタグを取り付け、人の在不在の検知を実現し、照明制御に利用している（図5）。

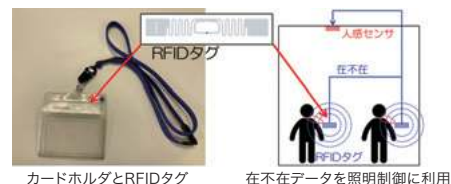


図5 カードホルダRFIDタグと在不在検知

④居住域環境等の見える化

RFIDシステムで収集した居住域環境データや自然換気の省エネ効果などをポータルサイトで見える化している（図6）。



図6 ポータルサイトと見える化

■NOK本社ビル

床敷設式放射空調システムを採用した中規模本社ビルである（図7）。フルパッシブ方式の温度センサ付きRFIDタグを執務机に設置し、温度データを空調制御に利用している。



図7 NOK本社ビル

おわりに

DXやデジタルツインにはセンシング技術の進化は欠かせず、様々な分野の高度な技術の融合が必要である。今回のRFIDシステムもシステムインテグレータやIT企業と協業して初めて実現できたものであり、今後も積極的に協業して新たなソリューションを生み出し、社会に貢献したいと考えている。

謝辞

RFIDシステムの開発には企画段階から社内外問わず多くの方にご協力いただいた。横浜市、NOK株式会社の皆様をはじめ、多くの関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

（わたなべ ひろき）

●渡邊啓生

2006年4月 株式会社竹中工務店入社

2021年現在 東京本店設計部設備部門課長

大阪府立夕陽丘図書館

設計：大阪府建築部
浦辺建築事務所
平田建築構造研究所
施工：竹中・米田共同企業体
竹中工務店
米田工務店

(1975年1月号)

阿部文和

大阪歴史博物館
学芸員

所在地 大阪市天王寺区伶人町
敷地面積 2,736.46㎡
建築面積 1,882.49㎡
延床面積 6,363.80㎡
構造規模 鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
地下1階、地上4階
塔屋2階
工期 1972年～1974年



①「大原社会問題研究所跡」プレート



②大原社会問題研究所



③大阪府立夕陽丘図書館外観

■はじめに

1974年に開館した大阪府立夕陽丘図書館は東側の敷地境界線に沿って石貼りの塀がめぐらされており、その一角に「大原社会問題研究所跡」と書かれたプレートがはめ込まれている【図①】。かつてこの地に社会科学分野では日本最古の民間研究所である大原社会問題研究所（以下、大原社研と略す）があったことはあまり知られていない。世界中から大原社研へ収集された蔵書はやがて「大原文庫」となり、夕陽丘図書館設立へとつながってゆくのである。

■大原社会問題研究所の設立

夕陽丘図書館南東方向には6世紀末に日本初の本格的な仏教寺院として創建された四天王寺がある。四天王寺西門前は西方極楽浄土を想う日想観の地として有名であるが、ここが夕陽丘と呼ばれるようになったのは1236年（嘉禎2）に歌人・藤原家隆がこの地に小庵を営んで夕陽庵と名付けたことに由来する。当時は今よりも大阪湾と上町台地の距離が近く、台地上のこの地からはすばらしい夕日の景色がみられたであろう。また高低差のある地形は湧き水が豊富で、清水寺の滝や天王寺七名水として親しまれ、近世には屋下^{うかみせ}の下寺町界限や清水寺への参詣、それに浮瀬^{うかみせ}をはじめ周辺の料亭に訪れる人で賑わったという。そうした大阪の歴史と文化を伝える夕陽丘に図書館は開館する。この敷地はかつて四天王寺

僧集団の中核である秋野坊家が広大な屋敷を構えていた。

秋野坊家は四天王寺創建後に寺務を司った小野妹子の末裔といわれ、代々四天王寺公文所職を世襲して寺の文書管理を務めてきた。しかし明治維新で権勢を失い廃寺となり、残された屋敷は東成郡役所に転用される。役所移転後は天王寺区方面委員となる岩田民次郎が土地建物を借用して大阪養老院付属少年部の福祉施設に使われ、さらに養老院移転後に敷地を購入したのが岡山県倉敷の実業家・大原孫三郎（初代倉敷紡績社長）であった。孫三郎は先代から引き継いだ事業経営で成功するが、岡山で孤児院を創設した社会事業家・石井十次の慈善事業に強く影響を受けてその活動を支援し、十次の没後は東京と大阪に設立した事務所を引き継ぎ、大阪事務所を拡大して下寺町に石井記念愛染園を設立するに至る。その頃の日本は全国に広まった米騒動で先行きの不安が続く状態であり、労働問題や貧困救済に強い関心を持っていた孫三郎は社会事業を研究する組織の設立を志すようになる。そして1920年7月に大原社会問題研究所を設立して社会問題研究と関連図書収集の拠点としたのである¹。

この場所を選んだ理由は四天王寺が施薬治療と救済事業に長い歴史を持つ場所であったため、設計は大原家関連施設を数多く設計・管理してきた薬師寺主計^{なすけ}が担当し、ベルギーのソルヴェー研究所を模した木造2階建

てで建てられた【図②】。隣には鉄筋コンクリートと煉瓦を併用した3階建ての書庫棟も建てられる²。本館には研究室、図書整理室、編集室、資料室、閲覧室、会議室などがあり、社会衛生関係施設として疲労生理実験室が設けられていた。孫三郎は研究調査の便を図るために所員を海外へ派遣して資料収集に力を入れた。これらの蔵書は閲覧室で研究者へ公開されたが、さらに講堂を増築、一般民衆（労働民衆）への読書会や講演会を開催して事業の普及につとめた。しかし治安維持法の制定や金融恐慌の影響を受けて出資者である孫三郎の事業不振が続くと研究所の運営維持も次第に困難となり、1935年に拠点を東京へと移し、規模を縮小しての存続という方針が決定される。この時8万冊にまで蓄積された経済学関係の図書は「大原文庫」と名付けられて土地建物とともに20万円で大阪府へ譲渡された³。

■大阪府立図書館天王寺分館の開館

大阪府譲渡後も旧大原社研施設は継続使用されたが第二次世界大戦の戦況悪化で活動を停止、そして終戦少し前の大阪大空襲で建物のほとんどが焼失してしまうのである。幸い書庫棟は強固な構造であったため被害を免れ、戦後蔵書移管先として同地に大阪府立図書館天王寺分館建設が計画されることになった。

1950年6月に竣工した天王寺分館は木造2階建てで、書庫棟は焼け残った旧大原社研時代の建物がそのまま使われた⁴。開館当初は大原社研の蔵書を母体とした学術図書館という性格が強く、諸室も1階は閲覧室と開架資料室を配置し、2階には研究室や講堂を置いて大原社研時代と同じく社会問題研究と普及を目的とした。開館時間は9時から17時まで、利用者也20歳以上の一般成人（大学生を除く）に限定された。しかし当時の大阪府下の図書館設置率が他府県に比べて低い状況を考慮し、図書サービス拡大のために一般蔵書も充実して府民サービスに努める方針に変更、入館年齢制限も取り払われて夜間まで開館時間を延長した。

こうした方針変更によるサービスの向上で利用者は年々増加傾向にあったが、一方で本館のモルタル壁の剥離や大原社研時代から使用されてきた書庫の老朽化は深刻となり、書庫棟を含む全館建て替えに向けた委員会が開かれることになった。天王寺分館改築委員会の調査は「大阪府立図書館基本構想に関する報告書」にまとめられて新館のための計画が本格的に始動する。

■浦辺建築事務所と大原家

新館設計は浦辺建築事務所に依頼されるが、その経緯は司書部長貴田春男の回想中に述べられている。それによれば敷地に残る大原社研時代の書庫棟解体を相談するため大原孫三郎の長男で当時倉敷レイヨン（現クラレ）社長であった大原総一郎氏に面会したところ「基本構想」の趣旨を高く評価された。そして図書館としての機能を十分に果たせる機能を持った施設にしてほしいと要望を受けて浦辺建築事務所（代表・浦辺鎮太郎）を設計者として推薦されたという。

建築家・浦辺鎮太郎は生まれ故郷である岡山県倉敷市での設計活動がよく知られているが、大学生時代を京都で過ごし、戦後大阪を拠点とした関西に縁の深い建築家である⁵。京都帝国大学の建築学科卒業後は中学校同期の大原総一郎の紹介で、父・孫三郎が経営する倉敷レイヨンの営繕部門に入社する。入社直後は大原社研設計に関わった薬師寺の指導を受け、倉敷レイヨンに関連する工場や寄宿舎を中心に設計に携わり、戦後になって大阪営繕部長へ就任したのを機に大阪へ拠点を移す。1962年には倉敷建築研究所を倉敷レイヨン内に設立するが2年後に退社して社名を倉敷建築事務所に変更、66年に浦辺建築事務所とした。その間に日本工芸館（1960年、大阪市）や大原美術館分館（1961年、倉敷市）、倉敷国際ホテル（1963年、倉敷市）、石井記念愛染園付属愛染橋病院（1965年、大阪市）などを設計している。倉敷レイヨン退社後も、同社関連の施設設計に関わっており、先述した石井記念愛染園一連の施設も多くが浦辺建築事務所設計されている。大原孫三郎・総一郎親子との関係から建築に至った作品は非常に多く、大原文庫を引き継ぐ夕陽丘図書館設計に浦辺建築事務所が推薦されたことは至極当然であったといえよう。

■難航した工事

建て替え期間中、一般蔵書は桃山学院大学図書館を借用し、また大原文庫をはじめとする貴重図書は住友倉庫へ預け入れられた。1972年6月に解体工事開始、10月には新築工事が着工された。

設計は浦辺建築事務所と平田建築構造研究所、施工は竹中・米田共同企業体（竹中工務店と米田工務店）が当たることになった。大阪万博後の落ち着いた時期ではあったが大阪府下の建築需要は高く、まず職人の確保に難航したという。翌年にはオイルショックの影響を受けてセメント・タイルの材料が不足、運搬用の車両燃料も不足気味となった。また建設現場でも周辺住居への電波障害や地

下工事の影響で近隣住居の池水が濁る問題が発生する。上町台地を流れる地下水問題は工事進行とその後の図書館運営に関わる重要な課題とし、事前の地盤調査では地下鉄谷町線開通工事のデータ提供を受けて対応が検討された。館内整備では備品の良し悪しが館内の雰囲気に影響することから念入りに準備され、司書係は他の図書館を見学してアドバイスを受けるなど研究を重ねたという。各フロアの書棚や書庫の電動書架が完成すると各地に保管した図書が次々と搬入され、1974年5月29日、大阪府立図書館夕陽丘図書館は全館開館した。夕陽丘図書館は第21回大阪府建築コンクールで知事賞を受賞している⁶。

■外観と内部の構成

図書館の規模は地下1階、地上4階に2階建ての塔屋がのる。構造は鉄筋コンクリート造に一部鉄骨造である。正面外観は2階から4階まで一定の間隔で窓が並び、3階の各窓下には本を開いた形状のレリーフがはめられている【図④】。敷地東側の正面入り口は、はじめに触れたように2mほどの高さがある石貼りの塀が囲む。壁に自然石を埋め込む仕上げ方は大原美術館分館の街路面外壁でもみられるが、それに比べてはるかに石の密度が高く、図書館入口としては閉鎖的な印象を受ける。この理由は建物と敷地前面を通る谷町筋との関係にある。谷町筋は上町台地を南北に通る交通量の多い道路であり、図書館建設の際に拡幅工事がされたことで建設予定地と道路との距離が近くなった。そのため外部からの騒音対策が課題となる。その対処法の一つが道路に沿って築かれた石貼り塀であった。また1階をピロティとして柱間のアーチを塀より高く設定することで外部からの光が十分に届くよう設計がされている【図⑤⑦⑨】。塀の内側に植えられた中・低木の木々間を抜けてピロティまで達する光はとても明るく、陰湿さは感じられない。一方で1階ホールから目録コーナーまで全面ガラス張り、1階閲覧室から外が見通せる開放性のある空間とし、外部騒音の抑制と公共施設の開放性という矛盾した問題を解決している【図⑥】。

2階以上の東側はエルミン窓として騒音、換気、メンテナンスに対応している。エルミン窓（エルミンサッシ）とは二重窓にブラインドを封入した断熱と気密性に優れた窓で、水平軸回転で開閉する。浦辺は『建築と社会』（1973年10月号）でエルミン窓の性能を高く評価しており、府内信用金庫（大分市、1966年）、倉敷レイヨン中央研究所（倉敷市、1969年）などに用いている。



④窓下のレリーフとエルミン窓



⑥目録コーナーからピロティをみる



⑨自習室階段より玄関方向



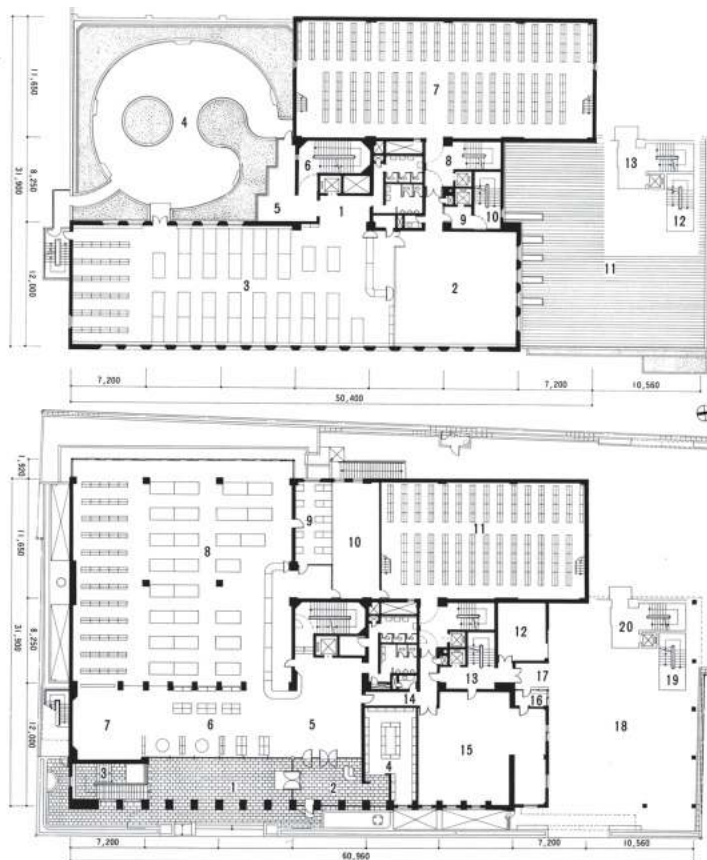
⑤敷地入口からピロティ方向



⑦ピロティ



⑩自習室階段



2階平面図

- 1 エレベーターホール
- 2 産業資料課事務室
- 3 自然科学閲覧室
- 4 屋上庭園
- 5 休憩室
- 6 主階段
- 7 書庫
- 8 書庫階段
- 9 サービスエレベーターホール
- 10 サービス階段
- 11 車庫屋上
- 12 サービス階段
- 13 書庫階段

一階平面図

- 1 ピロティ
- 2 玄関
- 3 吹抜
- 4 ロッカールーム
- 5 ホール
- 6 目録コーナー
- 7 展示コーナー
- 8 一般閲覧室
- 9 特別閲覧室
- 10 閲覧課事務室
- 11 書庫
- 12 荷受発送室
- 13 サービスホール
- 14 廊下
- 15 読書振興課事務室
- 16 守衛室
- 17 職員乗客入口
- 18 車庫
- 19 サービス階段
- 20 書庫階段

⑧1階・2階平面図



⑪屋上庭園から見た書庫棟(左)と塔屋(中央)



⑫ 1階ホールより目録コーナー、カウンター、一般閲覧室をみる



⑬ 1階一般閲覧室



⑭ 地下1階電動積層書庫



⑮ 換気塔

館内の構成は図書館利用者用の階段とエレベーターホールを中心に開架閲覧棟エリア、書庫棟エリア、事務管理棟エリアにわかれる【図⑧】。玄関からロビーに入るとすぐに目録コーナーがある。開館当初、目録コーナーの隣は貴重本の展示コーナーとなっていたが、児童向けサービスの要望が多数寄せられたことから後に同コーナーを改築して児童室が開室された。なお1階は社会科学以外全ての分野の資料を閲覧できた【図⑫⑬】。

2階以上は専門分野のフロアで、2階は大原社研時代から収集されてきた社会科学関係資料専門のフロアとなる。また南西部分は屋上庭園で利用者に開放されていた【図⑪】。3階は特許関係資料の閲覧室で、国内のほかアメリカやヨーロッパ諸国の特許資料が置かれた。社会科学と特許に関する資料は夕陽丘図書館が重点分野として収集し、中之島図書館と役割を分担している⁷。

地階から4階までの書庫は2層構造となっており8層にわたる書架と電動積層書庫に約62万冊分の収蔵スペースを確保している【図⑭】。書庫棟裏側の外壁上部にはかつて板張りの緊急救護用出入口があって、現在でも壁面に赤い球が残されている。

事務エリアは地階から4階に置かれ、1階から3階は貸し出しや資料閲覧に関する業務、4階は庶務課、整理課、会議室などの非公開エリアとなっている。機械関係は地下と塔屋内に集約されている。地下は書庫、機械室のほか、利用客へのサービスとして自習室と食堂があった。自習室は図書閲覧室と分離して出入口を設けており、1階ピロティ横の専用階段から直接出入りができた【図⑩】。建物裏側に残る換気塔は食堂厨房から発生する煙やにおいを排出するもので、四角柱の一角を削り取ったような造形は大阪城野外音楽堂照明塔や倉敷市民会館にも同型デザインが見られる【図⑮】。先述した地下水対策として地下室のさらに下に湧水用の水槽が設置されている。図書館西側の清水寺「玉出の滝」は市内唯一の天然の滝であるが、水は四天王寺金堂地下から流れ出ているとされ、図書館はその延長線上に位置することから地下室内に水が流入しないよう基礎部分が大小44個の湧水槽となっている⁸。

塔屋は空調機械、高架水槽などの機械設備が置かれ、外壁に尖頭アーチ窓がつく。開架閲覧棟と書庫棟より約2階分高くなるが中央主階段の上部にあるため谷町筋からの外観では高さを感じさせない【図③】。また東側正面窓の3階と4階の距離が近いことも建物を全体的に低く見せる効果を生んでいる。塔屋を中央に置いたのは北側および西側隣地が住居

地域であるため日影に配慮したもので、特に北側については駐車場として隣地住居と十分な距離が保たれている。

■夕陽丘図書館の閉館とその後

「陽は又昇る！」のタイトルではじまる夕陽丘図書館だより「ゆうひがおか」の最終号は、22年の歴史に幕を下ろす図書館を振り返る内容となっており、特に力を入れていたサービスや裏話が語られている⁹。夕陽丘図書館は「大原文庫」から続く社会科学面の資料収集と公開という専門的な学術図書館の伝統を生かしながら現代的要請に応えるために児童室や自動車文庫など充実したサービスを提供してきた。夕陽丘図書館の設計についても柱の少ない大空間と持続できる快適な館内環境が図書館利用方法の変化に対応できるよう図られている。

夕陽丘図書館は東大阪市荒本に新図書館（府立中央図書館）が完成したことで図書館の役目を終え、2010年まで特許資料に特化した大阪府立特許情報センターとなる。現在はなにわ南府税事務所や大阪自動車事務所などが入居した夕陽丘庁舎として利用されており、図書館の頃より利用者は限定されてしまったが、建設から47年を迎えた現在でも建築当時のようすを残しながらうまく活用されているように思われる。

¹ 『大原社会問題研究所五十年史復刻版』（法政大学大原社会問題研究所編、2001年）

² 敷地選定の理由および研究所の平面図については『大原社会問題研究所集』（大原社会問題研究所編、1920年）所収。

³ 東京移転に際し、社会主義関係の文献約10万冊は東京に移されたが、戦時中の空襲で土蔵に保管されていた貴重書、外国雑誌、労働運動資料を除いて数万冊の資料は全て焼失した。研究所は1949年に法政大学大原社会問題研究所として同大学に合併されて再出発し、現在に至っている。

⁴ 天王寺分館の平面図は『大阪府立夕陽丘図書館10年史』（大阪府立夕陽丘図書館編、1984年）所収。また大阪府に移管されてから焼失するまでの大阪府社会事業会館時代の平面図は『「大原文庫」関係資料展』（大阪府立夕陽丘図書館、1984年）所収。

⁵ 浦辺鎮太郎作品については『浦辺鎮太郎作品集』（新建築社、2003年）、『建築家浦辺鎮太郎の仕事：倉敷から世界へ、工芸からまちづくりへ』（学芸出版社、2019年）。

⁶ 『ゆうひがおか』（No.50、1990年12月）の中で米田工務店業務部長田中正博氏が建設当時の様子を語っている。

⁷ 3階以上の平面図および地階、塔屋については註（4）『大阪府立夕陽丘図書館10年史』に掲載されている。

⁸ 『ゆうひがおか』（No.1、1974年10月）。

⁹ 注（6）前掲書

『建築と社会』 誌 カラー版を WEB で！

2021 年 4 月号より『建築と社会』の紙面が PDF ファイルで読めるようになりました。
本誌ではモノクロのページも、PDF版はカラー写真を掲載しています。
会員専用ページからダウンロードできますので、ぜひご活用ください！！

会員様専用ページ



「会誌ダウンロード」の希望の号数のボタンを押すと会誌の PDF のダウンロードが始まります。

会員専用ページからは「建築と社会」の創刊号より2年前までの会誌の記事検索ができます。こちらもご利用ください。

【「建築と社会」アーカイブ記事検索の方法】



日本建築協会ホームページ (<https://www.aaj.or.jp/>) にある「ログイン」ボタンをクリックするとIDとパスワードの入力画面になります。個人会員の方には会員証と共にIDとパスワードをお送りしています。ご不明な場合はsoumu@aaj.or.jpへお問合せください。

会誌「建築と社会」記事検索

ログイン後、「会員専用ページ」のこのボタンから記事検索ができます。年代と目次を基にしたフリーキーワード検索ができます。（記事のタイトルや執筆者名、建築物の名前など）ただしタイトル・執筆者において、旧字体、環境依存文字等は検索システム運用のため常用漢字等へ変更しています。（瀧→滝、澤→沢、實→実など）

検索結果の「表示する」ボタンを押すと会誌1冊分のPDFファイルが表示されます。

ドン・キホーテ まちに出る

～みんなの計画、 役所の支援～

豊中まちづくり研究所代表

芦田英機

大阪大学工学部博士後期課程修了・工学博士。大阪府豊中市に就職。初代まちづくり支援室長、政策推進部長を務め、京都女子大学現代社会学部教授に就任。豊中市に助役（現副市長）として呼び戻され任期満了により退任。その後、関西大学法学部大学院などの非常勤講師を勤める。豊中まちづくり研究所代表、ハウジング&コミュニティ財団評議員のほか幾つかの大学などへのゲスト講師を勤める。

■“みんなの計画、役所の支援”を 基本姿勢に

これが私の“まちづくり”に関わってきた基本姿勢である。“行政参加”というキーワードを生み出した「住民主体、行政によるまちづくり支援」のまちづくりであり、3つの「し」づくり（仕組みづくり）＝社会計画、「仕事づくり」＝産業計画、「施設づくり」＝狭い意味での「都市計画」を目指してきた。その道程の大部分は、『豊中まちづくり物語～行政参加と支援のまちづくり～』（敬天まちづくり研究会）にまとめている（写真1）。これは悪戦苦闘の実践記をまとめた博士論文『大都市近郊における参加型まちづくりに関する研究～実践から見た自治体とまちづくり協議会の役割、その理念と実態～（大阪府豊中市を事例として）』を基に、市民に読みやすくインタビュー形式にしたものである。

〈「豊中方式」のまちづくりは、端的に言うところ、「行政参加・行政支援」という「アウトリーチ」の手法を駆使した市民が主体となるまちづくりです。「明治以来の官尊民卑の思想によって、“お上”に寄りかかってきたために確立できていない『住民・市民の自立』が必要であり、それによって地域からの民主主義、社会の質の向上に不可欠な民主主義を確立する」という「市民主権」の考え方を愚直に受け止め、行政が主体となる都市計画の手法に疑問を持って、市民が主体となるまちづくりに挑戦してきた者たちの“闘いと反省”の記録をちゃんと残しておくためには、この節目の年が絶好の機会だと思いました。〉（『豊中まちづくり物語～行政参加と支援のまちづくり～』）

〈「みんなの計画、役所の支援」という言葉は行政が支援せずに住民が自主的に計画づくりを行うことなど容易にできるはずがない。それへの協力に労はいとわれない。しかし、どこまでも行政が黒子として支える側に回る、その心が伝わる言葉である。」「行政参加」は芦田さんの造語である。まちづくりといえば行政が行うものであるというのが中心であった時代から、ようやく住民の意見を取り込む必要性が叫び始められた頃である。住民参加こそが新しいまちづくりのあり方だと強調されていた。そんな時、芦田さんは敢然と「住民参加」というのは行政中心の活動の中に住民が入って来い

と言っているようなものだ。本当はそうではない。住民の活動の中に行政が入っていくべきだ。それこそが本当の意味での「住民主体のまちづくりなのだ」と言い切った。その精神を象徴する言葉である。〉（石原武政 大阪府立大学名誉教授 同書 前書きから）

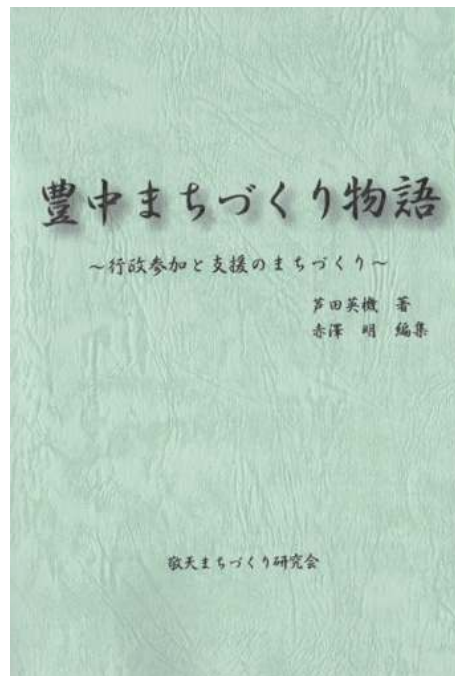


写真1 『豊中まちづくり物語』

私は3つの側面で「まちづくり」活動に関わっている。まず大阪府豊中市役所という自治体職員として、次に早期退職して赴任した京都女子大学現代社会学部教授から本格的に始まる大学の教員として、さらに助役として呼び戻され行政マネジメントを経験した後、さらに地域まちづくり活動を支援する（街）豊中駅前まちづくり会社会長、豊中駅前まちづくり協議会相談役としての民間人としての側面である。そのいずれの側面でも、“みんなの計画、役所の支援”の姿勢を貫いてきたつもりである。ちなみに、このキャッチコピーは私が仕えた市長の選挙公約にもなった。

■自治体職員として

大阪府豊中市の職員として、大阪万博・千里NT・高度経済成長の歪、大阪市の影響をもろにうけた都市政策担当部局に配属される。「規定演技」のできない未熟な身であったが、新しい課題を扱う上司に厳しく訓練され、「はみだし公務員」として働き始める。中小企業庁から委託された豊中商工会議所での『商業近代化計画』策定作業に参画して、「広域大

阪都市圏にあって、大阪市との機能分担関係をどのように設定するか、あるいは近年の変化に対応した商業施設の適正配置は如何にあるべきか」という「商業とまちづくりの一体化」、すなわち“流通政策と都市計画の一体化”の計画づくりを味わい、当時の各分野の一流の流通学者や都市計画の専門家たちとの談義を楽しんだ。その後、市制50周年事業の一環として、法政大学名誉教授・地域政策プランナー田村明氏に無理だと言われた「住宅地での都市景観形成計画」を試みた。これが後の建設省研修センター主催のソルボンヌ大学での都市景観研修留学に結びついている。

更に「衛星都市」という屈辱的な名称を「生活副都心」として改称・位置付けたいと、『豊中市産業振興ビジョン』策定のリーダーとして、大阪大学名誉教授大久保昌一先生が提唱される“快適な都市に新しい産業が育ち、新しい産業が都市の生活者を快適にする”との考え方の下に“産業とまちづくりの一体化”を唱えて、ビジョン策定とその実現化方策としての行政内部でのシステム形成との両面から「産業振興ビジョン策定チーム」を横断的に結成し行政改革を試みる。後の「まちづくり支援チーム」の原点であり、ここで数多くの学者・専門家・企業人との交流が得られ、今日までご指導頂いている。民間人となった今も開催している「豊中まちづくりフォーラム」や「実践まちづくり道場・敬天塾」の講師は、この時からの縁者が少なくない。

病の母を見るために“身を沈めた”と言い続けて、「お前にはルーティンワークの仕事は任されん」と褒められ(?)“出る杭は打たれる、出過ぎた杭は抜かれる、出ない杭は腐る”ならば、思い切って仕事をしようと、「はみだし公務員」は考えたのである。

●「まちづくり支援室」の創設

行政の組織の軋轢による難病にかかり、四苦八苦の末『生きる』(黒沢明作品)を実践しようと考えた。“まちづくりの専門セクションに「ご(五)縁」が出来る一步手前の「支(四)援室」を創り、各部局の若手職員で兼任の「まちづくり支援チーム」を結成、市民が活動を始めれば行政からの支援が必ずある(“シェンカムバック”)と市民を励まし、「対策」「推進」「条件整備」などといったこれ

までの手法を超えた「支援」を始める。計画実現には計画策定段階から当事者である市民が活動し参画することが重要であり、その市民活動に行政が参加する“行政参加”こそが「使い勝手の良いまち」をつくり、手入れし、「作りかえることに労を厭わない市民」「都市に希望と責任を持つ市民」が育つ重要な要素である。と理念高く考えた。

『中学社会 公民的分野』(大阪書籍 平成13年検定済教科書)の「地方自治とわたしたち」の項目では、半ページを割いて「まちづくりは住民が主役で」との見出しで私たちの活動が紹介されている。黒々とした髪が私メンバーとワークショップしている(写真2)。



写真2 ワークショップの様子

●まちづくり条例の制定

この理念を制度化し、担当者・首長が変わっても制度を法的に担保する方法として「まちづくり条例」制定を志向した。『生きる』に学んだ“個人の努力だけでは長続きしない、制度確立が必要”との教訓を生かしたかったからである。条例の最大の特徴は、「地区計画条例」の規定と「建築協定条例」の規定を合わせて一つの連続の条例とした点にある。市民サイドが使いやすい・解りやすい規定の再構築であり、市民と事業者・行政・専門家の「連携と役割分担」をめざした。また、市民相互及び市民と行政の信頼、理解及び協力に基づいて、市民の自発的な発想と市民及び行政の「連携と分担」により行われることを基本としている。この当時のことを『造景』創刊号で「芦田英機とまちづくり支援室」と題して記事にしてくれた八甫谷邦明編集長は以下のように評価している。

〈実際に豊中市を訪れ、芦田英機室長の話聞いて、さらに強い印象を受けました。横浜や世田谷のまちづくりに見られる限界を突き破る挑戦的な試みが存在したからです・・・

①駅前の繁華街という都市の中心地で商業者

を含め多様な市民を対象に、市民主体のまちづくりを試みていること。駅前再開発、中心商店街の活性化、などを視野に入れたまちづくりは例がありませんでした。このような分野は、行政と関連事業者が主体であり、市民まで含めたステークホルダー全体が参加することはありませんでした。②市民と行政の新しい関係が提案されていること。市民が「参加」するのではなく、市民が「主体」であり、行政はその支援者だとする考え方は公共活動におけるコペルニクスの転換ですが、今日でもなかなか理解が進みません。東日本大震災の復興事業を見るにつけ、その感を一層深くします。気仙沼などにある辺境の小基部地区で、住民主体の復興が試みられて成功しており、わずかな希望を抱いております。③市民と行政が問題意識を共有するために、市民フォーラム等を設け、他のまちづくりの考え方、取り組み事例などを頻繁に紹介していること(『豊中まちづくり物語』あとがきから)

●「商人大学」「実践まちづくり大学」「豊中まちづくりフォーラム」へ

“夢を形にする力”を養うための学習が大切だと考え、地域の商業者に立地条件と消費者に目を向けるよう試みた「商人大学」、行政職員に「市民」とともに学び、その意向を反映させるよう試みた「実践まちづくり大学」「豊中まちづくりフォーラム」を開催していった。「豊中まちづくりフォーラム」は、豊中市職員として『豊中市産業振興ビジョン』策定時に産業界のリーダーにご登壇頂いた「産業界リーダーフォーラム」(1987年5月)を開催し、「豊中まちづくりフォーラム」と改称して以来、150回を手掛けている。

かつて市商工課職員時代に手掛けた商業者対象の「商人大学」(「中堅商業者育成講座」とその後の「豊商研」が後の地域まちづくりの担い手・リーダー養成に繋がったことにヒントを得ている。定時制市民であるサラリーマンでは担いきれない商業地のまちづくりを「商業者が担うまちづくり」ととらえ、全日制市民の「人育て」の重要性に着目したからである。まちづくりに必要な要素としてのネットワーク形成は、民間人となった今日も「豊中まちづくりフォーラム」「(実践まちづくり道場)敬天塾」を継続している考え方である。

■教育者・大学人として

早期退職して京都女子大学に赴任する。授業日以外を地域活動に関われる、地方の有力者の娘であるゼミ卒業生が卒業後にUターンして地域活性化を担わされたとき、都市と地方を結び付ける役割を果たそうという思いだった。毎年15人のゼミ生が帰郷すると4年で60人の卒業生が毎週待ち受けてくれ、都市部のまちづくり（流通と地域活性化）が期待できるとの胸算用だったが、復職してあえなく企画倒れ！ とはいえ、京女では行政経験者としての授業に加えて「住民参加論」を設けてもらった。まちづくりの現場で活動する方々をゲストとして招いて、学生に関心をもたせることに苦心した。

民間人となっても、非常勤講師として、これからの社会を担ってくれる学生への授業を行ってきた。関西大学大学院での「まちづくりと法」であり、関西外国語大学での「地域社会とまちづくり」、立命館大学、関西大学、桃山学院大学、岡山商科大学、そのうち、時間的にも現地性でも最も「地域社会と連携」していたのは、園田学園女子大学の『つながりプロジェクト14』の「地域連携プロジェクト授業」の『まち歩き』であり、恒例の七夕まつり、豊中まち歩きツアー、アンケート調査を授業の一環として学んでもらった。御影高校でも講義しているが、本誌で三好庸隆氏（武庫川女子大）が紹介されたように、現役時代に「中高生のまちづくり講座」を手掛けた時と同様である。現在は高齢者を中心とした「敬天まちづくり大学」をコロナに休校を余儀なくされながらもここ10年間週一回の授業を継続している。

■民間人として

学位論文の末尾に「書き上げて道半ばであるから、今後は現場にこだわり関わって未完成の論文を補っていく」と決意を述べた。その表明に忠実に生きて行こうとして、豊中駅前まちづくり推進協議会、(有)豊中駅前まちづくり会社に関わって活動を続けた（写真3、4、5）。

●(有)豊中駅前まちづくり会社

自ら行政職員としてシステム設計し、後に住民組織・まちづくり協議会として関わった『豊中駅前まちづくり構想』の特長は、①まちの将来像が共有される②まちづくりの目標内容が理

豊中検定



子どもたちに〇×で答えてもらいました！



写真3 (有)豊中駅前まちづくり会社の活動。多くの子供たちが参加している

解されやすくなる③構想づくりを通じてコンサルタントやプランナーの役割が明確になる④いつでも振り返り出発点に戻れる⑤市民に計画実現への強い意思が出来る、という5点である。

平成5年（1993年）2月に設立された「豊中駅前まちづくり協議会」が「このまちをうるおいのある、歩きやすい、住みやすい、商売のやりがいのある魅力のあるまちにしよう」として、この構想を策定した。その事業の芽を協議会と協力して実現させようと、有志の出資により平成11年（1999年）12月21日、(有)豊中駅前まちづくり会社が設立され、行政職員としても退職後は経済的にも実質的な活動でも取締役会長としてその活動に随走してきた（写真4）。



写真4 活動を伝える「まちづくりニュース」

●豊中まちづくりフォーラム

退職後は豊中駅前まちづくり会社での「豊中まちづくりフォーラム」（2007年開始）として開催している。これは、行政がやるべき内容ではなく、市民が前払いした税金と預けた権力を行政が有効に活用して、まちづくりを進めていくべき分野にもっと力を注いでもらいたいのであれば、市民主体で「フォーラム」すべきである、と考えて、民間人として主催してきたものである。現在、豊中まちづくり

研究所」主催としてコロナ禍などによって中断されながら開催している。それぞれ各分野のエキスパートに登壇してもらっており、本稿がお目にかかる12月には「豊中まちづくりフォーラム」154回を、敬天塾は157回開催しているはずである（写真5）。



写真5 第101回豊中まちづくりフォーラム

協議会が策定し行政が『基本方針』とした『豊中駅前まちづくり構想』の実現に向けたスクランブル交差点の改善と歩道の確保、道路の歩行者天国化などの整備構想は、現市長の公約となり整備計画が描かれた。さらに、高校の後輩である笑福亭由瓶の稽古の場として「豊中寄席」を設定し、新規住民向けの「豊中駅前まち歩きツアー」や協議会への参加意欲を高め地域住民の交流の機会にしてきた年2回のバスツアーとともに、まちづくり会社の経営資金・活動収入源を兼ねている。また、地域の七夕祭にはまちづくり会社としても参加、豊中検定、折り紙教室などを催した。

「思いは高く、地位低く、手間暇かけて儲け下手、社会の隅で活動する会社」と自虐気味につぶやき活動してきたが、現下の情勢による収入減と人材不足により、5月に閉鎖・解散してしまった。残念である。

●豊中まちづくり研究所

まちづくり会社解散後、業務を「豊中駅前まちづくり協議会」と「豊中まちづくり研究所」に任務分担し、これまでの活動を通じて築き上げたネットワークを通じて知の蓄積を図ろうとする「豊中まちづくり研究所」の本格的稼働に力を入れている。研究所では、次のことを実践していきたい。

①豊中方式であった“市民・住民主体のまちづくり”の継承をめざし、“市民・住民の手によるまちづくり”を具体化するための知見・情報・経験の蓄積と交流の場をつくる②市民・住民と専門家・行政が、“市民・住民を視点においたまちづくり活動”を行うために、

市民・住民と専門家・行政のそれぞれが責任をもって、「連携と役割分担」によるまちづくりを実践することをめざす③市民・住民の地を這う日常の活動の課題・問題点を明確にし、理論的研究に基づく具体的政策な提言を行い、人間的結集の場に役立てる④これらを通じて、まちづくり活動家を育成などの活動を目指しているが現時点での具体的な活動として、(1) 月一回の豊中まちづくりフォーラムと敬天塾(2) 成熟したシニアのリカレント学習の場として週1回の「敬天まちづくり大学」(3) HP開設(4) 出版物の発行をしていく。

■地域社会に果たそうとした役割

3つの場面での役割で、まちづくりに関わりながら、自治職員としては“はみ出し公務員”で、大学教員としては短期間しか勤めず、地域社会では古い地域風土の中で地元出身者でない身で、いずれも中途半端な貢献しかできなかった。その中途半端な分、市民からのまちづくりに不可欠な「行政と市民」「専門家と市民」という間での制度・言葉・考え方の“通訳”を果たそうとしてきたつもりである。

「(制度には)素人の市民の意向を聞き、専門家の知恵を借り、企業と協力し、政治家にすり寄るまちづくり」は上手くいく。行政職員が、まち・地域社会の改善を計画し政策化を図るためには、専門家の知恵を借り、市民と合意形成をし、専門家と市民との合意に至るコミュニケーション能力が必要であることを痛感した。そこで「専門家と市民との通訳」を自らの役割と位置づけようと考えたのである。恩師に施主と工務店主との会話力を教えられたことを思い出す。

●行政と市民との通訳

『実践まちづくり大学』での管理職講師を登用して「言葉が解らない」「制度が使いにくい」との指摘を受け、市民感覚との違いを認識する機会をもって行政改革にもつながった。

行政用語の平易化は笑い話だ。「図書館の供用開始までに道路幅員を拡幅する」(図書館がオープンするまでに道幅を拡げます)、「時計道路」(都市計画道路)、「吐血」(都市計画決定)、橋梁のスパン(橋桁の幅)、この地域は「商業ポテンシャルが高い」「それ何ですか?」「潜在(洗剤)能力ですわ」「それどのくらい

落ちまんねん?」。これらは、今も学生や敬天まちづくり大学(老人大学)で質問するが理解されない。

●専門家と市民との通訳

言葉だけでなく、立ち位置による考え方のギャップを埋める役割が求められる。まちづくり協議会では、まちの将来像を描き行政に提案する『まちづくり構想』策定過程のワークショップで、コンサルタントとまちづくり協議会メンバーとの対立が生じる。制約条件を知らない市民の考え方に「専門家が関わっていてそんな計画案を行政に提出できない」と言い放たれてしまう。制約条件を知ることと与条件化での計画がされるという説明によって専門家の優秀性をも証明できる機会であったが。

●ダジャレとコミュニケーション

まち(タウン)をお金(マネー)と土地(ジメン)だけの話にしないと戒めの言葉にした。悪いコンサルタントは、助言が欲しい時にはなかなか「来ん」、たまに来てもすぐに「去る」、帰りは「お金と自分が欲しい情報を「タンと」持って帰り、良いコンサルタントは「根」気よく助言して、「去る」時は住民に「タンと」力をつけておいてくれる。

私のダジャレについて高口恭行氏(建築家・奈良女子大学名誉教授)は以下のように指摘された。「通常、行政は縦割り行政という言葉があるように、それぞれ自分の権限と裁量の枠組みを持っており、その枠組みから外れた、例えばAの縦ラインとBの縦ラインの中間にあるようなものは、余所へ回そうとすることがあります。しかし、街づくりは、ほとんどの場合において単純にいくケースが少なく、横向きにつながなければ街というものは全く機能しないと思われますので、かなり難しい中で横につなぎ、それを市民に理解させることが求められます。この理解させることと、横につなぐことは、行政とは正反対のことですが、その間、散々色々な所で叩かれているうちに、駄洒落でボディガードするという話術が生まれたのかもしれない」(JIA市民大学講座)。

■今、思うこと

口の悪い友人が「土木の人間は集団で大きい物に当たる性質、建築は個性尊重でパラバラ。その中で勉強の出来る奴は構造へ進み、

絵のうまい奴はデザインに進み、両方だめな奴は手を使わず口を生かして都市計画に進みました。貴兄もその口でしょう」と教えてくれたが、「豊中方式」も「その成果として形・施設が出来上がったのかどうか」「土地建物にどのような変化を与えたのか」が常に問われてきた。都市計画学会関西支部が行なっている「まちづくり賞」の選考でも、その点が選考に落ちた理由とされている。これぞまさしく「まち。街(がい)」(間違い)の元である。「こんな難しい方式では市民はついてきません、もっと軽い行動の手法を採用すべきです」と、大学教授に揶揄されたことを思い出す。軽い“まちづくり”を続けてまちの課題が解決できるのだろうか? 入り口では重要な手法ではあるが、そればかりでは“まちづくりごっこ”でしかないだろう。

「ダジャレで語るまちづくり」の漫談は受けるが、通訳は重要だが難しい、いみじくも幕末期に通弁として活躍したジョン万次郎が土佐沖に帰国した日が私の誕生日である。

折角取り組んだ「交通社会実験」も、行政・地元ともに意欲を失い、駅前の交通問題が射程距離にないのが心残りである。「システム運用」の難しさを知り、今更ながら『生きる』の世界を痛感する。

かつてまちづくり専門誌を出すG出版社から企画されながら日の目を見なかった“ドン・キホーテまちに出る”しながら、社会変革は自己変革からと「豊中まちづくり研究所」は健在である。学位論文の末尾に「今後未完成の論を実践で埋めていく」と決意表明して、それを実践して喜寿を迎えてなお実践の中にいる。

ペランダにくる雀たちに“われと来て遊べや妻のない雀”と餌をやるが、柵に並んで用心深く様子見して無鉄砲な一羽に偵察させ安全を確認させて横取りする。その賢明さに驚嘆する。いつも“フライング芦田”みたいな奴はおらんあ。無私無欲な生き方を前に男の嫉妬で折角の仕組みを台無しにされた経験もないのだろうか?

目下、自治体職員のための遺書『はみだし公務員・芦田英機言動録』を執筆しながら、これからは役に立つのなら”ロージン(老人)バックのまちづくり”として控えておりましょう。(あしだ ひでき)

イケフェス大阪2021スペシャルツアー 日本建築協会Presents！ 「近代の大阪城址を歩く」リポート

生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪（OPEN HOUSE OSAKA）2021の連携プログラム「日本建築協会Presents！近代の大阪城址を歩く」が、2021年10月30日（土）に行われました。

同プログラムは協会の情報見学小委員会の委員が進行、引率し、史料研究会から橋寺知子、山形政昭、福原和則各先生、大阪歴史博物館の阿部文和学芸員に案内人として協力いただきました。

冒頭、指田孝太郎会長は、協会の100年を超える歴史や会員の多様性などを紹介したあと、「昨年はバーチャル開催となりましたが、今年は専門の先生方から興味深い話を生で聞けると思います。好天の下、心ゆくまで大阪城址の探訪を楽しんでください」と挨拶されました。



ツアー参加者を前に挨拶する指田会長（左から3人目。大阪歴史博物館で）

出発地点となった大阪歴史博物館の敷地からは古代の都「難波宮」の遺構が発見されており、阿部学芸員から1階床の強化ガラスを通して見られる地下の柱穴跡などについて解説がありました。



床の強化ガラスを通して見られる「難波宮跡」の遺構について解説する阿部学芸員（左端）

同館を出て最初に訪れたのが、今年、登録有形文化財に登録された大阪府庁本館。現役最古の都道府県庁舎とのことで、それまでの公共建築で多く用いられた和洋折衷の「帝冠様式」とは異なる、当時としてはシンプルで装飾性を極力排した新しい造形にトライしたとの説明がありました。

いよいよ大手門をくぐって大阪城公園内へ。西の丸庭園では、大名茶人としても有名な小堀遠州が手掛けた重文「千貫櫓」「乾櫓」の解説に耳を傾けながら「大阪迎賓館」へ歩を進めました。1995年のAPEC国際会議に合わせて京都・二条城の白書院をモデルに造られた純和風建築です。漆喰風の外壁、こけら葺風の屋根などいかにも木造っぽく見えます

が、実は鉄骨造と聞き、皆さん驚きの様子でした。

庭園を歩くにつれて陽光を浴びて輝く天守閣が眼前に迫ってきました。昭和初期の最先端技術で建造された鉄骨鉄筋コンクリート造の天守閣ですが、築城に当たっては大坂夏の陣図屏風などごく限られた史料を参考に綿密に考証し、豊臣期天守の復元を目指したそうです。

本丸西側の空堀沿いを歩いていくと、石垣を貫く2本の鉄管の姿が目に入ってきました。説明によると、明治期の水道管で今も現役とのこと。一見無粋に見えますが、当時、蔓延



大阪府庁本館前で意匠について説明する福原先生



堀を横切って石垣を貫く水道管。明治期に造られ今も現役

していた感染症を防ぐことを目的に、城が立地する自然の高低差を利用して上水道を引いたという先生のお話に、参加者は大いに興味を引かれた様子でした。公園入口にあった大



大阪迎賓館を前に解説する山形先生（左の白いズボンの男性）。同館は現在、宴会場などとして利用されている

手前配水場とともに、水道インフラとしての大阪城の貴重な一面を垣間見たようでした。

最後の見学場所はミライザ大阪城。旧陸軍第4師団司令部庁舎の建物を維持しながら、大阪市立博物館となり、現在は土産物屋などの複合施設にリノベーションされています。当時の大阪城公園整備事業は市民からの寄付金150万円で賄われ、うち天守閣建造費47万円に対し、司令部庁舎建設に倍近い80万円が投じられたことにも驚かされました。



旧陸軍第4師団司令部庁舎の建物をリノベーションし、複合施設としてオープンしたミライザ大阪城

2時間余りのツアーを終えた参加者は、疲れも見せず満足感いっぱいの表情でした。終了後のアンケートにも「ふだん知ることができない大阪城の話をたくさん聞けて良かった」「来年も期待したい」などの意見が多く寄せられていました。

(引率に当たった情報見学小委員会の委員コメント)

●奥村朋孝副委員長（鴻池組）

昨年はやむを得ずバーチャルツアーとなったが、ツアー参加者が興味深そうに説明に聞き入る様子を見、人の体験とはリアルな空間に身を置いてこそ得られるものと再認識した。大阪で勤めるようになって30年近くになるが、大阪城周辺は近くて知らないエリアとして残り続けてきた。それは大阪城が当時の姿ではなく、近代の人々によって作られた存在であったことが私の中で近づくことのない一因であったのだが、今回、大阪城だけではなく大阪城周辺の歴史性や大阪市民のエリア整備にかけた思いの一端を皆様と一緒に知る機会を得、興味深い体験ができたことに感謝している。

●稲葉一秀委員（大林組）

今年度から委員となり、初のイベント裏方参加でした。いつもWEB会議のため準備集合の際は「初めまして」で少し緊張していました。絶好の秋晴れの中、久しく訪れていない大阪城を歩き、講師の方の説明がとてもわかりやすく充実した時間を過ごすことができました。特に大阪城の復元デザインの丁寧な解説は参加者の皆様も興味を持って聞かれていました。やはり対面イベントは素晴らしい。事務局の皆様、ご準備ありがとうございました。

●松森織江委員（東畑建築事務所）

秋晴れの気持ちのいい空の下、先生方の熱心で興味深いお話を伺いながら巡るリアルツアーはとても楽しいイベントでした。大阪で生まれ育ちながら、大阪城のことは知っているようで知らないもの。2代目天守閣焼失後実は300年近くも天守がなかったことや、府庁やミライザが当時非常に意欲的なモダンデザインであったことなど、沢山の驚きや学びがありました。大阪城址の歴史が折り重なった奥行き深さを実感できる貴重な体験になりました。ありがとうございました。



西の丸庭園から仰ぎ見る大阪城天守閣

チラシ封入サービスのご案内

会員限定

貴社の広告チラシを「建築と社会」発送と“同封”しませんか。
チラシをご提供下さい。

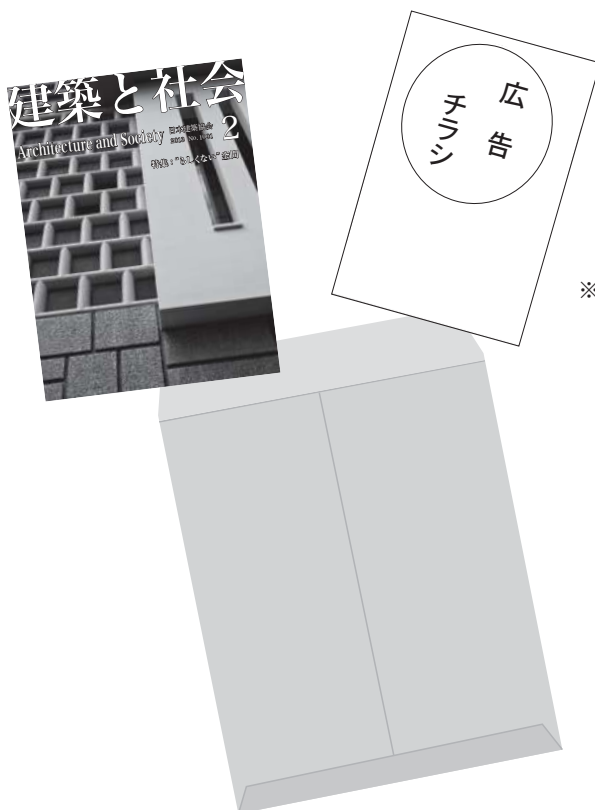
料金 1回につき **20,000円** (税別)

当協会でチラシをプリント（カラー片面）した場合20円／枚必要です。

申し込み方法：申込用紙にご記入いただきFAXまたはE-mailでお送り下さい。

お問合せは（一社）日本建築協会まで

TEL.06-6946-6981 FAX.06-6946-6984 E-mail:koukoku@aj.or.jp



※チラシサイズ：A4版
パンフレット：20頁程度迄

申込用紙 きりとり

会社名		
ご連絡先 (住所・担当者名・部署名)	住所 担当者名	部署名
ご連絡先 電話番号・E-mail	電話番号 E-mail：	



U-35委員会企画 talk baton 19 活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



トークバトン当日の様子 加賀氏と写経持つ参加者



寺社建築という言葉もあるとおり、建築と仏教は密接に関係している。しかし今回のトークバトンでは、建築様式としての仏教に焦点を当てるのではない。日常生活の中にある仏教に注目してみたい。今回のゲストである加賀氏は三津寺の副住職を務める傍ら、仏教の新しいあり方に挑戦し宗派を超えた僧侶たちの団体であるフリースタイルな僧侶たちの代表も務める。既成概念に執着することなくお寺・仏教の新しいあり方を見つめ直す加賀氏の活動に迫りたい。

■カオス（混沌）とコスモス（秩序）—そもそも宗教とは

加賀 まずは皆さんのことを知りたいと思います。今、皆さんが日常何をされているのか、自己紹介を兼ねて、最近のカオス（混沌）とコスモス（秩序）を教えて頂けたらと思います。

— 仕事、家庭、子供、飲み会、結婚、介護などそれぞれが自身の私生活になぞらえながら最近のカオスとコスモスを織り交ぜて自己紹介を行った。

加賀 仏教についてお話する前に「宗教って何のためにあるのか」というところからお話していこうと思います。私はお寺の生まれではありますが、昔からものづくりが好きなこともあり京都大学地球工学科へ入学しました。大学に入ると燃え尽き症候群というんですね、ふと目標を見失い、麻雀とバイトに明け暮れる日々でした。そんななか、たまたま障害を持った子供達と富士山に登る機会があり、子供達の純真な心に自分の今までのものの見

方に対して色々気づかされました。そこで自分の生き方をもう一度見つめ直そうと思い、自分のルーツであるお寺で修業をしました。1年間の修行中にすっかり仏教の世界観に魅了され、現在は三津寺の副住職として仏事を行っています。

先ほど、皆さんのカオスとコスモスをお聞きしましたが、あくまで平和における日常のカオスなんです。私は宗教というのはカオスとどう向き合っていくかがスタートになると思います。仏教が生まれた2500年前は、自分ではどうにでもならない戦争・病気・天災など、日々生と死に向き合っているような状況でした。このような状況をなんとかコスモスの状態に近づけ自分を理解させるために宗教が生まれてきたのではないかと思います。

■物語と哲学—宗教特性の違い

加賀 宗教の特性には2つあると思っています。「物語性と哲学性」です。例えば、ユダヤ教徒は神様と契約している選ばれた民族なのだ、神様は私たちが聖なる民族であるかどうかを試すためにいろんな試練を与えてくるのだと、そんな大きな物語を創りアイデンティティを確立し、混沌した状況から秩序を作っていたんですね。ヒンズー教、キリスト教、イスラム教など、また日本には神道があります。これらは物語性の宗教です。物語を作ることによって、自分たちに起こる様々なつらいことを理解させていこうという考え方です。自分たちの物語を中心としているため世界観も違うわけで、その物語は間違っているなど、宗教間の争いも生まれるわけです。

一方で仏教はちょっと雰囲気は違います。仏教は、生きる哲学と言われたりしますが、自分に起こる様々な悲劇、苦しみをしっかり見



加賀氏の副住職としての活動 護摩焚きを行う様子

Member's Forum

会員投稿の頁

つめ分析し、その原因を追求していこうといった宗教です。仏教の哲学というのは誰でも実践できます。キリスト教であるから座禅ができません、座禅をしたのでキリスト教を抜けてくださいということにはならないわけです。これが物語を中心とし自分のアイデンティティを確立している宗教と哲学を中心にしている仏教の違いです。

参加者 仏教以外で哲学を中心としたものはないのでしょうか？

加賀 私が知る限りはないと思います。仏教にすべて集約されているのかなと思っておりまう。仏教はその地域ごとの哲学を吸収しながら、大きくなっていきましたので、そういう意味合いで建築とも近いのかなと思っております。また、日本は宗教のサラダボールなんていわれたりしますが、宗教に対して非常にカジュアルで特徴的ですよね。ただし、どの宗教も同じですが向き合ったものに対してはやっぱり真摯に向き合わなければいけないですし、それぞれの宗教に対して真摯に向き合っている人がいるということを決して忘れてはいけないと思います。

■仏教における真理―「無常苦無我」

加賀 宗教は「儀礼と真理」この2つの側面を持っています。例えばキリスト教には安息日があります。神様との契約なのでこの日は絶対休むわけです。安産祈願、七五三、お祭など、日本では宗教的に大切な儀礼イベントがありますね。

真理とは哲学を突き詰めていった先にあるもので、私たちが体験している法則、統一のルールが世の中にはありますという考え方です。ちなみに皆さんに質問ですが建築における真理とはなんでしょう？



フリースタイルな僧侶たち 歴代代表の皆様

― 加賀氏の問いかけに、一同が沈黙した。(建築における真理が理解できれば、良い建築もおのずとわかるのであろうか。)

加賀 難しいのは仏教もそうですが、哲学を持っているものという意味で、私は仏教と建築は非常に考え方が近いのではないかと思います。時代のルールやニーズによらない変わらないものを真理といいます。仏教における真理はなにかというと「無常苦無我」です。仏教においても、服装や作法などの儀礼は少しずつ変わってきていますが、真理というものは変わっていません。

「無常」は一瞬でも同じ状態がない、常に物事はうつり変わっていくことを指します。例えば、昨日の皆さんと今日の皆さんは違いますし、もっと言えば、今発言している私と発言し終わった私とは、ちょっと違うんですね。無常の世界が仏教のベースになっています。でも、私たちはその無常の世界観を頭で理解していても心で理解できないので様々な苦しみや日常生活で享受しているんですね。「苦」の代表は老、病氣、死、生。自分の思い通りにならない4つの苦しみがあります。「無我」とは、私たちは一人だけで生きているわけではない、私という存在があるのは父と母がいたからで、もっと言えば、ここに床があって、この衣服を着ているから、今日、皆さんの前にこうしてお話ができているわけです。

つまり、「無常苦無我」を頭でわかるだけでなく、心でちゃんとわかるためにはどうしていきましようかということを経験的に解説するのが仏教です。おそらく、皆さんが想像していたキリスト教などの物語系の宗教とは少し毛色が違うかと思います。ただ、心でわかるためには哲学だけでなく、仏教の儀式儀礼、目に見える仏像を作り世界観を理解すること



フリースタイルな僧侶たちの活動 フリーペーパーを配る加賀氏

も必要で、仏教の中でも様々な宗派やお経が生まれたりします。

― この後、仏教の教えである「貪と瞋と痴、分析と直感、空と仮と中、自利と利他と不二、戒律と禪定と智慧、深信と修行」について加賀氏から有難いお言葉を学ばせて頂いた。

■“U35”と“フリースタイルな僧侶たち”

参加者 加賀氏は「フリースタイルな僧侶たち」というグループ活動を行っていらっしゃると思いますが、宗派を超えて若いお坊さんが集まって活動している点と、私たちU-35委員会の活動について、共通点もあるように感じています。活動について少し伺いできますでしょうか？

加賀 なぜ若い人たちが集まるんでしょうかね？ 仏教団体にも青年会がありますが、最近では若い方が少なく、その会を存続させるのが目的になっていてよくわからない状況になってますよね (笑)。

参加者 U-35委員会も日本建築協会内の組織ですが、若手の建築業界の横のつながりを作り、視野を広げるためのプラットフォーム作りを目的としてスタートしました。私たちの活動であるトークボタンは建築分野だけで集まるだけでなく、さらに視野を広げていくためにはどうすればよいかということを考え、このように他分野のゲストの方々とお話を



発行されているフリーペーパー

行っています。

加賀 どの業界も同じかもしれませんね。落ち着いて安定し秩序だってくると、今度はその秩序が不安になってくる。そこで、何か他のものを取り入れてカオスな状態に引っ掻き回し、先ほどの秩序は本当にあったのかを確認するみたいな。年齢を重ねてくると安定しきってしまい、積み上げてきた秩序を壊すことが怖くなってくるんですかね。若いうちはそれを壊すことを厭わないというっていうのは1つあるかもしれません。破壊神みたいな（笑）。

お坊さんの業界は特にそう思いますね。今までこういう風にやってきたからといって秩序が完成してしまう。一方で、仏教というのは無常を説くわけですね。こっちが安定してしまっても、向こうが変わっていくわけですから、やはりこちらも変わっていくかなきゃいけないのに、なかなか壊せないという。フリースタイルな僧侶達のスタートは本当にそうなんです。仏教の布教というのは、お勤めなど決まりきったことだけだったわけですね。お坊さんと檀家さんとの関係も決まりきったものになっていました。でも時代と共に、檀家さんの方がちょっとずつ変わってくるわけですよ。お坊さんの団体がフリーペーパーを作って道で配るなど、当時はみっともないことを始めてという批判もあったと思いますが、仏教だって外への視野を広げる必要があると私は思っています。

一方で外のものを入れていくことに危険な面もあって、真理を見失うことだと思います。仏教というのは無常苦無我っていう絶対的な真理があって、その上に物事を組み立てていかなければいけないのに、新しいものを作ってみた結果、それが真理から道を外れたもの

になってしまうことは気を付けないといけません。だから各業界には、絶対的な真理として先輩たちがいて、その下にカオスを取り入れようと現場に寄り添った若い方たちがいるといった構図になるのかもしれないですね。私はフリースタイルな僧侶たちの3代目代表ですが、代を経るごとにその意識が薄れてしまっているというか、破壊神側にも秩序ができてしまっているんですね。

参加者 U-35委員会も活動始めて9年目で、正にフォーマットしてきている部分が悩みでもあり今後の課題かなと思っています。

■絵写経体験

加賀 本日、皆様に写して頂くのは不動明王様という仏様です。この仏様は煩惱を縄で縛り、背中の炎で焼き尽くしてくれる。荒波の中で先頭に立って私たちが進むべき道を示しているというのがこの仏様のお姿です。また、お経はさまざまな悪行を反省しますと書かれています。アンダー35歳の皆さんは懺悔することも多いだろうと思いこの絵写経を選びました（笑）。しんどいなと思ったとき、そのことをしっかりと自分で見つめ、何が原因なのかを理解するというのが、仏教や哲学、瞑想のスタートになっています。この写経を通して、今自分が何を見つめているのか自分の中でしっかりと理解して頂ければと思います。——加賀氏の儀礼の中、それぞれ写経を行い、あつという間に30分が過ぎた。

加賀 皆さんが書かれたものは世間的な上手下手はあるのかもしれませんが、結局は自分自身が目の前に現れているわけです。その書いたものに対して、もう少しこうしておけばよかったと思うこと含めて出来上がったものなのです。今日書いたものと明日書いたもの

のは必ず違うわけで、今描かれた自分のものをしっかりと受け止めてあげたらよいと思います。

■一滴潤乾坤

加賀 最後に私が好きな仏教の言葉をお伝えしたいと思います。イッテキケンコンウルオスと読みます。一滴の水でも乾いた土を潤す力があるという意味です。例えば、夏の暑い日に雨がサーッと降って葉っぱから一滴の水がポトッと落ちる。それを見て私たちはなぜかすがすがしい清涼感を感じるわけです。その一滴の水が大雨に匹敵するわけです。一方で、その一滴の水は土に吸収され、湧き水になって川に流れて、そして海に注がれ、大海の一員になるわけですね。でまた大海から水蒸気になって、雨になって山に降ってまた一滴となるわけですね。本日のトークバトンを通じて、色々なお話をさせて頂きました。私のお話が一滴となり皆様の心の中の水が足りていない部分に少しでも降り注いでいたらいなと思って、本日の会を終了したいと思います。

参加者 貴重なお話をありがとうございました。（文責：水野）

talk baton 19 を終えて

日々目まぐるしい世の中でしっかりと自分を見つめ直すコスモス（秩序）の大切さと、外のものを受け入れカオス（混沌）を取り込む勇気を貰いました。地域の文化や哲学に根付く仏教と建築には共通点もあり、また、加賀氏が行っている活動からU35での活動の意義も改めて感じることができ、新しい知見を得るため他分野からのインプットというトークバトンの目的として有意義な会となりました。

対 談 日：2021.07.24

場 所：三津寺 墓地 松林庵
（大阪市中央区）

モデレーター：水野裕介（大成建設）



三津寺様ではお勤めの一つとして絵写経の会を行っている



参加者が実際に写経・写仏した不動明王像

1 深堀隆介展「金魚鉢、地球鉢。」



写真 2010年

金魚の持つ神秘性に魅了され、創作を続ける深堀隆介。透明樹脂にアクリル絵具で金魚を描くという、独自の斬新な手法で注目を集める現代美術家である。

極めて独創的な深堀の技法は、器の中に樹脂を流し込み、固まった表面にアクリル絵具で金魚を少しずつ部分的に描いていき、さらにその上から樹脂を重ねるというものである。そうした作業を繰り返すことにより、絵が重なり合い、まるで生きているかのような金魚が表現され、圧倒的な立体感をもって観るものに迫る。その生き生きとしたリアリティは、平面である絵画作品と立体作品の境界に揺さぶりをかける革命的絵画—2.5D Painting—と言えるだろう。深堀は、国内はもとより今や世界的にも高い評価を受け、近年ではライブペインティングやインスタレーションにも力を入れ、表現と活動の幅を広げている。

約300点もの深堀作品を展示する、東京の美術館では初めてとなる本格的な展覧会である。絵画でありながら立体的な躍動感にあふれ、不思議な美しさを湛えた“深堀金魚”を存分に楽しむことができるだろう。

期 間 12月2日(木)～2022年1月31日(月)

10:00～17:00

※入館は16:30まで

休 館 日 12/31、1/1

会 場 上野の森美術館

東京都台東区上野公園1-2

TEL.050-5541-8600 (ハローダイヤル)

観 覧 料 一般1,600円、高大生1,300円、小中生800円

*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

*未就学児は無料

*小学生以下は保護者同伴で入場のこと

2 生誕160年記念 グランマ・モーゼス展 素敵な100年人生

グランマ・モーゼスは、無名の農婦から、70代で本格的に絵を描き始め、80歳の時ニューヨークで初めての個展を開いた。身近な出来事や自然への温かなまなざしを映した作風とそのユニークなキャリアは、当時、大恐慌や第2次世界大戦を経験し疲弊していたアメリカの人々の心をとらえ、一躍人気作家となる。日本でも1980年代に初めて紹介されて以来、根強いファンが多くいることで知られている。



アンナ・メアリー・ロバートソン・
“グランマ”・モーゼス
《シュガリング・オフ》
1955年/個人蔵
(ギャラリー・セント・
エティエンヌ、ニューヨーク寄託)
©2021,
Grandma Moses Properties Co., NY

今回、生誕160年を機に特別に企画された本展は、国内で開催される回顧展としては16年ぶり。第1章「アンナ・メアリー・ロバートソン・モーゼス」、第2章「仕事と幸せと」、第3章「季節ごとのお祝い」、第4章「美しき世界」から成る4章構成により、最初期の作品から100歳で描いた絶筆、また愛用品や関連資料まで、日本初来日を含む約130点を展示する。自然や素朴な暮らしを愛し、たくましく誠実に、素敵な100年を生きたモーゼスおばあさんの世界を紹介する。

(※本展覧会は、新型コロナウイルス感染症対策を十分講じて開催します。)

期 間 2022年2月27日(日)まで

10:00～18:00

※入場は17:30まで

休 館 日 月曜日(ただし1/10は開館)、

12/29-1/3、1/11

会 場 世田谷美術館 1階展示室

東京都世田谷区砧公園1-2

TEL.050-5541-8600 (ハローダイヤル)

観 覧 料 一般1,600円、65歳以上1,300円、

高大生800円、小中生500円

*障がい者手帳等をお持ちの方は500円。ただし小中高生の障がい者は無料。介助者(当該障がい者1名につき1名)は無料

※入場は日時指定制となります。詳細は公式サイト

(<https://www.grandma-moses.jp/tokyo/>) をご確認ください

3

ザ・フィンランドデザイン展
自然が宿るライフスタイル

豊かな自然と美しいデザインの宝庫、フィンランド。幸福度世界一を誇る*この国で長く使い続けられているプロダクトの数々は、「大いなる自然を忘れない」という思想に裏付けられている。そのようなデザインに囲まれたフィンランドの人々は、大地からの恩恵を生活に取り入れるライフスタイルを愛してきた。

1930年代から70年代にかけて、今も広く知られるデザイナー、建築家、アーティストたちが登場し、彼らの活躍によって今日まで続くフィンランドデザインが確立されたが、彼らのインスピレーションの

源は、やはりこの国に広がる豊かな自然であった。本展では、ヘルシンキ市立美術館（HAM）監修のもと、マリメッコやフィンレイソンのテキスタイル、カイ・フランクのガラス工芸の他、陶磁器や家具など、同時代にデザイン・制作されたプロダクトとともに、同時代の絵画などもあわせて展示。約250点の作品と約80点の関係資料で、時代を超えて愛される名品が生み出されたフィンランドデザインの歩みを紹介する。自然とともに生きる暮らしのなかで生まれた、フィンランドの人々の豊かな発想力と彩りにあふれる世界を楽しむことができるだろう。

（※国連「世界幸福度報告書」2021年版による）

期 間 12月7日(火)～2022年1月30日(日)
10:00～18:00(金・土曜日は21:00まで)
※入館は各閉館の30分前まで

休 館 日 1/1

会 場 Bunkamura ザ・ミュージアム
東京都渋谷区道玄坂2-24-1
TEL.050-5541-8600(ハローダイヤル)

観 覧 料 一般1,700円、高大生1,000円、小中生700円
*学生は要証明(小学生を除く)
*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は半額
*未就学児は入館無料

※会期中の全ての土日祝、および最終週の1/24～30は【オンラインによる入場日時予約】が必要となります。

詳細は公式サイト(<https://www.bunkamura.co.jp/museum/>)をご確認ください



本展宣伝ビジュアル A
(オイヴァ・トイッカ「[ボムボム]花瓶」、
セッポ・サヴェス「アンニカ・リマラ
「リンヤヴィーッタ」ドレス、
ヴォッコ・ヌルメスニエミ「ガッレリア」
テキスタイルデザイン」、アルヴァ・
アアルト「[サヴォイ]花瓶」)

4

特別展 貝殻旅行
—三岸好太郎・節子展—

三岸好太郎《のんびり貝》
1934(昭和9)年 油彩、キャンバス 50.9×107.4cm
北海道立三岸好太郎美術館蔵

作風を変遷させながら、一貫して独自のロマンティックな世界を描き続けた夭折の画家・三岸好太郎(1903-34)。そして、女性洋画家の先駆的存在として苦難の道を切り拓きながら、重厚な色彩とマチエールに到達した三岸節子(1905-99)。

本展では、二人の「出会いから100年」を記念し、出会いから結婚、「貝殻旅行」と称した最後の夫婦旅行と好太郎の急逝、その後の節子の奮闘の軌跡を絵画によってたどる。恋人として、夫婦として、愛し、高め合い、追慕しながら、洋画史にその名を刻む画家となっていった二人の波乱万丈の「旅路」は、いかなるものであったのか。好太郎の作品46点と節子の作品37点および、絵画のモチーフとなった貝殻やインカの壺などのコレクションも展示する。

期 間 2022年2月13日(日)まで
10:00～17:00
※入館は16:30まで

休 館 日 月曜日(ただし1/10は開館)、12/29-1/3、1/11
会 場 神戸市立小磯記念美術館

神戸市東灘区向洋町中5丁目7
(六甲アイランド公園内)
TEL.078-857-5880

観 覧 料 一般800円、大学生400円
*高校生以下無料
*大学生・高校生・中学生は要証明
*神戸市在住の65歳以上の方は400円(要証明)
*障がい者手帳またはスマートフォンアプリ「ミライロID」の提示により無料

本欄掲載の1～4の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手(84円)を日本建築協会事務局までお送りください。

事情により開催内容が変更、もしくは中止となる場合もございますので、会場WEBサイト等で最新情報をご確認ください。

常任理事会

第6回常任理事会

10月27日(水) 17:30~19:20

ドーンセンター&WEB会議 指田会長ほか11名

- 議 事 (1) 2021年度上半期事業執行状況
(2) 2021年度上半期収支予算執行状況
(3) 第1回支部長会議(通常理事会)
【11/24】開催方法
(4) 特別編集委員会
(5) 「建築と社会」誌掲載記事の外部
(他社) イントラネット配信
(6) 建築3団体の事業・委員会活動への共有ツール活用状況
(7) 第67回工高生デザインコンクール審査結果報告

編集委員会

第7回広告企画・編集合同委員会

10月21日(木) 18:00~19:10

WEB会議 中原委員長ほか8名

- 議 事 (1) 11月号特集 構造学から見る世界
(2) 12月号特集 建築とインテリアを創る真のプロフェッショナル(仮)
(3) 1月号特集 コラボ特集「建築と社会の夢をつなぐ」(仮)
(4) 2月号特集 第28回私の空間作法
(5) 3月号特集 東海支部特集
(6) その他
①2022年4月号編集委員会特集テーマ
②今後の編集委員会の進め方

第3回計画系分科会コラボ委員会

10月20日(水) 19:00~20:00

WEB会議 田中幹事ほか6名

議 事 (1) 2022年1月号コラボ特集

第6回設備分科会

10月6日(水) 18:00~19:30

WEB会議 橋本幹事ほか6名

- 議 事 (1) 「設備の頁」の企画
(2) 2022年度特集年間テーマ案、希望企画

第4回施工材料分科会

10月12日(火) 17:00~18:10

協会&WEB会議 秋竹委員長ほか6名

- 議 事 (1) 2021年特集の振り返り
(2) 次期幹事選出
(3) 2022年度特集年間テーマ案、分科会特集

第7回作品作風小委員会

10月28日(木) 19:00~

WEB会議 太田小委員長ほか8名

- 議 事 (1) 作品の掲載状況、予定
(2) gallery掲載報告、予定

第9回特別編集委員会

10月14日(木) 18:03~19:50

WEB会議 中原委員長ほか12名

- 議 事 (1) 常任理事会の報告
(2) 年度の年間テーマと各分科会の割り当ての検討
(3) その他

事業委員会

大阪都市景観建築賞令和3年度最終審査

10月12日(火) 18:30~20:30

WEB会議 中尾委員長

- 議 事 (1) 第40回大阪都市景観建築賞(愛称大阪まちなみ賞)最終審査立ち合い

出版委員会

第6回出版委員会

10月26日(火) 16:00~17:20

協会&WEB会議 西委員長ほか8名

- 議 事 (1) 既刊書籍経過報告
(2) 制作進行中の書籍
(3) 今後の出版テーマ
(4) 建築セミナー

教育委員会

第1回工高生教育小委員会

10月7日(木) 18:05~20:00

日本建築協会会議室 橋寺委員長、谷口小委員長ほか4名

- 議 事 (1) 第67回工高生デザインコンクール応募作品の予備審査
(2) 審査会、表彰式の役割分担

第7回大阪府住まい・まちづくり普及協議会

10月15日(金) 10:30~12:00

WEB会議

報告・議題

- (1) 出前講座の予定と実施報告
(2) 補助金申請の検討報告

未来創生プロジェクト

第6回建築次世代委員会

10月14日(木) 18:30~20:15

WEB会議 菅原委員長ほか8名

- 議 事 (1) Web見学会その他の本年度事業
(2) 建築次世代委員会ロゴの検討

第5回2040委員会

10月18日(月) 19:30~

PARK Lab. & WEB会議 駒井リーダーほか7名

- 議 事 (1) 企画内容
(2) 今後の委員会活動

第7回U-35委員会

10月1日(金) 19:30~

WEB会議 平岡リーダーほか9名

- 議 事 (1) 活動/予定
(2) 次回予定/その他

U-35委員会AAF分科会

10月7日(木) 19:30~

WEB会議 平岡リーダーほか5名

議 事 (1) 当日スケジュールほか

U-35委員会

10月24日(日) 13:00~15:00

WEB&うめきたSHIPホール

参加者 平岡リーダーほか56名

トークイベント「設計者のしごと」一組織で働くU-35世代と建築一

審査会

第67回工高生デザインコンクール審査会

10月16日(土) 13:30~17:00

OMMビル地下1階ギャラリー

出席者 審査員 神谷浩司審査員長ほか8名

工高生教育小委員会委員

谷口小委員長ほか3名

設計課題「[新しい] オフィス」

審査結果/応募学校数23校

応募点数 149点

最優秀賞1点、優秀賞2点、入選7点

その他

青年技術者選考委員会会議

10月8日(金) 18:00~19:00

WEB会議 中原選考委員長ほか7名

- 議 事 (1) 来年度の青年技術者募集要項の内容、選考基準について検討

生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2021連携事業

スペシャルツアー 日本建築協会Presents! 近代の大阪城址を歩く

10月30日(土) 13:30~15:30

大阪歴史博物館~大阪城公園

参加者 16名

案内人 阿部文和氏(大阪歴史博物館学芸員)

橋寺知子氏(関西大学准教授)

福原和則氏(大阪工業大学教授)

山形政昭氏(大阪芸術大学名誉教授)

指田会長、情報見学小委員会・奥村副委員長ほか7名

委 員

編集委員会(2021年度)

■副会長

川合 智明

■編集担当理事

勝山 太郎

佐藤 栄一

◎中原 岳夫

橋寺 知子

西 博康

菅野 忠司

山田 淳

吉村 英祐

◎副委員長

○恵本涼太郎

○米山 剛史

■特集小委員会

■計画分科会

★計画系

飯田 匡

鈴木 克彦

△田中 直人

林 雄太

松田奈緒子

守井 辰

吉村 英祐

★建築計画系

桑原 悠樹

下坂 浩和

東 拓郎

△樋口 展寛

瀧田 暁

渡部 剛

東 一彦

平岡 翔太

★インテリア・住宅系

赤川貴生友

東 奈生子

今井 充彦

高橋 伸明

川合 隆之

河西 孝平

△黒柳 亮

ベリー史子

■構造分科会

宇野 綾真

岡田 健

神子 河澄

岸本 光平

古島 正博

正野 和司

瀧野 敦夫

竹本 孝輔

△萩原 学

向井 洋一

■設備分科会

木谷 晃之

北野 勝也

寺井 千佳

仲村 憲一

夏井 重行

△橋本 直樹

榊井 貴廣

宮崎ひろ志

森山 正和

山口 拓也

茂木麻美子

■施工材料分科会

門野 陽

桜井 和男

秋竹 教行

藤丸 啓一

△河合 智寛

吉田 正友

岡田 淑子

吉田 克寿

■法令分科会

太田可奈子

奥山 陽二

垣内 明

△河野 学

■作品作風小委員会

居内 章夫

石井真由美

稲垣 和江

▲太田 栄治

加嶋 章博

片岡 政規

貴志 泰正

倉瀬奈千子

澤田 純一

△高木 秀晃

輦野 淳司

西田 佳代

藤原 寛

平野 尉仁

増田 敬彦

■広告企画委員会

小川 雄介

金築 雄

小山 昭

野山 将男

藤田 昌宏

▲前田 衛

山辻 直樹

(順不同)

◎委員長

○副委員長

▲小委員会委員長

△幹事・小委員会

副委員長

印刷 2021年11月26日

発行 2021年12月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪府中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 ㈱中島弘文堂印刷所

定価 1254円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

**お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるように**

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社 日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。

1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：4月号～翌年3月号までの1年間

掲 載 料：48,000円（消費税込み）

サ イ ズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。

※原稿は1年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人 日本建築協会 内山・井筒

TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984 E-mail：koukoku@aj.or.jp

企画：日本建築協会 発行：学芸出版社

出版図書一覧

当協会会員の方で、当会でのご購入を希望される方には、特価：本体価格の1割引＋税にて販売しております。

詳しくは（一社）日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984、E-mail soumu@aaj.or.jp）まで。

最新刊 2021年8月発行

直感で理解する！建築デザイナーのための構造技術の基本

難しい数式は必要最小限！「いい建築デザイン」はどんな構造技術に支えられているのかを文章と手描きイラストでやさしく解説する「直感」シリーズ第3弾。

著者 山浦晋弘
A5判 216ページ
定価 本体2,500円＋税

近刊 2021年2月発行

図解 住まいの設備設計 暮らしやすさから考える家づくりのポイント

玄関・洗面室・寝室など、住まいの10の空間別に、生活行為に適した設備設計の考え方をわかりやすい2色刷イラストで紹介。

著者 堀野和人・加藤圭介
A5判 172ページ
定価 本体2,600円＋税

近刊 2020年12月発行

図解 建築と構造の接点 トラブル予防のツボ100

建築のトラブルにつながりやすい建築デザイナーと構造エンジニアの協業不足。その「接点」を建物のライフサイクル・構造種別に紹介し、トラブル予防のノウハウを具体的に解説。

著者 仲本尚志・馬渡勝昭・長瀬正
A5判 256ページ
定価 本体2,800円＋税

近刊 2019年4月発行

図解 間取りの処方箋 暮らしから考える住宅設計・改修のポイント

玄関・トイレ・LDK・寝室など住まいの8つの空間について、人が暮らしていく上で不都合が生じる「お困り間取り」と改善ポイントを分かりやすいイラストで解説。

著者 堀野和人・小山幸子
A5判 184ページ
定価 本体2,600円＋税

図解 建築と設備の接点 トラブル予防のツボ

仲本尚志・馬渡勝昭・赤澤正治 著
A5判 232ページ 定価 本体2,800円＋税

直感で理解する！ 構造力学の基本

山浦晋弘 著
A5判 216ページ 定価 本体2,400円＋税

図解 雨漏り事件簿 原因調査と対策のポイント

玉水新吾・唐鎌謙二 著
A5判 216ページ 定価 本体2,500円＋税

図解 住まいの寸法

堀野和人・黒田史香 著
A5判 200ページ 定価 本体2,600円＋税

図解 一発で通す！確認申請

野口元・平沢隆志・仲本尚志 著
B5判 192ページ 定価 本体3,200円＋税

直感で理解する！ 構造設計の基本

山浦晋弘 著
A5判 216ページ 定価 本体2,400円＋税

設計・監理・施工者のための 建築品質トラブル予防のツボ

仲本尚志・馬渡勝昭 著
A5判 248ページ 定価 本体2,800円＋税

改訂版 イラストでわかる 消防設備の技術

中井多喜雄 著 石田芳子 イラスト
赤澤正治・岩田雅之・西博康 改訂監修
B5判 216ページ 定価 本体3,000円＋税

プロが教える 住宅の植栽

藤山宏 著
B5判 176ページ 定価 2,800円＋税

〈プロのノウハウ〉シリーズ

建築現場のコンクリート技術

柿崎正義・玉水新吾 著
四六判 220ページ 定価 本体2,000円＋税

写真マンガでわかる 工務店のクレーム対応術

玉水新吾・青山秀雄 著
四六判 220ページ 定価 本体2,000円＋税

現場直伝！ 躯体工事の100ポイント

中川徹 著
四六判 220ページ 定価 本体2,200円＋税

写真マンガでわかる 建築現場管理100ポイント

玉水新吾 著
四六判 224ページ 定価 本体1,900円＋税